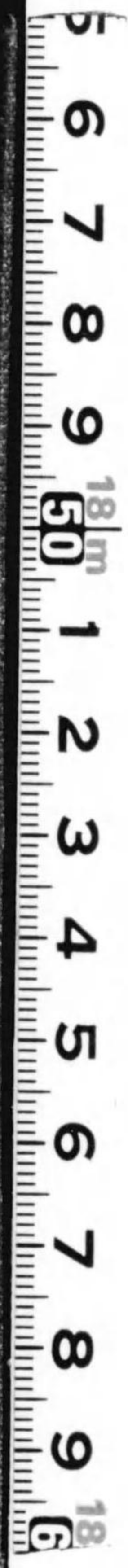


339
221



始



特232
198

平林治德著

女子國文大綱備考 (卷十)

立川書店發行

省務
6.8.25
正本



はしがき

一、備考は編者が各作品について、教授者の立場に立つて調べた所を試に書き記して教授者諸君の机邊に呈して参考に供するものであるから、一家言に過ぎないのではあるが、併し場合によつては本書活用の上に重要な役目を演ずる事もあるから、勝手な氣焰をあげるよりは、親切に調べ、念入に考へるといふ事を根本方針とした。

一、要旨 に於ては採擇の趣旨を述べた。

一、解釋 の部は特に出来る限り調査を正確にする事に努めた。そしてなるべく詳しく記述する方針にした。教授者諸君が参考せられるか否かは勿論隨意であるから、簡に過ぎるよりは詳に過ぎる方が備考としては適當であらうと考へたからである。

一、字句の解釋については手頃の辭書の説をそのまま、或は要約して掲げた。引用辭書には略符を示した。これによつて或場合には一々辭書を参照される手數

を省くことが出来れば幸せである。略符左の通り。

大日本國語辭典 (上田・松井)

大國

言海 (大槻)

言海

廣辭林 (金澤)

廣辭

大字典 (上田外四氏)

大字典

詳解漢和辭典 (服部・小柳)

詳漢

康熙字典

康熙

辭源 (上海商務印書館)

辭源

故事熟語大辭典 (池田)

熟語

諺語大辭典 (藤井)

諺語

日本百科大辭典 (三省堂)

百科

大日本人名辭書 (經濟雜誌社)

人名

國史大辭典 (弘文館)

國史

大日本地名辭書 (吉田)

地名

佛教大辭典 (織田)

佛敎

哲學辭典 (岩波)

哲學

文藝百科全書 (早稻田)

文藝

文藝辭典 (創元社)

文辭

新式辭典 (藤村)

新式

日本類語大辭典 (志田・佐伯)

類語

故事成語大辭典 (簡野)

成語

字源 (簡野)

字源

言泉 (落合)

言泉

一、小説及戯曲の一部分を採擇したものに對してはなるべくその全篇の梗概を揚げた。

一、鑑賞 に於ては編者の感想を主として述べたが、批評と云つた方が適當な場合もあり、又教授上の注意を加へた事もある。

一、各章の餘白を利用して雑話を記した。前後の章に多少關係のある話を主とし

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|
| 七、詩三篇 | 作者 | 二五 | 出所 | 二七 | 要旨 | 二七 | 段落 | 二七 | 解釋 | 二八 | 鑑賞 | 二八 | 參考 | 二九 | 參書 | 二九 | 備考 | 二九 | 備考 | 二九 |
| 五、宗論 | 作者 | 一〇〇 | 出所 | 一〇〇 | 要旨 | 一〇〇 | 段落 | 一〇〇 | 解釋 | 一〇一 | 鑑賞 | 一〇一 | 參考 | 一〇一 | 參書 | 一〇一 | 備考 | 一〇一 | 備考 | 一〇一 |
| 六、能樂の面 | 作者 | 一一四 | 出所 | 一一四 | 要旨 | 一一四 | 段落 | 一一四 | 解釋 | 一一五 | 鑑賞 | 一一五 | 參考 | 一一五 | 參書 | 一一五 | 備考 | 一一五 | 備考 | 一一五 |
| 挿繪 | 作者 | 一一三 | 出所 | 一一三 | 要旨 | 一一三 | 段落 | 一一三 | 解釋 | 一一三 | 鑑賞 | 一一三 | 參考 | 一一三 | 參書 | 一一三 | 備考 | 一一三 | 備考 | 一一三 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|
| 八、富嶽の詩神を思ふ | 作者 | 一五五 | 出所 | 一五五 | 要旨 | 一五五 | 段落 | 一五五 | 解釋 | 一五九 | 鑑賞 | 一五九 | 參考 | 一五九 | 參書 | 一五九 | 備考 | 一五九 | 備考 | 一五九 |
| 九、徒然草抄 | 作者 | 一八二 | 出所 | 一八二 | 要旨 | 一八二 | 段落 | 一八二 | 解釋 | 一八〇 | 鑑賞 | 一八〇 | 參考 | 一八〇 | 參書 | 一八〇 | 備考 | 一八〇 | 備考 | 一八〇 |
| 附 土籠御書 | 作者 | 二〇四 | 出所 | 二〇四 | 要旨 | 二〇四 | 段落 | 二〇四 | 解釋 | 二〇六 | 鑑賞 | 二〇六 | 參考 | 二〇六 | 參書 | 二〇六 | 備考 | 二〇六 | 備考 | 二〇六 |
| 一〇、日蓮 | 作者 | 二〇五 | 出所 | 二〇五 | 要旨 | 二〇五 | 段落 | 二〇五 | 解釋 | 二〇七 | 鑑賞 | 二〇七 | 參考 | 二〇七 | 參書 | 二〇七 | 備考 | 二〇七 | 備考 | 二〇七 |

| | |
|--------------|---------------|
| 参考 | 二四一 |
| 一、親鸞 | (口) 西田幾多郎 二四三 |
| 作者 | 二四三 |
| 出所 | 二四三 |
| 要旨 | 二四三 |
| 段落 | 二四三 |
| 解釋 | 二四三 |
| 鑑賞 | 二四三 |
| 参考 | 二四三 |
| 挿繪 | 二四三 |
| 附念佛 | 二六一 |
| 作者 | 二六一 |
| 出所 | 二六一 |
| 要旨 | 二六一 |
| 段落 | 二六一 |
| 鑑賞 | 二六一 |
| 挿繪 | 二六一 |
| 二、夕殘の星月夜(戯曲) | 坪内逍遙 二六六 |
| 挿繪 | 二七二 |

| | |
|-------------|-----|
| 作者 | 二六六 |
| 出所 | 二六六 |
| 要旨 | 二六六 |
| 段落 | 二六六 |
| 解釋 | 二六六 |
| 鑑賞 | 二六六 |
| 参考 | 二六六 |
| 挿繪 | 二六六 |
| 附實朝の歌 | 二六九 |
| 作者 | 二六九 |
| 出所 | 二六九 |
| 要旨 | 二六九 |
| 段落 | 二六九 |
| 解釋 | 二六九 |
| 鑑賞 | 二六九 |
| 参考 | 二六九 |
| 挿繪 | 二六九 |
| 三、新古今集の歌(歌) | 三〇〇 |
| 作者 | 三〇〇 |
| 出所 | 三〇〇 |

| | |
|-------------|------------|
| 要旨 | 三〇六 |
| 解釋 | 三〇六 |
| 鑑賞 | 三〇六 |
| 参考 | 三〇六 |
| 附鳳輦 | 三〇六 |
| 出所 | 三〇六 |
| 作者 | 三〇六 |
| 要旨 | 三〇六 |
| 段落 | 三〇六 |
| 解釋 | 三〇六 |
| 鑑賞 | 三〇六 |
| 参考 | 三〇六 |
| 一四、平家物語抄(文) | (平家物語) 三三一 |
| 總論 | 三三一 |
| 作者 | 三三一 |
| 出所 | 三三一 |
| 要旨 | 三三一 |
| 鑑賞 | 三三一 |

| | |
|-------------|----------|
| 挿繪 | 三三六 |
| 一、祇園精舎 | 三三八 |
| 出所 | 三三八 |
| 解釋 | 三三八 |
| 鑑賞 | 三三八 |
| 二、忠度最後 | 三四四 |
| 出所 | 三四四 |
| 段落 | 三四四 |
| 解釋 | 三四四 |
| 鑑賞 | 三四四 |
| 三、大原御幸 | 三五〇 |
| 出所 | 三五〇 |
| 段落 | 三五〇 |
| 解釋 | 三五〇 |
| 鑑賞 | 三五〇 |
| 一五、平家物語論(文) | 藤岡東圃 三六八 |
| 作者 | 三六八 |
| 出所 | 三六八 |
| 要旨 | 三六八 |
| 鑑賞 | 三六八 |

| | |
|----|-----|
| 要旨 | 三七〇 |
| 段落 | 三七〇 |
| 解説 | 三七二 |
| 参考 | 四〇八 |
| 挿繪 | 四一〇 |
| 作者 | 四二二 |
| 出所 | 四二二 |
| 要旨 | 四二三 |
| 段落 | 四二三 |
| 解説 | 四二三 |
| 鑑賞 | 四三九 |
| 参考 | 四四〇 |
| 挿繪 | 四四一 |
| 作者 | 四四七 |
| 出所 | 四四九 |
| 要旨 | 四五一 |

一六、光頼卿参内……(文)……(平治物語)

一七、横雲……(歌)……西行法師

| | |
|-------|-----|
| 解説 | 四五二 |
| 總評 | 四五二 |
| 参考 | 四五七 |
| 作者 | 四五九 |
| 出所 | 四五九 |
| 要旨 | 四六〇 |
| 段落 | 四六〇 |
| 解説 | 四六一 |
| 鑑賞 | 四六六 |
| 参考 | 四六七 |
| 天成の天才 | 四六八 |
| 作者 | 四六八 |
| 出所 | 四六八 |
| 要旨 | 四六九 |
| 段落 | 四七〇 |
| 解説 | 四七〇 |
| 鑑賞 | 四七六 |

附 西行法師

| | |
|----|-----|
| 参考 | 四七六 |
| 挿繪 | 四七七 |
| 作者 | 四七九 |
| 出所 | 四八三 |
| 要旨 | 四八二 |
| 解説 | 四八三 |
| 鑑賞 | 四九七 |
| 参考 | 四九八 |
| 作者 | 五〇〇 |
| 出所 | 五〇〇 |
| 要旨 | 五〇一 |
| 段落 | 五〇一 |
| 解説 | 五〇二 |
| 鑑賞 | 五〇三 |
| 挿繪 | 五一五 |
| 作者 | 五一六 |
| 出所 | 五一六 |
| 要旨 | 五一六 |
| 段落 | 五一六 |

一八、古今集の歌……(歌)

一九、削り屑……(夕)……(大鏡)

二〇、小野の深雪……(文)……(伊勢物語)

| | |
|----|-----|
| 出所 | 五一七 |
| 要旨 | 五一八 |
| 段落 | 五一八 |
| 解説 | 五二九 |
| 鑑賞 | 五二七 |
| 参考 | 五二八 |
| 作者 | 五三三 |
| 出所 | 五三三 |
| 要旨 | 五三三 |
| 解説 | 五三五 |
| 鑑賞 | 五三五 |
| 挿繪 | 五五七 |
| 作者 | 五六一 |
| 出所 | 五六一 |
| 要旨 | 五六二 |
| 段落 | 五六二 |

二一、土佐日記抄……(文)……紀貫之

二二、平安朝の散文……(口)……五十嵐力

| | |
|---------------------------------|-----|
| 解 釋 | 五九四 |
| 鑑 賞 | 五九七 |
| 挿 繪 | 五九八 |
| 二三、枕草紙抄 ……(文)……清少納言……六〇一 | |
| 作 者 | 六〇一 |
| 出 所 | 六〇一 |
| 要 旨 | 六〇二 |
| 壽 は 曙 | 六〇三 |
| 解 釋 | 六〇三 |
| 鑑 賞 | 六〇四 |
| す さま じ き も の | 六〇九 |
| 解 釋 | 六〇九 |
| 鑑 賞 | 六一二 |
| に く き も の | 六一三 |
| 解 釋 | 六一三 |
| 鑑 賞 | 六一六 |
| 雪いと高く降りたるを | 六一七 |
| 解 釋 | 六一七 |

| | |
|----------------------------------|-----|
| 鑑 賞 | 六一八 |
| 挿 繪 | 六一九 |
| 二四、妻の真心 ……(口)……佐々木信綱……六二〇 | |
| 作 者 | 六二〇 |
| 出 所 | 六二二 |
| 要 旨 | 六二三 |
| 段 落 | 六二四 |
| 解 釋 | 六二四 |
| 鑑 賞 | 六二五 |
| 挿 繪 | 六二五 |
| 二五、萬葉集の歌 ……(歌)……六二五 | |
| 要 旨 | 六二五 |
| 出 所 | 六二五 |
| 近江の荒都を過ぐる時 | 六二八 |
| 作 者 | 六二八 |
| 解 釋 | 六三〇 |
| 短歌四首 | 六三一 |
| 作 者 | 六三一 |

| | |
|--|-----|
| 解 釋 | 六五一 |
| 子等を思ふ歌 | 六五七 |
| 作 者 | 六五七 |
| 解 釋 | 六五八 |
| 天皇内大臣藤原朝信に語して春山萬花の艶、 秋じ千葉の彩を説憐せしめ給ふ時額田王歌を 以て之を判ずる歌 | 六六一 |
| 作 者 | 六六一 |
| 解 釋 | 六六二 |
| 鑑 賞 | 六六六 |
| 参 考 | 六六八 |
| 挿 繪 | 六七二 |
| 二六、日本文學の展開 (口)……土居光知……六七二 | |
| 作 者 | 六七二 |
| 出 所 | 六七三 |
| 要 旨 | 六七三 |
| 段 落 | 六七四 |
| 解 釋 | 六七六 |

| | |
|---------|-----|
| 鑑 賞 | 七五一 |
| 挿 繪 | 七五一 |
| ——目次終—— | |

女子國文大綱 卷十備考

一 希臘思潮

作者

【金子筑水】 カネコ、チクスキ。名は馬治。文學博士。早稻田大學教授。明治三年長野縣上田に生れた。苦學力行して今日の地位を勝ち得たのであつて、この點で既に人の範とするに十分である。氏は早稻田大學の前身東京專門學校の文科に入り、大に勉強して遂に優等の成績を以て卒業し、同校第一期生中の秀才として知られてゐる。氏は母校の名教授にして恩師なる坪内逍遙博士の後をうけて文科大學長を襲ぎ、その名を恥かしめなかつた。哲學文藝に造詣が深い。嘗て獨逸ライプチヒ大學に哲學を修めて Doctor der Philosophie の稱號を得た。「近代思想の研究」ベルグソンの「創造的進化」ニイチエの「悲劇の出世善惡の彼岸」「生活と文化」「歐洲思想大觀」等の著譯がある。

出所

【歐洲思想大觀】 大正九年十月、東京堂書店發行。この書は、筆を思想より起し、キリスト教、ルネサンス唯理思想、ロマンティシズムと順序に記述し、更に最近代に至つて、現實思想、自然主義、社會主義思潮、プラグマティズムに至るまで、あらゆる歐洲思想の推移變遷の跡を明かにしてある。新説簡潔明快、一讀してその全般を知る事が出来る。

要 旨

希臘は文學に、藝術に、哲學に、あらゆる歐洲近代思想の淵源であり、ひいては現代文化の源流でもある。論語、爲政の篇に「溫故知新」といふ語がある。古い希臘の思想を知ることによつてはじめて近代若しくは現代の歐洲思想の潮流を窺ふことが出来る。こゝに本課を設けた趣旨がある。即ちこの思潮を知ることによつて文化研鑽に入る爲の暗示としたい。序に著者の語を引いて参考とする。

歐洲近代の思想を研究する者に取つては、ギリシヤ精神又はギリシヤ思想の研究は、何を措いても先づ必須缺くべからざる大事である。ギリシヤ思想は深く近代歐洲思想に影響し、近代歐洲思想は直接ギリシヤ思想を吸収して發達したものであるから、先づギリシヤ思想に通じなければ、吾人は到底近代歐洲思想を精確に理解することが出来ない。否一步を進めて言へば、ギリシヤ思想は近代歐洲思想の淵源であり、全歐洲文明はギリシヤを源として、そこから發現したものであるから、ギ

リシヤ思想は即ち近代歐洲思想の萌芽であり、最初の形であると云へる。若し吾人が仔細に此の萌芽的思想を観察すれば、そこに既に近代思想の或形式を發見することが出来る。蓋しギリシヤ思想は後代の全ヨーロッパ思想の本質を限定したもので、假にギリシヤ文明やギリシヤ思想が無かつたと想像すれば、今日の歐洲思想は現に有るものとは全然本質を異にしたであらうと考へられるからである。——「歐洲思想大觀」(二一—三頁)

段 落

- 一、初行から……どこまでも彼等の目的であつた。(三頁八行目まで)
 - ギリシヤ人の生活は現實的、若しくは自然的であつて何事につけても現實を尊び自然を愛した。神々や宗教に對してさへもさうであつた。
 - 二、ギリシヤの思想が……ギリシヤ人の特徴であつた。(五頁初行目まで)
 - 彼等の生活従つて思想全體が何等の束縛を受けることなしに、極めて自由であつた。
 - 三、併しながら……知らない有様である。(八頁四行目まで)
- ギリシヤ思想の根本的特徴は藝術的なる所に在る。而もそれは有史時代の最初から既に卓越してゐた。

四、此等の藝術的傾向は……言はねばならぬ。(九頁終行目まで)
彼等の藝術的傾向は、最も精緻微妙なる象徴的傾向といふ精神的特徴から發生してゐる。即ちすべてを具體化して一定の形を與へる所謂造形的才能であつた。

五、又晉に……終りまで。

その象徴的傾向は、又ギリシア精神が最も知識的であり、理論的であり、科學的であつたといふ別種の傾向と、極めて密接な關係を有つてゐる。

解 釋

【ギリシヤ人】こゝでいふギリシヤ人は所謂古代ギリシヤの謂ひHellenessを指す。Hellenessは現代我々がギリシヤ人と呼ぶのよりも更に廣し。"Wherever were Helleness there was Hellas."と云ふ語によつても知られるやうに、在來のGreeceの外に沿海の多くの島々、中亞、南伊、シシリア、地中海中に存在するギリシ

ヤ植民地、ヘレスポンド沿岸等の所謂Hellenic citiesが含まれてゐる。
【オリムピアの祭禮】ギリシヤの北部なるテッサリヤ(Thessalia)とマケドニア(Macedonia)との境上に横はる連山の東端にオリムポス(Olympus)といふ山がある。最高峰は九、七〇〇尺に達し、ギリシヤの最高峰である。

山容嵯峨とし、懸崖をなして海に臨み、山麓は樹木蒼然としてゐるが、山上は樹木なく、年中殆ど雪を以て覆はれてゐる。ギリシヤ人は傳へて太古に諸神がこの山嶺に住したとしてゐる。其他オリンポスと稱へる山は、古代に多かつたと見えて、ミシヤ(Mysia)にも亦同名の山がある。リヂヤ(Lydia)キプロス(Cyprus)ラコニヤ(Laconia)エリス(Elis)等にもあつて、其數十四に上るといふ。
さて、古代ギリシヤ人がオリムピヤ神殿の前庭に會して、神意を楽しませる爲の祝祭に催した競技が所謂オリムピツク、ゲーム(Olympic games)である。この祭は實にギリシヤの國民的大祭禮である。此祭日の前後の一箇

月間はギリシヤ列國が互に兵戈を交へず、鬭争を禁じ、和親を事とし、各優勝者を選出して技を競はせた。競技者は純粹のギリシヤ人で且刑に觸れず、徳操の正しい者でなければ選出されなかつたといふ。競技は二十四箇團體となつて之を行ひ、勝者は審判官がオリブ葉の環をその頭に冠らせた。受ける者も其選出國もこれを無上の譽とした。競技の種類は、遠距離徒歩競走・擊劍・拳闘・戰車競走・障礙物競走・武装競走・飛脚競走等で更に遊戯運動のほか、音樂・詩・歌・劇等に及んだといふ。詩人、史家、文學者、彫刻家等は此機會を利用してその作を披露し、公衆の賞讃を得る事を以て其本懐とした。Holmが "Without the

Olympic games, we should have had Greek sculpture."と云つたのによつてもその一斑は窺はれる。此競技の初めは明かでないが、記録に見えてゐるのは西紀前七七六年を以て始めとする。同五四〇年頃から優勝者の肖像を技場附近に建設する風が起り、後にはその選出市でも同様の事があつた。此競技は又箇々に分裂したギリシヤ人の同胞を相親ませる有力な機關であつた。三九四年テオドシウス(Theodosius)大帝之を禁じて後中絶し、一八五八年に至つて、近世の式によつて再興せられた。【百科】

【善美】希臘語カロカガティア(Kalokagathia)の譯語。古代希臘人が、理想的人格、理想的

生活の特性をあらはす語。思惟、情操、行動の善美兩全を得たる状態。【哲學】

【感性的歡樂】カンセイテキ、クワンラク。ここにいふ感性的歡樂とは、理性に對し、之によつて征服せらるべき、低度の感覺的衝動に基く要求全體例へば感官的快樂の總稱である。

【ソクラテス】Socrates アテナイの人。紀元前三九九年七十歳餘りで、青年を惑はし國家の神々を否定し新しき神々を主張するといふ廉で告發せられ、つひに死刑に處せられた。彼には著述がない。彼の人格及事業については弟子及後人の描寫乃至記述によつて知る外はない。主なる史料はプラトン・クセノフォ

ン及びアリストテレス是等三人の著述である中にもプラトンはソクラテスに親炙した人で、師の死後は其事業の繼承完成を生涯の天職と信じた最も忠實な弟子の一人、師の精神に對する共鳴と了解とを有し、且つ世に稀なる藝術家として人物の特徴の描寫に特に勝れた人。彼の初期の諸作は殆ど唯一の信賴すべき史料である。ソクラテスの働き振りは甚だ奇異な、特色あるものであつた。彼は終日人を、殊に青年の多く集る處、市場や體育場などに過し、何人とも談話するを好み、對手に人生の諸價値、道德の諸規範に關する問を發して答を誘ひ出し、問答を巧みに操つて、對手を自家撞着の窮地に陥れ、その無知不明を

ストの皮相的活動に反して、各自の反省、覺醒、自覺を促すを力めた。彼の對話法、又は、問答法 (Dialectic) は道德的意識の不明を暴き、活きた明らかなる確信に向はしめるといふ、即ち激勵法 (Dro'reptike) としての、意義を有した。それはプラトンに於けるが如く、學問研究法ではなかつた。總じて彼を概念の規定、従つて定義によつて學問を改革せんとした學者の如く考へるは、源をアリストテレスに發する、甚しき誤解である。彼は眞理 (Altheia) 及智慧 (Phronesis) を最高價值と認め、徳はそれに於いて又それによつて、自ら實現されると信じ、かくの如き、知と同一なる徳に於いて、唯一の眞の幸福を見たが、

その「知」は確信と呼ぶべきもので、學問に於いて完成せらるべき認識ではなかつた。尤も對手から定義を求めた點に於いて確かに概念の尊重はあつたが、概念の本質や任務についての自覺は彼に於いて欠けてゐたのみか、概念的認識を得んとする積極的努力さへ彼は示さなかつた。彼は決して倫理學者ではなかつた。彼は徳を最高價值とする確信に於て生き、其確信の爲め、「善き人には生前にも害の加へらるゝことなし」と信じつゝ、従容として死に就いた。〔哲學〕

【制節主義】 節制 (Temperance) は西洋古代倫理で最も重要な徳で、克己自制の謂、即ち理性が自ら主となつて欲情を制すること故、

智慧と相通する所あり、従て徳の要は智慧なりとも節制なりとも謂ふを得る。心の理性部が非理性部を化して兩者の調和するを徳の精髓と見たから、節制が道德の全局を蔽ふ意味あるは當然で、ギリシヤで「ゾフロジネー」が徳の中心たる旨ある所以である。アリストテレスに至つて食色の欲を制することのみに節制の名を限定したのは之を中又は適度と同意義に用ゐた上述の意味よりも遙に狭くなつた。爾來此狹義の用法は存續して、近代では飲酒を節し又は禁ずることを指す如き極めて特殊の意義も發達した。〔哲學〕

【禁慾主義】 Asceticism (一) (宗・教學) 希臘語の askesis (訓練を意味す) より來り、第一に

は或目的の爲めに肉體を訓練して制御する實行を意味するが、進んでは肉體と其欲望を全て否定し滅却せんとすることを云ふ。前者は意志の訓練を強制せんとする道德的實行に多く表はれるから、訓練的禁慾主義 (Disciplinary asceticism) と稱せられるが、後者は靈と肉とを峻別して肉を根本的に惡なりと見る二元論に基くから二元論的禁慾主義 (Dualistic asceticism) とも云はれてゐる。極端な代表的禁慾主義は、多く後者に屬するが、併し各民族の禁慾主義の歴史では兩者の意味が事實に於ては混同されて居る。一般に宗教的行事には常に何等かの意味に於いて禁慾の實行を伴ひ、之を以て宗教の目的を達する必然の豫

備段階とするのである。(二)(倫理學)肉體的世間的欲望を禁止制壓することによつて道徳的理想境に到達せんと力むる主義。但し理論上の主義よりは寧ろ實行上の方法。其根據は人性を動物的自然性(感性)と人間的理想性(理性)とに分ち、前者は諸念の因或は縁、後者の欣求する諸善の實現を妨げる或は妨げる傾向ありと見る處に存す。然し要求せらるゝ禁欲の程度、種類は理想並に感性に對する見方の如何に依て異なる。道徳法が規範、當爲として意識せられる事を認めるものならば、如何なる倫理說でも、或程度或種の禁欲(自然主義の否定)は必然に要求する。感性それ自身が悪、肉體が靈性の障礙と見られると、極

端なる禁欲、進んでは積極的に肉體を苦しめる苦行が推奨される。古代希臘のキニク派、ストア派、新プラトン派、中世の基督教道徳に見る如し。其論理的歸結は個人的生存の否定となる。シュベンハウエルの解脫論に之を見る (哲學)

【プラトーン】 Platon. 紀元前四二七年に生れ、三四七年に歿した。アテナイの人。貴族の出、ソクラテスの弟子。アカデメイアに學校を開く、歐羅巴最古の大學。古今の最大思想家の一人、藝術家としても第一流。著書は多い、全部今日まで傳はつてゐる。著書のクロノロジーは彼の思想の發展、従つて思想そのものゝ了解に關係する所少くない故盛に研

究される。彼の著書は大體に於いて三期に分かれる。第一期は彼がなほ大體に於いてソクラテスの立場に立つた時。第二期は彼自身の哲學を建設したプラトンの全盛時代。藝術的にも最も卓越せる諸傑作 Symposium(酒宴)、Phaidon, politeia(國家)、Phaidrosはこの期の作。第三期の作は特殊問題、殊に論理學及自然哲學の諸問題に對する深き興味を示す。プラトンはソクラテスの影響のもとに、人生問題に特に深い興味を向けた。人生の意義、價值、理想、——これが彼の根本問題。この問題の解決が哲學。哲學は學問、しかし學問は同時に文化を創造する力、生の最高價值しかも同時に生の改造の原動力。哲學即生。學

問は方法的に(秩序的に)仕上げられたる認識、認識の本質は概念に存す。概念を最高のものより最低のものに至る階段に、従つて高きものによつて低きものを理解し基礎附け得る體系に、組立てるが哲學の方法。プラトンはこの事はソクラテスの用ひた對話によつて成遂げられると信じて、此方法を辯證法と名づけた。認識の本質をなす概念をプラトンは「エイドス」eidos 又は「イデア」idea と名づけた。形相の意。さてイデアは感官的知覺より成る經驗と全く特質を異にする。經驗の内容は、時、處、人に對してのみ意義を有する。その妥當性は相對的。之に反して純粹の思惟によつて捉へられるイデアは嚴密なる普遍安

當性を有する。其眞理性は經驗内容がそれと一致せりや否や、換言すれば、事實としてしかりや否やによつて動かない。しかも同時に事實の世界、經驗的現實界はイデアによつて理解され、批判、評價されねばならず、又イデアを實現せんと力めねばならぬ。イデアは經驗的現實界に對して、價値であり規範であり、理想である。かくの如きイデアの本質の會得をプラトンは主として道德的價値概念、「善」「美」(美はギリシア風に本質に於いて善と同一)「正」等、其については數學の概念、例へば「相等」などの考察によつて得た。理論的規範と實踐的規範との區別は、かれの主知主義の立場に於ては、明に意識されな

してのイデアを、プラトンは絶對的實在と認めざるを得なかつた。イデアは實踐的方面に於ては、文化を創造する原動力である事、又理論的方面に於ては事實を説明する原理である事はイデアの實在性を要求したのである。かくてイデア論は形而上學となつた。永遠的なる、超越的なる、絶對的なる、價値並びに實在として、イデアは、同時に宗教的要求をも満足させる。其を認識し、直視し、其と合一する事に於て人生の最上幸福は存する。かくの如き合一に向ふ要求、熱情、感激をプラトンは「エロース」*Eros* 戀愛と名けた。この愛の發現こそ「愛智」即ち哲學 *Philosophia* である。永遠的なる、超時間的なるものと合

つた。又事實の理解の規範概念(今日範疇と名けられるもの)と抽象的普遍概念との區別をも彼は十分に認め得なかつた。彼は殆どあらゆる普遍概念をイデアとして認め、其爲め、思想上の大困難に陥つた。しかし、イデアは其精神、眞髓に於ては普遍妥當的價値である。プラトンは「善」のイデアをすべての「あり」を超越し、しかもそれを基礎づける、最高のイデアとなした事は明かにこの事を證する。ロツツエのいつたやうに、イデアの「あり」*Sein* は「妥當する」「當該まる」「通用する」又は「價値ある」である。かくの如き、經驗的事實より獨立なる、其意味に於て超越的なる妥當性を保つイデア、即ち絶對的價値と

一し得るものとして、人間の精神(靈魂)は等しく永遠的存在を保たねばならぬ。ここよりしてプラトンはオルフィック派の靈魂不死説に哲學的根據を與へんと力めた。イデアの認識は感覺的知覺より全然獨立なる妥當性を有する。従つて獨立なる起原を有せねばならぬ。しかもそれは、規範として、事實の知覺を機會として意識される。この事をプラトンは靈魂不死説と結びつけて「想起」の説をといいた。イデアの認識は生れ出る前、靈魂が純なる相に於て直視した所のものを、その不完全なる模倣にうながされて、想起又は回憶する事である。絶對的價値としてイデアは人生を支配し乃至改造する理想。かくてプラトンは正義

のイデアの實現として理想的國家を説いた。學問即ち永遠の眞理の認識こそ人生の最高の善、この善の認識及實現の爲に國民を教育するが國家の任務。プラトンは理想主義及び其に基いた文化哲學の創立者である。〔哲學〕

【ペリクレス】 上古アテネの政事家。ミカレの勇將クサンチッポスの子なり。ペルシア戦後時代國家危難の際に成長し、其天稟の才能を玉成せり。人となり體格強健、性質明敏、當時の哲學者に就きて修養をつみ、又明快の辨舌を以て夙に頭角を同胞の間に顯はす。初めキモンに従ひて諸戦に功あり。アリスチデスの死後始めて政界に入りアテネ人は唯々民主政治によりて其力を發展せしむるを得べく

しかも國政の統一は無智なる人民の會議によりて期すべからず。必ずや優秀の智能を以て人民を指導すべき地位に立ち、實行によりてよく其地位を保つべき人々を待つとの信念よりエフィアルテスと結びてアレオパゴスの權を抑へ、貧民に従軍司法の日當を給し、食料の價を低くする等の方法を以て其生活を安易ならしめ、以て十分に國政に參與するを得しめ、對外政策はアテネが全ギリシアの覇權を得るを目的とし、スペルタに心をよせたるキモンを放逐し、デロス同盟の共有資金をアテネに移し又スペルタと交戦せしも、これがため自國の疲弊せんことを慮り、三十年を期してこれと和す。(いはゆる「ペリクレスの平

和)西紀前四四四年ツキデスの死後、ペリクレスは民權を十分尊重し、國法を破らずして自ら國政を指導する目的を達し、ストラテゴス(將軍の事)又は財政長官・建築長官等の資格を以て國政に任じ、内は文藝・美術を奨励し、フィヂアス・イクチノス・ムネシクレス等を用ひて其靈腕を揮はしめ、プロピレアバルテノン等ギリシア建築の粹を以てアテネの美觀を添へ、外は益々海軍を盛にして海上に威を揮ふ。アテネの國力最も張り、ギリシア文物の盛、此時に極まり、いはゆるペリクレス時代を現出す。然れどもこれがため、スペルタをはじめ諸市の嫉妬を招き、四三一年ペロポネソス戦役起る。幾くもなくアテネ

にペスト起り、ペリクレス亦これに斃る。(四二九年)アテネこれがため大打撃を蒙り、國民を統率する大人物なく、黨争徒に繁く、遂にスペルタに屈してその覇權を失墜せり。

〔百科〕

【インドの階級制度】 西紀前千年の頃、中央アジアより南下したるアールヤ族、インドス河を渡りて移住し、始はパンジャブ地方に在りしが漸次東南に進み、ガンガ河の流域に蔓延し其間に數多の小國を建てたり。されば印度上古の人民はアールヤ族と土民との混合せるものにして、其世業の區別に従ひ、四等の種姓に分かれたり。これを四姓といふ。左の如し。

波羅門 (Brahman) 僧侶。刹帝利 (Kshatriya) 王族及武人。毗舍 (Vaishya) 平民。首陀 (Sudra) 力役者。〔百科による〕

【ホーマーの「イリヤッド」や「オジッセル」】

普通ホーマーといへば、この二篇をさす。「イリヤッド」とは Iliad 即ち Troy の歌の義でトロイ戦争の大立物 Achilles が憤怒を歌つたもの、又「オジッセル」は「Odysseus の詩」といふ意味で、イタカ王のオジッシウス「Odysseus」及び其子のテレマカスの漂浪奇談 Adventure である。「イリヤッド」は全體の結構から考へて挿話甚だ多きにかゝはらず自ら統一あり均齊あり、用語は諧調の妙あつて素朴ながら卑俗

に陥らず、神祇や英雄やの功業偉勳の煩惱等を寫し得て莊重に、はた優麗にアキレスの忿怒パリスの痛恨、アンドロマックの悲難、ヘクトルの壯烈、みな強く明確に描き出されて、ギリシヤ文藝の特色を十分に發揮してゐる。

【イリヤッドの梗概】

序卷は端緒として先づトロイ攻圍の第十年目にアポロンが其の祭司のクリーセスに侮辱を加へられたの怒つて、ギリシヤ軍の上に悪疫を下すといふ記事を以て始まる。元來、總大將のアガ멤ノンには倨傲のため、これまで度々敗軍して幾多の兵士を空に殺したことも多かつたがこの時を祭司が誘拐された娘

の返還を求めたのを拒絶して、激しくアポロンの怒を買つた。而してこのことが原因として重大事件を惹起した。

即ちギリシヤ第一の英雄アキレスは、戦死した將士の名によつて祭司の女の返還を求めた。アガ멤ノンは兎に角この要求を容れたが、一方にアキレスが、軍隊から名譽の賜物として貰つたブリセイスを奪ひ去つたので、アキレスは大に憤つてまた戦争に出す。母のテティスに頼んでゼウス神の許に赴き、暫く自分が満足するまでトロイ方の勝利を得る様計ひ給へといはせた。

第二卷から第七卷までは、上の陰謀が段々熟して事々物々以前に逆行する有様を敘す、

アガ멤ノンはアキレスの力を借りずに戦争の終局を告げんと計り、この騒亂の張本人たるヘレナの誘拐者パリスとヘレナの眞の夫メネラオスと決闘させた。決闘はパリスの負になつたが、アフロディオに危い所を救はれた。けれども幾何もなくトロイ方のパンダロスが裏切りの矢を放つたので和約は忽ち敗れ、アカイヤ人は再び軍を進め、アテナの擁護を受けたアキレスに亞ぐ勇士の單身決闘によつてギリシヤ軍は一時に大に振ひ、アガ멤ノンは「全勝近き」にあり、アキレスの鼻を明かすのは今」とばかり喜んだ。けれどもゼウスがテティスの歎願によつて諸神が戦闘に加はることを禁ずるに及び、形勢一變

し、ギリシヤ人は勢を失して其の陣營に退く、こゝで第二の陰謀は熟し、事件は益々進展する。(第八―第十二卷)

アガ멤ノンは今やアキレースの前に屈せねばならぬことになつたのを恐れ、トロイの圍を解いて去らうと提議した。けれども老將ネストル等の反對から、ギリシヤ人は再び決戦を試み、果ては全敗に歸し、アガ멤ノンも他の諸英雄も瘡を蒙る。(第十一卷まで)

「兵船のほとりの戦」の一段は(第十三―十五卷)動作は正に其の頂點に達し、戯曲的英雄アキレースが狂瀾を既倒に回する底の大功名を現はす。トロイ武勇第一の譽高いヘクトルはアポロンの神助を得てギリシヤの陣營に

押寄せ、其の兵船に火を放つたので、ギリシヤ全軍はあはや覆滅と見えた。此の危急存亡の一刹那にアキレースの決意も僅に揺ぐと共に一轉機は開かれた。即ち友人のパトロクロスに自らの甲を被らせ、自ら率ゐるミルミドンの將としてギリシヤを救はしめた。かくてパトロクロスは首尾よく敵を味方の陣營から追つたが、アキレースの命令に背いてトロイ人を追ひ、遂にヘクトルの爲に殺された。(第十六卷)此の後動作は漸々下火になつて行く。(第十七―廿一卷)掉尾の活劇はプリセイスの回復とアガ멤ノンの屈従とである。併しアキレースの勝利は彼自ら認めた様に全く表面だけの勝利に過ぎなかつた。彼は私怨の爲

に自分の敗滅を傍觀し、アガ멤ノンと同じく驕慢の罪を犯し、爲に友人のパトロクロスを失ひ、それと共に事件のカタストロウを早めた。(第二十二卷)彼は母に乞うてヘフェーストス神より新劍を得て、ヘクトルを仆したが、次で自己の上に同じ運命を覺悟せねばならなかつた。重傷を負つたヘクトルの情ない有様は彼の前途を豫告するものである。事件はヘクトルとパトロクロスの埋葬、アキレースの亡友に對する愁歎を以て語り、戯曲の主人公は後景に逸し去る。

○オジッサーの梗概。

「オジッサー」はトロイ戦役の英雄の歸國を描いたあらゆる詩人の模範といはれたが、是も

「イリヤッド」の如く、元來、單一の説述を基として後人が増加したものである。殊に挿入の部分で著しいのは、オジッサーの子テレマコスのピロス及びラコニヤへの旅を叙した「テレマケイヤ」(第一―四卷)の全部及び最後の卷の大部分と、オヂッサーが不界遍歴を叙した一段とは著作の年代は古いものであらうが、竄入したものに相違はない。テレマコスの條では彼は二十年も歸らぬ父の安否を氣づかつて國を出て、ネストル老王やメネラオスなどを訪ね、其の歸國の物語をきいた。

オジッサーの歸國の古詩はきれいな古詩の斷片を集めて出たもので、主として全

篇のアトストロウともいふべき最後の年の事實のみ記して、其の前の事件は凡て説述の間に廻つて行くといふ書き方は明かに「イリヤッド」を踏襲してゐる。イサカの小島の君オジッシュースはトロイから本國への歸途、戦友の船にはぐれ、其の後七年間、日夕家郷の空を望みつゝ、オギギアの島に永久彼を身邊につないで放さうともしないカリブソと共に棲んだ。一方イサカには妻のペネローペは權勢を笠にうるさく婚を求め來るものを一々拒絶しつゝ、ひたすら夫の歸りを待ち詫びてゐた。で遂にアテナ神の要求に動かされ、ゼウスはニムフに命じてオジッシュースを放たしめたので、彼は筏に乗つてファイアケス島附近まで

流れついたが、此所でポセイDONは彼の筏を碎いた。而して僅かに女神イノーリユールコテアの助によつて海岸に泳ぎついた。アルキノース王の女のナウシカヤは彼に衣を與へて父の宮殿に導いた。食事の間、遭つた奇談を物語る。『彼は從者の多數をキネコスケイネコスの戦に失つたが残れるものもポリフェモスの洞窟に落ちて失ひ、やむなく風の君アイオロスに乞うて安全に國に歸ることをはかつた。かくて彼は魔女キルケの島に上陸し、歸國の道すぢを聞いてこゝを出帆する。それからシレンシレン魔女の島を過ぎ、海魔スキラ、カリブデイスの居所を通り、トリナキヤ島に空腹をささへるべくヘリオスの神聖な家畜を殺して食

ひ、その罪にあつてガウスの電光一撃、船は遂に打碎かれオジッシュースのみ難を逃れ海上に漂ふこと十月にしてカリブの島に漂着したのであつた。』王はこの話を聞いて非常に感に打たれ、快走船を用意し、立派な贈物を添へてイサカに歸らしめた。彼は乞食の姿になつて、牧夫のユーマイオスに會つて妻への求婚者の無禮を聞く。妻のペネローペは求婚者に難問を行はせて其の條件にあつたものに許さうとした、求婚者の凡てが失敗した。此の時夫の歸國の報を得た。最後にオジッシュースは近郊に耕作を營むレルテルを訪ふ始終を以て一篇を終る。

【ヘオシッド】 参考のところ参照。

【エスキロス】 Aeschylus 前五二五—四五六。

悲劇の創始者として名を不朽に傳へるのは彼である。彼が始めて悲劇に指を染めたのは二十五歳の時であつた。彼の作は一見技巧によらず、むしろ神興によつてなされたやうに思はれるが、技巧家としても綿密な頭を持つてゐた。其の四十年間の作詩生活に、數多の半羊神劇サツラフの外に七十篇の悲劇を作つたといふ。併し二千餘年の今日傳はるものは僅かに七篇に過ぎない。

その七篇の中 Agamemnon, Choephoroi, Eumenides の三篇は所謂 Triloggy 即ち三部曲で、彼の死に先だつ二年、即ち前四五八年にアゼンヌで演ぜられた。彼の戯曲は巨大な塑像の如き趣がある。惣

て全體の均齊に重きを置き、性格や趣向の細々しい處は殆ど顧みずに書き下した感がある。自然と人生とに對する態度はアジャ人の如く深邃で、之を神祕幽遠なものとして描き出さうと勉めた。其の取扱ふ人物は英雄若しくは神祇であつたが、彼の宗教思想が甚だ高かつたから、その神も道徳的に深い意味を持つたものであつた。彼の宗教の根本觀念は因果應報と宿命論とに終始した「蔭く者は刈る」父酸き葡萄を好む時其の子等の齒は疎なり」の言よく其の間の消息を語るものである。而も心清く多恨な詩人をして「あはれ神は盲目なり、盲目にして邪なる力なり」との怨聲を發せしめたのも、因果律ばかりでは此

の世上の事を救ひ盡くせぬのを見たものであらう。

彼はまた昔にアゼンスの一詩人たるに止らず、全ギリシヤ人としての詩人であつた。其の處女作を出してから三年目、ペルシヤとの戰に其の兄と共に軍に従ひ、マラトン・サラミス・プラテーエ等に轉戦し、自らも常に作詩から寧ろ其の巧に誇つてゐた、前四七二年に有名な「ペルシヤ人」(Persae)を物してヘラス民族の武勇を讃へ、國家の光榮ある前途を祝福した。曰く、

「行けギリシヤの子等。行きて汝の國家を救へ。汝の妻子と祖宗の奥津城と祖宗の傳へし神々の宮居を救へ。君聞かずやドライアスの

尊靈墳墓より起つて、神々今やクレルクセスの不遜を罪せんとすと叫ぶを。」

と、彼は將に天下の勢力たらんとして奮闘しつゝあつた。若きギリシヤ民衆の爲に、其の理想たる英雄的事業を語つた。

然るに新興國の常として當時ギリシヤの思潮の流るゝ一瀉千里の勢であつた處から、僅か十年後の新國民はエスキロスの謠ふ所を満足しなくなつて來た。彼はアゼンスを去つてイタリイに行き、シラキユスの僭主ヒエロンの城中に晩年を送り、紀元前四五六年シリ島のゲラで歿した、享年六十九。

【ソフォクレス】Sophocles 前四九五—四〇六。

紀元前四九五年アゼンスの近郊コロナナスの

地に生れた。當時の大家エスキロスと月桂冠を争つて立つたのは、彼が二十七歳の若輩時であつた。この時の審査ほど大きなものはない。一方は舊時代の代表者、その思想の政黨を後援に持つ老大家、一方は新時代を謳歌する新時代の天才。時のアルゴンは其の審判をトラキヤからの凱旋將軍シモンに諮り、シモン又九人の將軍と會議して遂に月桂冠は彼に落ちたといふ。

彼は處女作を出してから、六十年に亘る長い創作生活に百篇以上を物としたと傳へられてゐるが、今日見る所のものは僅かに七篇に過ぎない。

彼とエスキロスと並べる時、エスキロスは

アリストテレースが劇詩の要素として掲げた中の神興の一面を得、ソフォクレスは技巧の一面を持つて生れた。其の作品も彼の素樸豪宕を見ることは出来ないが、均齊・清明・沈靜などギリシヤ人殊にペリクレス時代のアゼンスが理想通りの條件を備へてゐた。エスキ罗斯は「イリヤッド」に出る様な英雄・神祇を寫したが、彼は其等神仙界を下つて人間界の喜怒哀樂を寫し、宗教とは不可分の關係を保ちながらも、其を常に背景としてのみ用ひ、舊來のヂチラムの分子は全く跡を絶つた。かくて其の戯曲はヂオニシス祭の餘興の一具と視らるゝことなく、全く純然たる藝術となつた。

【橄欖】 カンラン。橄欖科、橄欖屬の喬木、葉は奇數羽狀複葉、各小葉は長橢圓狀披針形、花は總狀花序に排列し、卵形の核果を結び、熟すれば淡黄色となる。支那の原産なり。核は解毒の効ありといふ。(大圖)

【ゼウス】 Zeus 古代ギリシヤ人の崇拜せし至上神、天の神にして萬物の創造者たり。特に天界の諸現象は此神の力によりて起るものと信ぜられたり。風雨・雷電・雪露・雹霰の類一として此神の起すところならざるなし。其他天然界人間界の調和は此神の掌るところなり。即ち天然界人間界の調和は、此神の掌るところなり。個人の家庭を組織するも此神の力による。故に各家此神の供物臺を備へたり。又

託宣の力あり。此神に關するギリシヤ神話は區々一定せず。ヘシオドスの神系によれば、ゼウスはクロノスを父とし、レアを母とす。レア既に五子を産む、クロロスこれがために害せられんことを恐れ、その生まるゝや直にこれを嚙下す。レア將に第六子ゼウスを産まんとして、其のまた嚙下せられんことを悲しみ、これを救ふの法を其父ウラノス及デアに諮り、其計に従ひ、ゼウスの生まるゝや直にこれをクレテ島に持ち來り、イダ山中の岩窟内に隠し、クロロスの來り求むるや、レア石を襁褓に包みて與へ、クロロスこれをのみ、ゼウス僅に免る。長ずるに及び、膂力智力共に諸神に卓絶し、其同胞と共にクロノス及び

チタノスを攻め、其勢力を奪はんとし、これがため激戦起り、諸神みなこれに加はる。是に於て天地山川撼動し、叫喚の聲、絶域のオケアノスの許に達すといふ。此戦にゼウスは其雷電を以て敵を破り、ケンチマネスは、其怪力を以て、山嶽を破壊し、遂に敵を破る。尋でゼウスは殘敵チフォスを攻め、オリンボス山上より雷電を投じてこれを焼殺す。是に於いて天下平定し、またゼウスに抗するものなきに至る。ゼウス初めメチスを娶る。女神中最も聰明なるを以てその産むところの子ゼウスより強くして遂にその位を奪はんことを恐れ、其將にアテネを産まんとするに際し、ゼウス、メチスを嚙下す。是に於てメチスの

才智ゼウスに移る。其後ゼウスは頭をさきて女神アテネのみを生みたり。ゼウスの最も古き崇拜地はエビロスのドドナなりしが、後エリスのオリンピアの神殿最も有名となれり。彫刻に於ける此神の像は種々あれど、通常十分成熟せる年配にこれをあらはす、其至上神なる威嚴を示す爲、玉座の上に座す。其豊富にして波打てる頭髮及び捲上れる鬚髯を其特色とす。其眞面目にしてしかも温平たる相貌はオトリコリに發見せられ、今ローマのヴァチカノ博物館に藏せる像に最も善く現はれたり。古代オリンピアの神殿にはギリシア第一の彫刻家フィディアスの作に係る黄金と象牙にて作れる此神の巨像ありしも、夙に氓びて

傳はらず、僅にエリス地方のローマの貨幣の面に在る其模型によりて、其形を窺ふに過ぎず。これによれば神は玉座に坐し、右手を伸して二ヶ神の像を掌上に載せ、左手玉笏を杖き、頭にはオリンピア競技の優勝者の得たるオリイヴ樹の冕冠を戴けり。〔百科〕

【月桂樹】 ゲツケイジュ。樟科。月桂樹屬の常綠喬木。幹の高さ一二丈芳香を有す。葉は廣披針形又は長橢圓形、全縁又は稍波狀縁、平滑革質にして濃綠色を呈す。早春、小形黄色の花を葉腋に簇生して開く。果實は暗褐色球形の小核果なり。南部歐羅巴の原産にして近年我が國諸所に移植せらる。西洋にては、古來、此の枝を名譽の表章として用ゐ、又葉

及び果實は藥用となる。觀賞用に供せらる。

〔天國〕

【抒情詩人】 ジョジャウンジン。抒情詩の作者をいふ。抒情詩は西洋文學に於ける詩の三大部門の一。ギリシヤ語で七絃琴といふ語より出づ。本來此琴に合せてうたふ歌の義なり。抒情詩は早くギリシヤの古代に發達し、出來事を主とする抒情詩に對し、専ら樂器に合せて作者の情懷を抒ぶる詩歌を總稱せしが、延いて文學の分類上主觀的方面を總稱する名目となれり。抒情詩の形式としては詞賦・讚歌・挽歌等早くギリシヤ・ローマの古文學に榮えたれど近代に於て抒情詩の最も主要なる形式はイギリスのサング、ドイツのリード等なり

ギリシヤにては其叙事詩の偉大なるに及ばずと雖も、激越と狂熱とを以て鳴れるサツフ・イ・アナクレオン・ピンダロス等の作ありて後世の範を垂る。抒情詩の主題は戀愛・敬神・愛國・友誼等の情にして、これによりて戀歌・讚歌・頌歌・國歌・悲歌・挽歌等の別あり。ドイツの學者はこれを類別して感想的抒情詩・感動的抒情詩・回想的抒情詩の三種とし、リードサング等の純主觀的のものを感想的抒情詩といひ、詞賦・讚歌等の感情が高潮に達して感動的となりしものを感動的抒情詩といひ、牧歌・觀念抒情詩の如く回想の分子の勝ちたるものを回想的抒情詩といへり。〔百科による〕

【劇詩人】 ゲキシジン。劇詩を作る人をいふ。

劇詩と抒情詩と同じく詩の三大部門の一。全篇個々の人物の白ヒツより成り、これを舞臺上に現して、性格と事件との發展を示すものにして、個々の人物の白は各々一個の抒情詩をなし。全篇を通じて客觀的に事件を發展せしむ。されば劇詩は恰も主觀的に作者の感想を抒ぶる抒情詩と客觀的に事件を叙述する叙事詩とを打ちて一丸とせるが如きものにて、これ客觀主觀の文學と稱せらるゝ所以なり。劇詩が抒情詩及び叙事詩と異るところは作中の人物各々抒情詩人となつて自己の感情をのぶにも、作者は其背後に隠れて現はれざるを常とし、又各人物の白は相合して事件を發展せしむれども、それは叙事詩の如く後部より事件

の經過を叙述せずして、性格の發展を遂ふて内部より自然に發現せしむる所に在り。但し古來の劇詩中には時に純叙事詩的分子若くは純抒情詩的分子を混入するもの少なからず。劇詩を文別して通常悲劇・喜劇・和解劇・及び樂劇とす。(百科による)

【靈活】 レイクワツ。心又は精心のはたらしき。〔詳漢〕

【瞠若】 ドウジャク。驚きて目を見はるさま。あつけにとられて目を見はるさま。〔廣辭〕

【性癖】 セイヘキ。性質上の偏頗なる傾向。くせ。〔廣辭〕

鑑賞

自ら山水秀麗の氣に育ぐまれ、また民族固有の豊富な想像力に彩られてギリシヤの國土に美しい神話傳説を生み、詩文藝術の上に千古不朽の大作が現れた。それが長く百代の民衆を動かして世界文化の源泉として今尚、汲めども盡きないその滴りを、縦に横に考察して思想の動きを見た。最上級の女生として思想の向上に、一大暗示を與へ、正史の研學と共に深き趣味を齎らすべきを信ずる。

参考

○ギリシヤの叙事詩に就いて
ギリシヤに於ての最古の詩歌の形式は、他の多くの國民の場合と同じく、宗教的のもので、神徳を讚美する頌神の歌は即ちそれであつた。けれども此の種の作に交つて僅かに斷片を傳へてゐるのみである。

頌神歌前後に紀元前八世紀頃から神祇又は古英雄の事跡を歌ふ叙事體の詩が行はれた。この方は禮拜崇敬の本地が定まつてゐたので、其の歌はれる區域も限られてゐたが、一方には當時の人目を聳

動した大事件即ちトロイ戦争、テーベ附近の戦争といふものが歌はれて、一層廣く民間に流布した。前述梗概のホーマーの二大傑作イリヤド・オジツセーは其の好標本である。

勿論叙事詩はホーマーに創つたのではない。其以前から豎琴を弾じて歌を口吟んで諸國を遍歴し、天候の宴に侍した巡遊伶人なるものがあつた。彼等はみな眉人であつたが、平藝人としてではなくて、神から特殊に授けられたものだと一般に思はれてゐた。

これらの伶人が唄つた短篇即詩が、年と共に叙事詩になつた。叙事詩の語源 *Epos* はもと「神の託宣」の義であつた。然るに、託宣は恒に六音歩の韻語を以て授けられたから *Epōs* はやがて詩句の意味となつたのである。前述のホーマーの二篇、サイクリックの斷片詩、ヘシオッドやホーマーの聖歌などは此の六音歩の詩である。

これらの叙事詩、特にイリヤドの如きは自ら當時の宗教政治は勿論、社會百般の事件を廣く記されてある處から、恰もヘブライに於ける聖書の如く、後世のあらゆる思想の源となり、宗教となり、詩人も美術家も、哲學者も爲政家も皆、この乳房に養はれたのである。「我が戯曲は悉くホーマーが宴の殘物に過ぎず」と揚言したエスキ羅斯を始め、ギリシヤの戯曲家は皆、材料をこゝにとつたのである。この點からしてもホーマーの卓越した其の天才的才幹は、詩人の神としての位置にまで上せられた

けである。

ヘシオッド。

ギリシヤ古代の詩人でホーマーに次いで有名なのはヘシオッド *Hesiod* (*Hesiodos*) である。彼が在世の年代に就いても色々の説はあるが、史家ヘロドタスに従へば紀元前八六〇年頃、小亞細亞のキメ (*Cyme*) に生れたのである。幼少の頃、父 *Dios* に従つてベオチヤ州のヘリコン山に近きアスクラ村に移住し、山麓で父の群羊を牧しつゝ其の詩を作り始めた。晩年になつて、コリンス灣頭の *Naxos* に行つて其處の士となつた。其の邊はすべてドリリス人の國であるから、自然、作の上にも影響を受けてゐる跡が見える。

彼の作として傳はるものに、「仕事と日取」(*The Works and days*) と「神統記」(*Theogony*) の二篇がある。ホーマーと並び稱せられてゐるが、詩は全く別である。ヘシオッドのは教訓詩である。尤もこれは後世の人が、散文で用の足りる教訓を殊更に韻語の形式を供へた類ではなく、當時は全く散文の形式がなかつたから此の形式をとつたのである。

○「仕事と日取」は三部に分れたもので(一)其の弟パルセスを戒める言葉(二)仕事(三)曆の日取となつてゐる。父の遺産を頒つ時、パルセスは兄よりも多く取つた。兄なる彼は「鷹と鶯」といふ比喩談を引

いて訓へるところ正に「イソップ物語」に類し、寸鐵人を刺すの概がある。仕事即ち *πάθος*。こそ此の詩の眼目である。人の世の始に筆を起し、己は尤も澆季の世に出て憂目を見る。遠き古の人にあつた美質は失せ、今人は *Aidos* 即ち廉恥と *Neveis* 即ち義憤の心のみを止め、之に依つて讒に風教を保つて行くが、それすら何時かは失せて了ふだらうといつて嘆く。「エルガ」にも又卷末の「曆」にも日取の吉凶が書いてある此はギリシヤ人の如き自然に親しむ民族の好んで取る詩材である。試にレノイオン (*Lenoion*) の月をよむと、

牡の革を剝ぐには餘りよくない日ばかりだ。

トラキヤから北風が吹いて來ると大地も草木も身を閉ぢ伏せる。

彼(風)は森林に落ちて松檜の大木を倒す。

森の隅から隅まで呻く。

野獸も慄ひおのゝき尻尾を股の間につゝこむ。

彼等の背皮は毛深いけれど寒さは身の中まで吹き徹す。

牡の背革も山羊の髪をも吹き徹す。

けれど藁屋の母御の傍に坐る優しい乙女にあたりはせぬ……」

などである。

「神統記」は千二十二行の長篇詩で、體裁の亂雑な所はあるが、矢張り古人の言ふ通りヘシオッドの作であらう。内容は二部から成る。初めには天地開闢を説き、後には神祇人間の成生を記した。もとギリシヤ人は、ヘブライ人の神を天地の創造者と考へるのとは違つて、神は寧ろ天地の間から生れたのだと考へた。又彼等は、神の長壽無限なことを信じたけれども、併し神は世の始めから在つたものだとは信じなかつた。この「神統記」を書くに當つてヘシオッドは其の話説を當時流布してゐた傳説や民謡から集めた。だから此の頃の信仰そのまゝを書いた宗教書とも見る可く、後世藝術の士の好個の教權とはなつたが、併し其の影響はユダヤの聖書、印度・ペルシヤの經典のやうなことはなかつた。

挿 繪

【ギリシヤ彫刻、悲しみのアテネ】 (五頁) アクロポリス博物館藏。今から約二千四百年前の希臘の彫刻が如何に高度のものであつたかを示すに足るもの、薄肉彫の傑作である。この大理石板は、アテナ女神が右向きに立つて、そこにある一本の柱にじつと眺め入つてゐるさまを現したもので、その浮彫の地はもと青く塗られてあつた。女神の頭にはコリント式の兜を冠り、右足を踏み出し左足を浮き上らして、女神が常に携へる長槍に身をもたせてゐる、そして右手を腰にさゝへて、女神らしい凛

々しさを保つ。おそらく女神は今、この柱に記された文字——それは女神とアテネ市民とのために戦ひの犠牲になつた人の名であらう。——を、まじめな悲しみを含んだ表情をもつてじつと見つめてゐるのである。この顔だけを特に五分ばかり浮き上らせて彫つた、寫實的表現（特にその肉體のモデリング）は實にすぐれたものである。（世界美術全集二卷の解説による）

【オリンピエオン（アテネ）】（七頁）アテネの市街にある大祠堂で、オリンピアのゼウス神を勧請したものである。この堂のプランは希臘式であるが様式は大部分羅馬コリント式であり、柱頭の手法も統一されて居らぬ。西紀前一七四年に創建され、西紀一一七年に出来上つたのである。プランは壁外に二重の列柱を繞らしたもので、前面八本側面二十本、總計百四本であつたのが、今は十五本残つてゐる。希臘本土における第一の大建築に屬する。この建築は藝術的に觀て甚だ面白い點がある。第一その柱のエンタレスが特殊であり、底から柱の全長の約百分の二十一餘の處が最大徑となつてゐる。二十四條の柱の溝の形は餘り美しくないが、柱頭の彫刻は頗る精巧である。（世界美術全集第二卷の解説による）

【ギリシヤ彫刻ディアナ】（九頁）ローマのヴァチカン博物館藏。ギリシヤ、ヘレニスティック時代（西紀前二〇〇年頃）の末期に製作された女神像である。顔面の表情にはギリシヤ彫刻家の製作といふよりもローマ人の製作に近いものがある。衣の皺は古典的ながら輕快味を示さんとした無理がある。名作といふ事は出来ないまでもこの時代の藝術を代表する恒久的價值を認める。（世界美術全集第三卷の解説による）先に掲げた「悲しみのアテネ」と比して、柔弱に流れた彫のあとがみられる。衣服の線も前者の方に古拙ながらギリシヤ人らしいするどい精緻を認める事が出来る。

【ギリシヤ彫刻（圓盤投）】（一一頁）ミロン原作。これは「ミロンの圓盤投（デイクスロボロス）」と稱して昔から有名な希臘彫刻の一代代表作である。この原作について當時ルシヤンが「圓盤を投げる人はまさに投げようとするための位置に身をかゞめ、頭を圓盤持つ手の方に曲げ、片足は殆どひさまづかんとするまでにひくめて、われとわが身をまつすぐに伸べようとしてゐる。」と記すのによく合致する。ミロンは希臘彫刻の黄金時代を開いた人で、從來の典型化された、感じの硬い動かない表現に對し、新時代の氣勢にそふべく、いき／＼とした人體の活動そのものを寫實し、希臘彫刻に新生面を開いた大家である。その最も得意とするところは銅像であつた。「圓盤投」の原作は實にその尤なるものであつた。——われらは今われらの前に、激動の瞬間に於ける一人の雄々しい青年が、線といふすべての線において、今やまさに身體と四肢と顔面とのあらゆる美しさを表現しようとする、その直前の緊張感を、數千の觀衆の前に毅然として示さうとする、その刹那の光景をみる。この彫刻を措いて外

に、われらは決して肉體の形に宿つた精神性の充實さをこれだけに示される例を知らない。實に希臘精神の殊にその完全にして健實なる肉體を讚美する精神の最も現實的な、且つ最も理想的な藝術至高の表現といふべきである。(世界美術全集第二卷の解説による)

二 北闕の天

出 所

【太平記】 全四十卷。花園天皇の文保二年(一九七八)より、後村上天皇の正平二十二年(二〇二六)に至る凡そ五十年間の戦亂を記したる書なり。本文四十卷の外に劍の卷、一卷を附して、十柄の劍・鬚切、膝丸、小鳥等の各劍の由來を詳記せり。本書の題號は、最初「安危由來記」といひ、次に「國家治亂記」と改め、次に「國家太平記」といひ、次に「太平記」と改め、即ち四たび變じたりといふ。今の「太平記」は「天下太平記」を省略したるものなるべし。

作者編年等に就きては、普通北畠玄惠(二〇一〇歿)なりといひ傳ふれど、「太平記編纂由來書」に據れば、案によりて作者を異にし、「鎌倉大草紙」「太平記批判記」等は撰者の事を云はずして、尊氏歿後凡そ五十年後の作なりといへり。近年大學史料編纂員の研究にて洞院公定の「日記園太曆」に基きて小島法師の作なりとすれどその傳未だ詳ならず。茲には未詳に附す。(國書解題)

尙、詳しくは卷五、二五、「熊野落」の條参考のこと。

要 旨

本教科書に於いて、太平記の文章は既に數度讀んで來た。従つて、其の文章の味ひも畧々了解が出來、且つ南北朝時代の文學的所産のめぼしいものとしての之を、同時代の代表作徒然草に對せしめて、その特質を知り、文學上の地位を知ること出來た。又見地を擴めて、鎌倉室町時代の文學の一つとしての之を、同時代の平家物語等と對せしめて、その特質を知り、當代文學上の地位を知ること出來たわけであるが、更に一步を進めて、一つには太平記の味ひを一層深く知らしめたい、即ち、之を平家物語等に比するに、元來平家や盛衰記を模範としてこれにやゝこしい修辭を加へたのらしいから見劣りする事はいふ迄もないが、花々しい戦争や大義名分に關する調子の高い記事に満ちて、人の血を湧かす所があり、又後世に大きな影響を與へたものであることを知らしめたいために、作中の主人公とも見るべき後醍醐天皇崩御の事を探ることにした。

死は生と共に確に人生の大事である。この一大事である死を、而も主人公の死を描くのだから、作者は心血を注いで筆を取つたに相違ない。だからとて、この一段が太平記全篇の中で隨一の名文であるか否かは讀者にそれ／＼の見方があらうけれども、名文であるには違ひない。そしてその立派な文

章として寫し出された先帝、十善至尊の御身であり乍ら、逆臣の爲に、最も御難儀を遊ばされた後醍醐天皇の崩御の御模様を知らしめたいのが、更にその一つである。

段 落

一、初めから……………崩御なりにけり。(一四頁八行目まで)

主上御不豫の事から文を起し、名醫名藥も効をあらはさず、玉體日々に御衰微遊ばされ、最早御恢復の見込がないので、御側役の人の御遺言を願ふにつけ、主上は御最期とも拜せられぬ程落ちつきのある御言葉を遺して遂におかくれ遊ばされた様を記す。

二、悲しいかな……………北向に葬り奉る。(一五頁三行目まで)

大集經に、「妻子珍寶及び王位、臨命終時には隨ふ者無し」と示されてある如く、主上は崩御になつて、只御一人黄泉に旅を遊ばす。これはどの様な力を以てしても如何ともすることが出來ない。せんかたのない事であるから、萬人哀悼の中に御葬り申した。

三、寂寞たる空山……………(終りまで)

先帝の御徳をしたひ奉つて君の爲に忠勤を拔んでようと志してゐた卿相雲客の望みも今は空しくなつたので、思ひ／＼に身の隠れ家を求めて禁闕を辭したといふ哀寂の光景を叙して文を結んである。

解 釋

【吉野の主上】 後醍醐天皇。足利尊氏の謀反によつて、天皇は吉野に潜幸遊ばされてあつたから斯く云つたのだ。

【御不豫】 ゴフヨ。天皇の御病氣。御不例。

【醫王善逝】 イワウゼンセイ。藥師如來の別名。醫王は醫中の王の意で佛を稱讚して醫王に譬ふ。無量義經に「醫王大醫王。分ニ別、病相。曉ニ了藥性。隨レ病投レ藥。令ニ衆生。服レ」涅槃經五に「成ニ等正覺。爲ニ大醫王」とある。善逝は佛の十號（如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。）の一つで、梵語修伽陀 *Siddhata* の譯。好去ともいふ。一切智を以て大車とし

八正道を行じて涅槃に入るが故に善逝と名づける。〔彌教〕

【誓約】 ちかひ。即ち、藥師如來は東方瑠璃國の教主で、十二の誓願を發し、衆生の病源を救ひ、無明の痼疾を治するといはれてゐるので斯くいふ。

【耆婆】 ギバ。印度古代の女醫の名。譯して活命能活等といふ。頻婆娑羅王の子にして、阿闍世の庶兄なり、棕女を母となす。其の胎を出づるや、針筒藥囊を持す。母これを惡み白衣に裹みて巷中に棄つ。無畏王遙に見て其の何なるかを問ふ。人小兒なるを答ふ。更に死活を問ふ。たほ活けりと答ふ。無畏王依て

これを拾ひ、梵音のジーヴァカ即ち活ける者といふ名を與へ、乳して養ひ後母に還す。乃ち時の名醫得又尸羅國の阿提梨賓迦羅に就きて醫法を學ばしむ。學ぶこと七年、阿提梨賓迦羅耆婆に命じて一由旬の野に藥草を求めしむ。耆婆歸り報ずらく、一として藥草ならざるものなしと。阿提梨賓迦羅乃ち耆婆を以て醫明の業成れりとし、去ることを許したりと云ふ。かくて耆婆は頻婆娑羅王・釋尊等の病を療し亦深く教佛に歸依せり。阿闍世の父王を弑して後疾を得心中大に悔恨を生ぜし時はこれを勸めて佛に歸せしめたり、後世支那の扁鵲と併稱し、醫神として祀るに至れり、〔百科〕

【扁鵲】 ヘンジャク。支那春秋時代の名醫。

姓は秦氏。名は越人、勃海の鄭の人なり。少時人の客舎の長となる。客に長桑君といふ者あり。越人その異人なるを知り、常に謹んでこれを過す。出入十餘年。長桑君乃ち越人に悉く禁方の書を傳へ、且一藥を與へ、上池の水を以てこれを飲ましむるに三十日を経て眼自ら神に通じ、能く病者の臟腑血脈を洞見す。こゝに於て醫を以て家を成す。或は齊にあり或は趙にあり。趙に居て扁鵲と名く。趙簡子の異疾を視て、其言妙驗あり。毓を過ぎ、其太子の死したるを治して蘇せしむ。齊の桓侯平に招かれて客となり。入朝して其疾を未然に見察す。醫名天下に聞ゆ。邯鄲を過ぎ、其俗婦人を貴ぶと聞き即ち帶下の醫となる。維

陽を過ぐ。その俗老人を愛すとき、即ち耳目痺の醫となる。遂に秦に赴き咸陽に入る。秦人の小兒を愛すを知り即ち小兒の醫となり、到る處俗に従ひ變をなす。秦の大醫令李醯自ら技の扁鵲に如かざるを知り、人をしてこれを刺殺せしむ。爾來天下の脈法みな扁鵲による。〔百科〕

【晏駕】 アンガ。天子のおかくれ。崩御。晩駕。常より遅く車駕に召して朝せられる義で、臣下の情として君のお出ましが無いのを崩御ゆゑと思ひなすに忍びぬ意を以ていふ。

〔辭源〕

【大塔の忠雲僧正】 中院贈太政大臣光忠の子。

【神路山】 カミヂヤマ。伊勢國度會郡。伊勢神宮の神苑から遠く南に續いてゐる山。

【石清水】 イハシミヅ。石清水八幡宮。山城國綴喜郡男山にある。

【神路山の花云々】 皇家の榮ゆる期を待つてゐたならばの意。神路山の花開くは皇室の榮ゆること、石清水の流れ澄むも意は同じ。

【佛神三寶】 三寶は佛寶・法寶・僧寶のこと。

【典藥頭】 典藥寮の長官。藥を徴したり官の醫師を管轄して疾病・藥園のことを司つたりする。

【十善の天位】 天位とは天子の位、寶祚の意。天子は十善（不殺生。不偷盜。不邪淫。不兩舌。不惡口。不綺語。不貪欲。不瞋恚。不邪

見。）を持し、戒力の能く人中の王たる故に天皇を十善の主又は十善の君といふ。前世で十善を行つたものが其果報で天子となるより云ふ。

【三明】 サンミヤウ。三明とは宿命明、天眼明、漏盡明の三をいひ、智の法を知る事顯がだから明と名け、又智明、智證明といふ。右の三つは現在苦の相を知つて、一切の煩惱を斷ずる智である。

【覺路】 カクロ。正覺の道。菩提の道。覺りにいたる道。

【最後の一念に依つて云々】 最後の心一つ

が惡いと、凡夫の生死往來する三界といふ迷界に必ず生れるといふこと。

三界は一切衆生の生死往來する世界、即ち欲界・色界・無色界のこと。

【萬歳の後】 崩御の後。天子及び貴人の死後といふ意味に使ふ言葉。

【後生善所】 ゴシヤウゼンショ。死んで更に來生に於いて善い所に生れ出る事。

【妻子珍寶云々】 大集經卷十六「妻子珍寶及王位。臨命終時無隨者。唯戒及施不放逸。今世後世爲伴侶。」といふ偈の句に據つたも

の。妻子・珍寶・王位の如き、この世で人の最も愛着するものも、臨終の時には一つも随はないといふこと。

【如來】ニヨライ。佛の十號の一。(醫王善逝の項参照)梵語の多陀阿伽陀Tathagataの譯。如は眞如。眞如の道に乘じ、因より果に來つて正覺を成ずる故に如來と名づける。又眞如の道に乘じ三界に來て教化する故に如來と名づける。——應身佛。又諸佛の如くにして來る故に如來といふ。——法身佛及報身佛。

【秦の穆公が云々】史紀秦本紀に、穆公が卒した時、從ひ死ぬ者百七十七人に及んだ。秦の良臣子輿氏三人(奄息・仲行・鍼虎)も亦この中に加はつてゐたとある。

在所たる吉野山を京都に對して云つたもの。

【北闕の天】北闕は(一)宮城の北門。上奏謁見等をする者は、この門から出入する。(二)内裏。宮中。こゝでは(二)の意。天とは方角をさして云ふに用ゐられる。「故郷の方」といふに「故郷の空」といふのと同じ。

【繼體】ケイタイ。祖先の遺體を繼ぐ義で、皇太子をいふ。繼體の君とは祖先の遺體を繼いで御位につかれた天子の意である。

【綸言】リンゲン。天子の御言葉。詔敕、絲綸、綸旨、綸音、綸綽。王の言は絲の如く小くとも臣民には綸言の如く重く、又綸の如く小くとも絆の如く重い、から出た語。

語義

【始皇帝云々】始皇本紀に秦の始皇帝を驪山に葬る時、奇器珍怪を悉く冢中に埋めたといふ事が見えてゐる。

【生々世々】シヤウジャウセセ。現世も未來も。生れ變り死に變り何時までも。未來永劫に。

【忘念】マウネン。妄執に同じ。迷へる心。執念のために落ちつく事の出來ない心。

【第八の宮】義良親王。後に後村上天皇と申す。

【股肱の臣】ココウのシン。たのみとすべきけらい。

【縱令】タトヒ。假令。設。なども書く。

【南山】次の句の北闕と對をとつたので、行

【法華經】八卷、二十四品から成る。天竺の沙門鳩摩羅什が漢譯したもの。五の卷は藥草喻品である。

【丑の刻】今の午前二時と三時の間。

【北辰】北辰は北極星。此星は常に其位置に在つて動かす。天の樞をなす故に天子の位にも喩へる。論語爲政篇に「北辰の其の所に居て、衆星之に向ふが如し」とある。天子が北に居て、群臣が南面して事へまつる狀が似てゐるので譬へたものである。

【九泉の旅】死去の事。九泉は黄泉に同じ。よみぢ。

【奈何】イカン。如何・那・奈とも書く。イカニの音便。

【無常の敵】 無常は佛教上の語で、この世の中にありとあらゆるもの、生滅變遷して一つも常住でないこと。人が生命を殞すのも無常の風の襲うた爲めだと見る。その無常を敵と見立てたのである。止規に「無常殺鬼、不擇二豪賢、危脆不堅、難可恃怙」とある。

【中流に船を覆して云々】 鴨冠子の「中河失船、一壺千金。」とあるによつたもの。中流で船が顛覆した時は、一壺でも之を得て浮子とするから千金の値があるといふ意である。

【五更の雨】 五更は辭國に(一)一夜を五つの時刻に區分した總稱。又之に甲・乙・丙・丁・戊を配して五夜といふ。初更また甲夜(舊時の

戌の刻、今の午後八時)・二更又乙夜(亥の刻、午後十時)・三更又丙夜(子の刻、午後十二時)・四更又丁夜(丑の刻、午前二時)・五更又戊夜(寅の刻、午前四時)(二)第五更目。第五夜、戊夜。とある。こゝは(二)の場合。

【棺槨】 クワンクワク。うちぐわんとそとぐわんと。棺は屍をぢかに藏めるはこ。くわんをけ。うちぐわん。槨は棺を入れる外ばこ。そとぐわん。椁また郭とも書く。

【藏王堂】 ザワウダウ。大和國吉野郡吉野山なる金峯山寺のこと。藏王權現堂ともいふ。もとは金輪王寺ともいふ。宗旨は、もと天台眞言兩派なりしが、今は天台宗延曆寺末となる。本寺は大峯山上山下の伽藍僧坊の總稱に

して役小角の開基する所なり。中古僧坊百餘ヶ院ありて、僧徒多く屢々蜂起して横暴をなす。保元中高野山と屢々其所領を争ふ。延元の亂、後醍醐天皇駕を吉野に移し給ふや、行在所を寺中に置く。正平三年正月賊將高師泰師直來りて行在所及び寺を燒く。康正元年再興し、天正中豊臣秀吉之を修造す、一ノ橋を渡り、黒門を過ぎゆくこと一町、銅の大鳥居あり、南都大佛の餘銅を以て作る所といふ。發心門の額は後醍醐天皇の宸筆といふ。鳥居を過ぐれば金峯山の總門にして二王あり。高五丈二尺、東西七間、南北四間、康正元年再造、天正十四年修補す。本堂は藏王堂といふ。高十一丈二尺、十八間四面にして壯嚴華麗の

大殿堂なり。本尊は藏王大權現立像三軀あり寶物に兆殿司筆の絹本着色千手觀音像一幅、後醍醐天皇宸筆と稱ふる金光明最勝王經金銅經三函(國寶)等あり。本堂の前に四本の櫻あり。護良親王最後の御酒宴を催され、舞樂を奏せしめし處。南門址は村上義光の戦死せし處。藏王堂西に實城寺址あり、南朝三代五十餘年間行在所たりし處なり。【國史】

【良】 ウシトラ。丑寅。昔の方位で今の東北に當る。

【土墳數尺の草云々】 土墳は土饅頭のこ

土墳の傍には數尺の草があり、それに通ふ一本の細い道がある。その道を行つて、土墳に詣れば、涙は出し盡して出ないが、悲しみのみは盡きることなく頻りに湧くといふ程の意。

【鼎湖の雲を瞻望して】 神去りまし、大君をたゞ空しく偲びまゐらせるより外はないといふ意を技巧的に描寫した句で、想を史記封禪書の「黄帝采首山銅鑄鼎於荆山下。鼎既成、有龍垂胡髯、下迎黄帝。黄帝上騎。群臣後宮從上者七十餘人。龍乃上去。餘小臣不得上。乃悉持龍髯、龍髯拔墮、墮黃帝之弓。百姓仰望、黃帝既上天。乃抱其弓與胡髯號。故後世因名其處曰鼎湖。」から得たの

である。
【恨を天邊の月に添へ】 こゝは天皇の崩御を哀しんで、空の月に一層の哀しみを増すの意。

【霸陵の風】 ハリヤウのカゼ。霸陵は秦の葬場である。霸は水の名、漢の文帝をその上に葬り、改めて霸陵といふ。長安城の東七千里の處にある。本文は文帝の故事を用いたものであらう。「霸陵の風に夙夜する」とは、これも亦崩御をかなしんで先帝の鎮ります奥津城を朝早くより夜おそくまで侍して、夢にまで昔の花を見る意。

【末法の風俗云々】 釋迦の死後千年を正法、その後の千年を像法、その後の一萬年を

末法といふ。佛の教も衰へた末の世の意。天下の亂は末法の習なれば、それだけでは何も

世を隠れるに當らないが、大いにこの天皇に望みをかけたのに、それが急に崩ぜられたので、世をはかなく思つたの意。

【拜趨】 ハイスウ。他人に對して、その家に行く事をいふ敬語。御うかゞひ、參上。

【御裳濯河】 ミモスツガハ。伊勢神宮の傍を流れる川。轉じて皇統をいふ。倭姫命が此水で裳を濯がれたといふ傳説によつて、この名がある。

【流の末も絶えはて】 皇統が絶えて、といふ意であるが、こゝはさういふ意味ではなくて、後醍醐天皇が崩ぜられて、今は事へ參ら

す事も出来なくなつたといふ意味に云つたのである。

【筑波山の陰云々】 筑波山は常陸にある。

古今集東歌「筑波ねの此の面かの面にかげはあれど君がみかげに増すかげはなし」に基づき、君恩の深い事にいふ。即ちこゝの文意は、君恩に浴しようとする者もなく、天下皆賊徒の手に歸する世になりさうだの意。

【魔魅】 マビ。まもの。ばけもの。ここでは賊徒を指す。

【卿相雲客】 ケイシヤウウンカク。卿相は公卿に同じ。天子を佐けて政をする長官。雲客は殿上人といふに同じで、四位・五位の人又は六位の藏人の昇殿をゆるされたもの。くも

のうへびと。

【東海の波】 戦國策に、齊の魯仲連が、魏の秦を尊んで帝としようとするのを聞き、「若し秦を帝とせば、連は東海に赴いて死するあらんのみ。」といつた事が載せてある。こゝは北朝の天子の代となる順序であるから、そんな君に仕へず。仲連の如く死なうとしたこと。

【南山の歌を唱へて云々】 三齊略記に「齊威が齊の桓公の出るを候つて、牛角を扣きな

鑑賞

太平記の文を読む度びに感ずる。太平記は歴史にしては文學が過ぎ、文學にしては歴史が過ぎてゐる。そして道義を主張し、武張つた事ばかりを書き、探偵小説的の事が大部分を占めてゐる。又平家物語のやうに事件の急轉直下的な趣きがない。ダラ／＼の進み方で緊張した所少なく、腕ツ節の争ひばかり多くて油氣がない。年代にも人物にも中心點がない、と。かういふわけで、鎌倉時代初期に出

がら南山の歌を歌つて、其の身の不運を嘆じたその歌に、南山粲粲。白石爛爛。中有鯉魚。長尺有半。生不遭堯與舜。短布單衣纒至。許。從昏飲牛至夜半。長夜漫漫何時旦。よつて桓公はかれを召して相とした、とあるのに據る。こゝは南山といふ名から南山の歌を思ひついて書いたもので、又聖帝が出たらば出でて仕へようと、身を隠したことをいふ。

た平家物語には、文學物としては劣ること勿論だが、一方に於いて、武勇義理一點張りの時代・國民を描き得た點と國民の實際活動に大影響を及ぼした點と、且つ描寫するに當つて軍記物特有の筆致を以てし、ともかくも斯かる稀有の大事件を文學的にも相當面白く描いてゐる點とは大なる取り所だと思ふ。本課について更に委しく味はつて見ると、

(一)内容上——後醍醐天皇は畏くも金枝玉葉の御身であり、英明な君主であらせられながら、逆賊のために天が下にかくれがもなき御艱難を、永い間うけさせられた。而も南風常に競はず、天日再び耀くに至らずして延元三年八月九日から御不豫に亘らせられた。さうして同じ月の十六日に崩せられた。作者は、國民の悲しむべきこの事件に同情し、物悲しくも淋しい筆致を見せてゐる。御臨終の章は天皇の御逆境に立たせられ乍ら御一身については落着き拂つて迫らず、眞に安心立命の域に達した御態度、國事については逆徒を滅盡して天下を泰平に復せしめないで世を去るのが氣がよりであるとの御苦衷を描き出して思はず襟を正さしめる。

「悲しいかな、……五更の雨に向ふが如し」の一節は、『平家』の安德天皇御入水の條の『千尋の底にぞ沈み給ふ悲しき哉無常の春の風、忽に華の御姿を散し、痛しき哉分斷の荒き波玉體を沈め奉る』に似て悲哀の限りである。

一笑の死を悼んだ芭蕉の句に、

塚も動け我泣く聲は秋の風

といふがある。邪氣のない誇張は却つてその悲哀の情を深めてゐるやうに思はれる。本文も戦記物語の常として誇張的な描寫が少くないが、右にあげた芭蕉の句の場合のやうに無邪氣な誇張が往々却つて効果を収めてゐる。葬禮の御事を描くに盛り澤山の形容詞、誇張的修辭を用ゐて終りに「哀なりし御事なり」としてゐる。景様によつては腰折れの感がないではなからうが、簡單平凡な結びの句が、却つて上の形容を生かしてゐるではないか。

次の章の殿上人たちの失望落膽と悲しみともよく描かれてゐる。

(二)形式上——文體は鎌倉室町文學の特徴たる和漢混淆體で、それに力瘡の入つた所、武張つた所を描くに漢文句調を、悲哀な場合を描くに佛語を用ゐるといふ戦記物語特別の妙味を見せてゐる。

「醫王善逝の誓約も……」

「さりとも佛神三寶も捨てまゐらせらるゝ事は、よも候はじと存じ候ひつるに……」

「偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に……」

「最後の一念に依つて三界に生を引く……」

「妻子珍寶及び王位……」

などは佛語によつて哀れな情景を描き、緊張した心持を筆にあらはすに、

「玉骨は縦令南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北國の天を望まんと思ふ。」

「君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず。」

「悲しい哉……臣一人もなし。」

「奈何せん……兵更になし。」

「中流に……漂ひ、

暗夜に……向ふが如し。」

「鳥啼き日已に暮れぬ。」

「鼎湖の雲を……天邊の月に添へ、

霸陵の風に……夢裏の花に慕ふ。」

「或は東海の波を踏んで……跡を尋ね、

或は南山の歌を唱へて……行を學ばん」

等、四六駢體式の對句によつて文章を飾つたものである。

挿 繪

【後醍醐天皇御像】 (一三頁) 京都府大徳寺藏。東京帝國大學史料編纂掛所藏の圖版による。

三 新葉集抄

撰 一者

【宗良親王】 ムネナガシンワウ。後醍醐天皇の第八皇子、母は藤原爲子。十餘歳にして僧となり尊澄と稱し、妙法院に住す。ついで三品に叙し、天台座主となりしが、後醍醐天皇の北條氏を圖り給ふや、兄尊雲（護良親王）と共に其謀畫に預る。未だ發せずして事泄れ、元弘元年八月天皇笠置に幸し、親王は僧兵を糾聚して、佐々木時信と幸崎濱に戦ひ、之を敗りたれども、後北條氏の軍を支ふること能はずして笠置に走り、城陥るに及びて捕へられ、二年讃岐國託間に流さる。三年北條氏滅び、天皇闕に歸り給ふに際し、四國の兵を率ゐて京都に還り、再び座主となる。建武二年二品に叙す。延元元年（建武三年）足利尊氏反して京都に逼るや、天皇避けて延暦寺に幸し、特に親王に命じ、僧徒を勉勵せしめ、仍て一品に叙す。座主にして一品に叙すること茲に始まる。既にして天皇京都に還るに及び、親王は遠江國井伊城に走る。三年（曆應元年）の春北畠顯家と共に入京したりしが、顯家戦死するの

後吉野に走り、其秋再び井伊城に赴きて東國と經畧せり。四年還俗して名を宗良と改め、尋で中務卿征東將軍となる。興國元年（曆應三年）高師泰來り襲ひ、井伊城陥りしを以て越後に走り、爾來駿河信濃・甲斐・美濃・越中・越後の間を往來し流離竄匿、備さに艱難を嘗む。正平七年（文和三年）新田義興同義宗等兵を武藏に起すに及び、之に應じ、武相の地に轉戦せしと雖も利あらず、また越後に走り後信濃に赴く。然るに後村上天皇の崩後南風頓に競はず、親王また窮蹙せるを以て、文中三年（應安七年）吉野に赴きしが、天授三年長谷寺に入りて再び僧となり、尋で信濃に往き、後河内山田に寓す其終る所詳かならず。著書に新葉和歌集李花集あり。國史

出 所

【新葉和歌集】 二十卷。宗良親王の編。元弘以後弘和に至る歌を集めてその數一千四百十五首あり。蓋し南朝に撰集なく、又北朝の撰集に南朝人の詠む歌の入らざるを慨きてこの集を撰ばれしとなり。後龜山天皇これを御覽して勅撰に准ぜらる。親王の序文中に「抑々かく撰び集むることも、只そのう

ちの僅かなることわざなれば、あめの下、廣きもてあそびものとならんことは、思ひよるべきにあらぬを、はからざるに、今勅撰に准ふべきよしの勅をかぶりて、老の幸のぞみに越え、よろこびの涙たもとにあまれり。これによりて、所々改めなほして弘和元年（二〇四一）十二月三日これを奏す。云々とあり。水戸西山公も南朝を正統とせるより、「新葉集」も勅撰集に數へ、扶桑拾葉集の勅撰集序文の中にも本書の序文を加へたり。（國書解題）

要旨

鎌倉室町時代の頭尾に亘つて、連綿たる存在を続けたのは和歌であつて、總べて十六篇の勅撰集及び准勅撰集が編纂せられ、其外名々の家集も可成りの數に上るといふ程であつた。然し質の上から見ると、此時代の和歌は既に下り阪の氣味があつた。といふのは、多くは些末な形式技巧に囚はれ、小器用に歌を作りこなすといふだけで、風韻に乏しく何等人を動かす程の實感なく、みすばらしいものであつた。言葉を換へていふと、概して古今乃至新古今の作風を摸倣踏襲して、墮落し、頽廢し、喪心し、横外よこがへれたものであつた。その中であつて見るべきものは、新葉集と金槐集と後鳥羽院の御製とであつた。何れもおのが逆境若くは意に滿たない境遇が多感な詩人の心こころを感かして逆り出たものであるだけに、慷慨悲憤の情があらはれ、高丈くて落着いたものとなつてゐる。新葉集は元弘以後五十

年間に於いて、南朝の社禮を回復しようといつた人々の作の集録である。詠者自身が肺腑を發いて眞情を吐露したものだけに、雄渾卓拔で悲憤慷慨の情に充ち滿ちてゐる。乃で本課は一に時代的特徴のある新葉集の歌を萬葉、古今、新古今など、對照して味はしめたい事。二には新葉集の歌を通して、皇上を始め奉り、南朝の人々の多難な歴史的事實を窺はしめたい。尙前課に關聯して後醍醐天皇の御受難を説く必要があらうと思ふ。

解釋と鑑賞

【臥侘びぬ、の御製】 吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に「といふ端詞ハシゴトがついてゐる。「わぶ」は「宵ヨに「うらぶるノ約カト云、佗僚、失志貌」とある。思ひ煩ふ。心配する。もだえる。袖にはの「は」は強めの助詞。「山おろしの風」山から吹きおろす風。一首の意は、冴えかへつた霜が寒く肌身に應へる夜の臥床は御所のそれとは違つて、こゝは

行宮だから何等の設備もなく、荒れて、袖には冷たい山嵐の風がしげく吹ききたつて寝るに寝られず思ひ煩ふのであつた、といふ程の意味で、あばらなる行在所で苦難せられる御身の假寝の御いたましい様が窺はれる御歌である。

【かげ宿すの、御製】 前と同じくおいたましい状のあり／＼とうかどはれる御歌であ

る。これには「月前露といふことをよませ給うける」といふ端詞が添へてある。この端詞によると題詠らしいが、眼前の事實を題にして詠ぜられたものと拜する。しかも御體驗による實感から迸り出た言々句々だけに強い調べとなつてあらはれてゐる。一首の意は、影を宿す月までが今は馴れて遠慮もなく射し込む。月の光に見れば袖に白露が置いてゐるこれは都では嘗て無かつたことだ、といふのであらう。「袖の白露」は袖に宿つた白露で、雨露を凌ぐに十分な蔽ひもないので、袖にも露が宿る意味は窺はれるが、それと同時に憂き身を歎かせられて袖には涙の露の宿ることも含められてゐる。然るを憂き身をかこたず、

涙を月に照された「白露」と見、あばらなる假の御宿りの心苦しさを云はずして「かげ宿す月さへ今は馴れにけり」といふ軽い調子の表現は、憂き身を歎くのにも増して一層のあはれを覚えさせられる。「けり」は詠歎的に用ゐられた助動詞である。

【まだ馴れぬ、の御製】 端詞に「題しらず」とある。御隨感の作であらう。前の歌と同じ心の境を詠ぜられたのである。たゞ前のは月が對境であつたが、これは村時雨であり、憂き身の歎を表てに現はさずに對境に添へてあつたのに、これは歎きのうちへ對境を引き入れて詠んである。お痛ましさを偲ばれる御歌である。村時雨は一むら降りすぎる時雨。村

はあて字である。一首の意は明らかである。

【鳥の音に、の御製】 「曉」〔明時^{アサ}の轉〕夜あけがた。「ねざめ」眠りからさめること。雑の部に「題しらず」として掲げられてゐる。歌意かくれたる節はない。あけ方の心の状態をよんだもの。鳥の聲に睡りから醒まされて、なかば空虚な氣持で居る。あたりは静かだ。あちこちの鶏が高く低く啼く。明け六ツの鐘が響いて来る。強い響きが尾を曳いて、波紋を描いて、明け方の空氣の中に込み込んで消えて行く。消えると又響く、消える。響く。空虚であつた頭の中に何物か動き始める。時は亂世である。昨日ありしものも今日は無い。朝に榮えて夕に亡びる世の中である。

——鐘の響の明滅にも似て——人が一日の中で深い物思ひに入り易いのは曉どきである。右はこの心の境地を詠んだもの。時代を背景として御作を味つて見ると、一種の淋しさをもつたしめやかな趣が感ぜられる。

【九重に、の御製】 「九重」禁中の別稱。(支那で宮居を九天の上に譬へていふのから出た稱)「ますみの鏡」清く澄んで極めて玲瓏たる鏡。十寸鏡。まそかゞみ。「けれ」は詠歎の意に用ゐられた助動詞。一首の大意は「宮中に奉安されて、葦にかはらず今も玲瓏と澄んだ神鏡は、やつぱり、世を照し人の趣くべき道を知らせる光であるわい」といふのであらう。これは賀の歌である。「題しらず」として

あるが、宮中に奉安してある御鏡に添へて、その御鏡が常磐に堅磐に世を照す光であるやうに、皇室の御稜威は萬代不易に耀き、世を統べ民を導き給ふ皇統は、連綿として世と共に榮えますのを祝つて、所懐を詠ませられた御歌である。

【思ひさや、の御歌】「梓弓(一)昔、梓(二)あかめがしは又あかがしはとも云ふ。山野に育つ。高さ二丈餘に至る。葉は三又で大きさ三四寸乃至五六寸。鋸齒あり、互生する。芽も莖も赤い。夏穂を生じ黄白色の花群り咲く。實の大きさ二三分。支那では材を版木に用ゐる。梓は古名である。で作つた弓。(一)引く、張る、音、本、末などいふ語の枕詞。(言)こ

ここでは(一)の意。但、單に弓といふべきをその美稱として用ゐる場合が多い。必ずしも梓材で作られた弓とは限らぬ。一首の意は「ついで今まで手も觸れた事のなかつた梓弓(軍)軍道具といふべきをその中の一つを擧げて具體的に云つたもの」に日夜に我が身が忤れ親しうとは嘗て思つたか、いや豫想だにしなかつた事だ」と、こんな意味であらう。現在の意外な境遇の感慨量り難いのを詠まれた御歌である。これには「あづまの方に久しく侍りて、ひたすらものふの道にのみたづさはりつつ、征東將軍の宣旨など下されしも思ひの外なるやうに覺えてよみ侍りし」といふ端詞がつけてある。宗良親王が東國に下られた消

息について「國民の日本史——吉野時代」に、吉野朝廷では、顯家が境の石津で戦死（延元三年五月）し、義貞が越前の藤島で戦死（同年閏七月）して、官方軍力の二大本據が殆ど瓦解したので、一時は吉野朝廷の維持も出来ないではないかとまで憂慮したが、多年逆境に在つて、鍛錬を経て來た君臣の事であるから、それしきの事では挫折せず、再び敗殘の軍兵を收拾して運命の挽回に努めた。即ち延元三年閏七月、顯家の弟顯信を中將に任じ、亡兄の後を襲いで陸奥守鎮守府將軍となし、義良親王を皇太子と定むる旨の内勅があり、顯信は父親房と共に、義良親王を奉じて再び陸奥に赴くこ

とになつた。親王は此時、年僅か十一歳であつた。此計畫は、白河の城主結城宗廣の建策に基いたもので、同時に宗良親王は遠江に、花園宮は四國に、懷良親王は鎮西に下つて天下勤王の士を鼓舞することになつた。義良親王、宗良親王は、前きに顯家が奥州の大軍を率ゐて西上した時、其軍中に在つて諸所の戦闘に参加せられ、具さに艱苦を嘗められた方々であるが、今又再び其艱苦を嘗める爲めに東國へ下られることゝなつた。

とある。
この御歌は親王が東國に下つて居られる時の述懐で、端詞に「あづまの方に久しく侍りて

ひたすらものゝ道のみたづさはりつゝ征東將軍の宣旨など下されしも思ひの外なるやうに覺えてよみ侍りし」とある。金科玉條の御身で干戈の間に奔走し給ひ、元弘官軍の爲に艱難辛苦遊ばされた事の偲ばれる御歌である。

【君のため、の御歌】 一句の意「捨て、甲斐のある命だとして見れば君の爲め世の爲めに捨てるのに何惜しい事があらうぞ」といふ程の意。新葉集を見ると、前掲の「思ひきや……」の歌の次に「同じ頃武藏國へうちこえてこて

さし原といふ所におりゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよしつはものどもにめし仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし」といふ端詞が添へて掲げてある。端詞によつて見ると、兵共を激勵し、士氣を振ひ起させるように鞭撻せられた、その時に詠まれた御歌らしい、つまり、一方では勇みはやり、一方では賊軍の大逆を憤る慷慨の心その二つの心が合して現はれた御歌である。何處かに萬葉の調を帯びた力強い御歌である。眞淵の所謂高く直き心の罩められた御歌である。

参 考

【後醍醐天皇】 名は尊治、後宇多帝の第二子なり。母は談天門院藤原忠子といふ、花園帝の禪をうけて位に即く。時に後宇多上皇院に在つて政を斷ず。平高時鎌倉にあり、威を恣にして民を虐し人心離

畔す。帝近臣と謀り、隙に乗じて之を討たんとす。高時これをき、兵を擧げ闕に向ふ。帝笠置山に逃れ賊の爲に獲らる、乘輿遂に隠岐に移り、近臣害に遭ふ。改元を歴ること三度にして正慶二年に至り隠州より密に伯州に赴き遂に船上山に入る。山陰山陽の士民之に従ふ者多し。遂に義兵を起し、帝を奉じて京に入り、再び帝位を正し、舊物を恢復す、時に新田義貞上野より義兵を起し、鎌倉を攻め悉く北條氏を戮す。是より禮樂征伐天子に復歸し、朝綱始めて正し、帝復辟して女謁盛に行はれ、賞罰正しからず。士民又北條氏を思ふ。足利尊氏兵を起して叛し、自ら征夷大將軍と號す。郡縣風を望み靡然として之に應ず。王師征討し遂に克つ能はず。兵威日に縮まる、帝遂に吉野に遷幸し、草萊を披き、朝廷を建つ、是を南朝となす。建武五年崩す。乃ち光明帝の曆應元年なり。〔人名〕

【後村上天皇】 南朝の帝なり。名は義良、後醍醐帝の第七子なり。母は淮后廉子といふ。後醍醐帝崩じて位に即く時に、京軍屢々闕を侵せども下す能はず。在位二十九年にして正平二十二年崩す。改元すること二、壽四十一。觀心寺に葬る。〔人名〕

四 攝 待

作 者

【宮増】 傳記不詳。氷室。逆鉾。鞍馬天狗。大江山。烏帽子折。浦島。元服會我。調伏會我。錦戸。菅丞相。大木。舞車。等の作者。（「二百十番謡目録」）「能本作者註文」には作者不明とある。「親元日記」に文明十五年三月十二日演能の事が見えてゐる。

出 所

【觀世流謡曲】 能柄は四番目、一段劇能。

【出典】 この山伏攝待の事は、平家物語諸本には見えないが、義經記卷八「次信兄弟御弔の事」に、判官段高館へ移らせ給ひて後、佐藤莊司が後家の許へも、折々御使つかはされ憐み給ふ。人々奇異の思ひをなす。ある時武藏を召して仰せられけるは、次信忠信が跡を弔はせ給ふべき由仰せられける。……孫ども後家ども引具して參る。御志の餘りに、御自筆にも法華經遊ばされ弔はせ給ふ。あ

りがたき例には人々申しあへり。

といひ、更に兄弟の母の所望により、兄弟の子を義信義忠と名乗らせた由を記してゐる。（義經記の異本判官物語にはこの事件を記してゐない。）幸若舞曲の「八島」は本曲と相近いもので、義經が奥州へ下向の途中、計らずも佐藤の館に泊つて、母の所望により、辨慶が兄弟最期の様を語つて聞かせる、と記してゐるのであるが、兩者製作の前後が確かでなく、従つて孰れが他に影響したものか分らない本曲の挿話、辨慶の軍物語は、平家物語卷十一「嗣信最後の事」（源平盛衰記では卷四十二「源平侍共の軍付繼信盛政孝養の事」）に據つたもので、平家物語には次のやうに記してゐる。

能登殿船軍は様あるものぞとて……中にも源氏の大將軍九郎義經を唯一矢に射落さんとねらはれけれども、源氏の方にも心得て、伊勢三郎義盛、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同じき四郎兵衛忠信、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などいふ一騎當千の兵ども、馬の頭を一面に立て竝べて、大將軍の矢面に馳せ塞がりければ、能登殿も力及び給はず。能登殿「そのき候へ、矢面の雜人原」とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。

中にも眞先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衛嗣信は、弓手の肩より馬手の脇へつと射抜かれて、暫しもたまらず、馬より倒にどうと落つ。能登殿の童に菊玉丸といふ大力の剛の者、萌黄緘の腹巻に三

枚兜の緒をしめ、打物の鞘を外いて嗣信が首を取らんと飛んでかゝるを、忠信側にありけるが、兄が首を取らせじと、よつびいてひやうと放つ。菊王丸が草摺の外れを、あなたへつと射ぬかれて、犬居に倒れぬ。能登殿を見給ひて、左の手には弓を持ちながら、右の手にて菊王丸を掴んで、船へからりと投げ入れ給ふ。敵に首を取られねども、痛手なれば死ににけり。云々。(謡曲大観による)

要 旨

室町時代の代表的作品たる謡曲の、文學史上有する位置と、價值とを知らしめて、その妙味を味はしめ、併せて謡曲特有の修辭法を會得せしめて、謡曲の一般を知らしめるのが本課の目的である。次に大意を簡単に述べよう。義經主従十二人は都を落ちて山伏の姿となり、陸奥へ下らうとして岩代の國佐藤の館に來かゝつた。折しも、八十才になる繼信の母が十才になつた許りの幼い孫、鶴若と共に、討死した繼信の冥福のために山伏攝待を思ひ立つて、内心では主君の一行を待つて居たのであつた。然し、一行は容易に名乗らない。老母は人々の中から兼房、鷲尾十郎、辨慶を指名し、鶴若は、是こそ君よと、義經を指したので、義經も遂に、情に引かれて其實を告げ、辨慶は君命によつて、繼信忠死の様を物語る事を作つたものである。時代は鎌倉初期、三月の事である。

段 落

第一段(一七頁初行―三行)

次第及び道行を敘す。

第二段(初行より四行目―一八頁一行目)

一行佐藤の館に來かゝり、休息するか、素通するかに就いて論じ、遂に「知らぬ様にて」休息する事になる。

第三段(一八頁二行目―一九頁三行目)

鶴若、一行を迎へて、十二人なのに注目し、義經達ではないかと尋ねる。

第四段(一九頁四行目―二〇頁一行目)

老母、出で來り、心の中では義經の一行と知り明してくれと切に望む。

第五段(二〇頁二行目―二二頁終行)

辨慶之に對して飽くまで包まんとしたが、試に、名を當てさせる事になる。その結果、聲によつて一々指名する。

第六段(二三頁初行―二四頁五行目)

一行は依然、名を明かさないので鶴若は、母の嘆きを見かねて、あきらめて内へ入らせようとする。

判官はその情にほだされて遂に名乗る事になる。

第七段（二四頁六行目―二六頁三行目）

老母の所望に任せて、義経は辨慶に繼信奮戦の様を語らしむ。

第八段（二六頁四行目―二七頁六行目）

辨慶、又、忠信の功勞を語る。老母今更乍ら二人の子の死をいたむ。

第九段（二七頁七行目―二八頁六行目）

義経、繼信が最後の息を引取る前に、國にある老いたる母と、幼い子のことが心の雲にかゝると言つて空しくなつた事を告げ、繼信の忠死に對して報ずる事もかなはぬようになつた落人の憂を述べる。

第十段（二八頁七行目―二九頁初行）

それより、夜。更けるのも知らず酒酌みかはし夜明けとなれば、一行は此の宿にいとまを告げて立ち去る。

第十一段（二九頁二行目―終）

鶴若は敵を探す爲に義経に従つて、出立せんとしたが辨慶などに巧にすかされて残される。

解 釋

【篠懸】 スツカケ。山伏の衣の一種。麻でつくり菊綴の紋をつく。深山の露を拂ふためのもの。入峰の修行者が着る赤色無紋の衣を柿の衣、出峰の化導者が着る黒色の衣を篠懸といふ。先達は黄色を用ひ勅許を得れば紫を用ひる。

【旅の衣は篠懸の】 露けき袖やしをるらん。までを次第といふ。旅に出て衣が露に濡れゆかんとする行末を思ひやつたものである。

【子に臥し寅に起き馴れて】 ネにフシトラ

にオキナれて、以下「東路さして急ぎけり」までを道行といひ、旅中の有様を敘す。子の刻は今の夜十二時、寅は曉の四時。山伏は子の刻に臥し、寅の刻に起きる法である。

【雲居の月を峯の雲】 曉より起きて空にかかれる月を見るに、峯の「み」を言ひ懸け、山伏の峰入する事をも意味する。

【雲居】 クモキ、雲の居る處の意歟。雲井などとも書く。(一)雲のある處。即ち空。(二)禁中。(三)遠き處。「雲居に見ゆる妹が家」

等。この場合は勿論第一の義。

【その松島に参らんと云々】 松島は陸前の松島を指す。其の松島を受けた意は、松島の内には月見が崎と言ふ名所があり、又千載集に、「波間より見えしけしきぞかはりぬる。雪ふりにけり松が浦島」といふ歌があつて、月雪の名所なるが故に續けたのであらう。(評釋)

【御休みあらうずるにて候】 「あらうずる」はあらんずるの轉。「ずる」はするでサ行變格。

【高札】 カウサツ。高く掲げた立札。

【佐藤の館】 サトウのタチ。繼信、忠信の家。その舊蹟は岩代國飯坂温泉の西なる大鳥

城の麓にある。又羽前國米澤市の東方、花澤と呼ぶ地にも其の館の跡と稱する地あり。(詠曲辭典)

【山伏】 ヤマブシ。(一)山に宿る事。(二)山に臥し、野に伏して修行する僧。(三)後に専ら、修験者の稱。〔言海〕こゝでは勿論第三の意味。

【攝待】 セツタイ。(一)客をあつかひもてなす事。(二)ふるまひ、ほどこし。施與。接待とも書く。

【山伏攝待】 山伏を施行する爲に饗應する事。

【やがて】 (一)そのままに、すなはち、直ちに、(二)程なく、間もなく。〔言海〕この場合

ここは一の意。

【御著き候へ】 オンツキ候へ。攝待の場所へ御著席あれとの意。

【佐藤の館が憚りにて候ふ程に】 忍びの旅行であるから、少しでも見知られた人に逢ふを憚るのである。

【御通りあれかしと】 オントホリ。素通り
の意。

【御前に候】 オンマへにサフラフ。

【幾人】 イクタリ。

【幼き人は誰が御子息】 タがゴシソク。

【御内】 ミウチ。在宅の意。わざと知らぬ振
して言ふ。

【判官殿】 ハウグワンドノ。檢非違使判官義

經。「判官」は檢非違使尉をいふ。

【御供申し】 オントモモウシ。

【八島の合戦】 ヤシマのカツセン。

【祖母】 ウバ。藤原清衡の末子、亘理十郎清綱の女で繼信兄弟の母。

【奥】 オク。陸奥。廣く奥州をいふ。

【十二人御入り候へ】 オンニリ候へ。

【暫く候】 シバラクザフラフ。

【粗忽】 ソコツ。念の入らぬこと。ゆるがせ。そよつかしいこと。

【まづく御内へ御入り候へ】 オンニリ候へ。門外では他人の洩れ聞く恐があるから云ふ。

【さればこそ御大事にて候】 オンダイジ。

ワキの獨言。「大事」は危いこと。

【恐れながら御座を替へられ云々】 御座

を替ふは、着席の順を替ふること。判官と氣付かさぬ爲の工夫。

【鶴若】 ツルワカ。繼信の子。

【かしまし〜】 祖母も辨慶と同じく他聞を恐れて子を制す。

【舊里を出でし鶴の子の云々】 キウリ。

判官殿なる事を聞きて又亡き子の事を思ひ出し。正面向きて語ふ。和漢朗詠集都良香の句に「鶴歸舊里、丁令威詞可聽」とあり。晋の丁令威といひし人。仙となり山に入りて歸らざりしが後千年を経て、白鶴となり、舊里に歸りしといふ。(評釋)。丁令威の如くこの舊里

へ歸つて来るならば嬉しいが繼信忠信は出陣したまゝ戦死して歸らぬが悲しいのである。

【松に歸らぬ】 鶴の縁で松を出し、歸るか

〜と「待つ」といふ心を松に言ひかく。

【憚りある身】 尼姿を遠慮したのである。

【かつらは】 且は。

【亡き人】 亡き夫、庄司元治。

【名をも朽たし】 名前をも傷つけ。

【子供のいにしへの恥をも顯はす】 繼信

兄弟の生前の恥を死後に曝すの意。老尼の無遠慮なるは夫の爲、子の爲恥に當るといふのである。

【現世の祈りのためにも非ず】 現在の身を安穩ならしめる爲に祈るのでもない。

【後世善所とも思はず】 ゴシヤウゼンシ

ヨ。死して後極樂へ往生しようとの目的でもなし。

【忠信】 タノブ。繼信の弟、文治元年義經

が吉野山を落ちる時、身代になつて苦戦し、空腹切つて糟谷有季の兵に圍まれ、遂に自殺す。

【身を知る雨の】 古今集在原業平の歌に「

かすかすに思ひ思はず問ひがたみ、身を知る雨は降りぞまされる」とあり。この歌は雨が降るから來にくいと言つてよこしたのに答へたもので、此の雨故にあなたが眞實に思ふか思はぬかと知られると言ふ意である。然し此處では唯、「悲しむ身」から「晴れぬ心」に続け

る爲に古歌の詞を利用したのみであつてその意まで取つたのではない。

【利生】 リシヤウ。佛經の語。利益。

【親子よりも主従は】 親子の契は一世、主

従の契は三世といひ慣はした諺による。

【郎當】 ラウダウ。家の子。家來。

【などや弔ひの云々】 トブラヒ。何故に母

に對し子に對して兄弟の悔みを仰せられぬぞの意。

【身には思ひのなかれかし云々】 このや

うに賤しい身であるから御弔の詞も下されないのであらう。一そ我々如き卑賤の者はこんな悲しみに遭ふような事をしなければよかつたのだと愚痴を言ふ。詞花集雜上に、「忍ぶる

も苦しかりけり數ならぬ身には涙のなからましかば」とある。

【名字をば御存じ候べし】 ゴゾンじ。

【客僧】 キャクソウ。

【一の老體】 イチのラウタイ。一番の年長者。義經記卷七に「北の方の御めのと十郎權頭兼房。白き直垂に褐の袴を着て、白髪まじりの髻ひき亂し……六十三になりけるまゝによき丈の山伏にぞありける。」

【判官殿の御傳】 義經記卷七によれば義經の北方の傳で「この人(北方)は久我大臣殿の姫君……その後は乳母の十郎權頭より外に頼む方ましまさず……」

【増尾十郎】 マシヲの十郎。

【羽黒山】 ハグロサン。羽前國東田川郡にあり、山伏修行の道場。義經記卷七、辨慶が義經に語る詞に「越後の國直江津は北陸道の中途にて候へばそれより此方にては羽黒山伏の熊野へ参り下向するぞと申すべき。それより彼方にては熊野山伏の羽黒に参ると申すべき。」

【この姥はもと播磨の者】 莊司の妻は清衡の孫で陸奥の者である。播磨の者といふのは何に據つたのか分らない。

【鵜越】 ヒョドリゴエ。攝津鐵拐嶽北面の腹から南へ向いて一の谷の背後に出る危険な間道。

【狩人】 カリビト。

【今まで御供と】 オントモ。

【鷲尾の十郎】 平家物語卷九に鴨越で辨慶が一老獵師に山の案内を求めた時「熊王とて生年十八歳になりける小冠者を奉る。やがて髻取りあげさせ給ひて、父をば鷲尾の莊司武久といふ間是をば鷲尾の三郎義久と名乗らせて、一の谷の先討せさせ、案内者にこそ具せられけれ」とある。盛衰記にも鷲尾三郎經春とあり、十郎と記したものは見當らない。

【御聲】 オンコエ。

【西塔山伏】 サイトフヤマブシ。比叡山三塔の一なる西塔に住む山伏。三塔とは東塔、西塔、横川の三僧房をいふ。

【遊僧】 ユウソウ。延年舞における藝僧をい

ふ。「三塔一の遊僧」とは比叡山第一の遊藝に勝れた僧。

【一人當千】 イチニントウセン。

【武士】 モノノフ。

【御心強く】 オンココロゾヨク。情がない。

【父たべなうとて】 父を給への意。

【岩木を結ばぬ】 無情の木石より成れる身ならねばの意。源平盛衰記七に「車の前後に候ひける武士ども、さすが岩木を結ばねば各袖をぞぬらしける。」白氏文集「非木石皆有情」

【梅檀は二葉よりこそ】 平家物語一卷に「梅檀は二葉より芳しとこそ見えたれ、既に十二三にならんずる者が今は禮儀を存じてこ

そ振舞ふべきに。」源平盛衰記三に「梅檀は二葉より芳しくして、四十里の伊蘭林を翻し、頻伽鳥は卵の中にてあれども、其の聲鳥にすぐれたり。」觀佛三昧海經に「牛頭梅檀生伊蘭叢中、未_レ及_二長丈、在_二地下一時、芽叢枝葉、如_二閻浮提竹筒云々仲秋滿月、卒從_レ地出、成_二梅檀、衆皆聞_二牛頭梅檀上妙之香、永無_二伊蘭臭惡之氣、_一」(諺語大辭典)

【この上は御座を直され候へ】 上の「おそれながら御座を替へられ」に應ずる。

【不覺】 卑怯未練なこと。

【御詮】 ゴジャウ。

【今はかうよ】 今は最後である。

【御矢面】 オンヤオモテ。矢の來る正面。

【御馬の前】 オウマのサキ。

【義經これにありや】 「や」は感動詞。

【矢坪】 ヤツボ。矢壺とも書く。矢にて狙ひ定むる處。又矢どころ。(因國)。

【押しつけ】 鎧の背の上部、綿がみの下逆板の上、押附けの板の畧。

【揚卷】 アゲマキ。鎧の逆板に着ける揚卷結の總。

【鎧の胸板押しつけ揚卷かけずたまらず云々】 鎧の胸より背に至るまで押し通しての意。かけずたまらずは少しも滯らずといふ程の意。

【著背長】 キセナガ。鎧の一種。著長(キセナガ)の義にて、腹卷、胴丸より草摺長きよ

りいふ。一説、著背中の義にて腹卷、腹當な

ど背の方明きたると異なるよりいふ。(貞丈)

鎧の稱。又常の鎧を大將の著るに就きて稱す

ともいふ。(軍記)

【草摺】 クサズリ。鎧より下に垂れたるもの裾にて草を摺る故にいふか。

【乗り直らん】 馬の乗具合を直さんとするとし。

【大事の手】 ダイジのテ。重傷。

【たんだ】 唯。

【なんぼう】 何程。甚だ。

【忠信は日の下に】 ヒノシタ。「日の下」は天下。

【童】 ワラハ。(一)ちごよりは年長じたれ

ど、未だ元服せざる童男、又は童女の稱。

(二)召使の童男童女。こゝは(一)の意。

【菊王丸】 キクワウマル。平家物語卷十一に

「この童と申すは、元は越前の三位通盛の卿の童なり。然るを三位討たれ給ひて後、能登殿にぞ使はれける。生年十八歳とぞきこえし。」

【目懸け】 メガケ。

【彎いて】 ヒイテ。

【わだがみ】 綿上、綿臈。鎧の胴の名稱。押しつけの板より續きて前の胸板を釣る爲に、左右の兩肩に當る所。

【祕藏にあはせし】 非常に大事に思つて居られた。

【陸の陣】 クガの陣。

【彼も主従】 教經と菊王。

【是も主従】 義經と繼信。

【よその嘆きを思ひ合せて】 平家の方にも
童を戦死させて、泣くべき父母のある事を想
像して、佐藤家のみにはあらずと、あきらめ
給へとあり。(評釋)

【御慰みも候へとよ】 オンナグサみも。

【仰までも候はず】 オホセまでもサブラは
す。

【今世後世】 コンゼゴセ。

【一人なりとも】 ヒトリなりとも。

【御笈】 オンオヒ。行脚僧又は修験者などの
旅中、佛具衣服書籍食器等を入れて背に負ひ
ゆくもの。多くは箱の製にて脚あり。因

【御座敷】 オンザシキ。

【語り給ふ様】 ヤウ。

【二世の願ひ】 現在と未來との願望。

【三世の御恩】 君臣は過去現在未來の三世を
かけた契があるから言ふ。

【故郷】 フルサト。

【八旬】 ハツシユン。八十歳。

【十に餘る童】 トヲにアマるワランベ。

【是等が事の不便さぞ】 コレラがコトのフ
ピンさぞ。不便さぞは、かはいさうなのであ
る。繼信が最後に母及び子の事を思ふ由、平
家物語等には見えない。

【心にかゝる雲の】 「かゝる」から雲を出し
月に覆ひてと轉じた。

【くれくと】 くらくとと同じ。精神の闇

くなるを言ふ。月のくらくなる事と氣を失ふ
とを兼ねていふ。

【手を碎き】 色々手段を盡し。

【命の恩】 義經に代つて死んだ恩をいふ。

【月の盃】 盃の形を月に譬へて言ふ。

【汲みて知る】 酒を汲むと心を汲むと。

【涙と共に】 酒と涙とである。

【終夜】 シウヤ。

【座敷にも直らで】 自分の席にも就かずに。

【鞆】 ウツボ。矢を入れて背負ふ道具。

【親敬】 オヤのカタキ。

【修行】 シユギヤウ。

【兜巾】 トキン。頭巾とも書く。修験者の被
る布製の頭巾。十二因縁にかたどつて十二の
襲をつけ、紐にて願に結ぶもの。

【まことさふか】 誠にて候ふかの意。

【抱き入れ】 家の内に抱きこむのである。

【行くは慰む方もあり】 旅に立ちて行く身
は、外に氣の晴れる事もあらうがの意。この
句「蟬丸」にもある。當時行はれた諺であらう
【とまるや涙なるらん】 跡にとまる人こ
そ心細く悲しい事ならんの作者の同情。

鑑賞

謡曲「攝待」は判官物の一つであるが、情愛の濃やかなものとして特色がある。即ち、繼信の母の

子を思ふ情が、この謡曲の中心をなして居り、加ふるに、武士道的精神、子の親を思ふ孝心、君の臣に對する情愛等が全面に横溢して居る事が特に注意すべき點であり、又、方言傳説として、繼信の母が山伏一行の人々の名を、その言葉によつて生國を判定したといふ事は、謡曲中稀に見る興味ある事である。「攝待」は「安宅」の後日譚と見るべきものであるが安宅における義經の性格描寫の稀薄なるに比して、攝待においては、非常に情ある武士として描かれて居る。名乗るべからざる名を、遂に情にほだされて明かしてしまふ所、「かやうに郎黨を討たせつゝ、みづから手を碎き忠勤まこと曇らずば終に治まる世に出で、繼信忠信が子孫を尋ね出して命の恩を報ぜんと思ひし事も空しく、我さへかゝる姿にてその名をだにも名乗り得ぬ、憂身の果ぞうらめしき」と、しほられる處など、實に暖い人情の發露と言はねばならぬ。

骨肉の情愛と武士道精神との交錯も鎌倉時代の思想を充分に表はして居るものとして面白い現象である。繼信兄弟の母が、「繼信は八島にて討たれ、弟忠信は都にて失せけるとばかり」で委しい事は判らず、それを詳しく知る爲に攝待をしながら秘に義經一行を待つ心、ふとした言葉の端にも「舊里を出でし鶴の子の松に歸らぬさびしさよ」と出る母親の愛、而してその一面には、繼信の勇ましい戦死を喜び、又さてそのときに弟の忠信は候はざりけるかと、きつと、問ふ處など毅然たる武士の母親

としての心得を表はして居るのである。

「攝待」における子方の役も相當効果を擧げて居る。すべて子方といふものは、人を泣かせたり、笑はせたりするものとなつて居るが、之においても、親を思ふ心情に見物をほろりとさせて居るのである。終において、親の敵を取る爲に義經の供をせんとして聞かなかつたものゝ流石に子供の事とて、辨慶達に巧に欺されて納得し内に入る處などよく少年の心理を捕へて居ると思ふ。

この攝待においては謡曲共有の錦のつぎはぎ的な詞や、六かしい修辭、懸詞など、殆ど用ひてない。しかも敘事の自然にして、情愛の濃やかなる點は實に稱讚に値するものと言はなければならぬ。

参 考

謡曲は能として舞臺上に演出せられた時始めて生きた價值があるのである。謡曲の詞章のみでは鑑賞する上において非常に物足らぬ感がある。この意味において次に「能の乗」より拔萃し、鑑賞の資に供したいと思ふ。

まづ狂言いで「是は佐藤に仕へ申す者にて候。此所に山伏攝待の高札を立て候間、山伏達の御通りあらばこなたへ申し候へ」と、口明ありてくつろぐと次第になり、判官辨慶（ワキ）兼房以下すべて十二人の山伏出で、舞臺に立ち並びて、「旅の衣は篠懸の、く、露けき袖やしをるらん」と歌ひ、直に道行ありて、「その松島に參らんと東路さして急ぎけり」の文句すむと、ワキ詞あり、「まづ此所に御休みあらうするにて候」と一のツレ兼房にいへば「承り候」といひて「や」と目附柱の方を見、「是に高札の候御覽候へ」といふ。ワキ始めて見つけたる心にて同じく其方を見、「何々佐藤の館に於て、山伏攝待と候」と讀み下し、「やがて御著き候へ」とすむ。兼房危ぶみて、「佐藤の館に於て、山伏攝待の事は、我等が望む所なれども、佐藤の館が憚にて候程に、御通りあれかしと存じ候」といひ、ワキは心にも掛けず「只知らぬやうにて御著あらうするにて候」といひ、此回答すみて、判官は脇座に床几にかゝり、兼房以下其の次々に安宅の如く下に居ると子方二の松まで出で、「いかに誰かある」と呼び、「山伏達は幾人御著あるぞ」といふ。狂言十二人なるよしを答ふれば「まづ出で、對面申し候べし」とて舞臺の方にゆくと、ワキは見つけて、「是なる稚き人は誰か御子息にて渡り候ぞ」と問ふ。子方「是は佐藤繼信の子にて候」と答ふ。ワキ「さて繼信殿は御内に御座候か」と知らず顔に問へば子方「判官殿の御供申し、八島の合戦に討たれて候。」と無邪氣に答へ「さて此攝待は如何な

る人の御企にて候ぞ」と尋ねれば、「判官殿十二人の山伏となり、奥へ御下りの由承り候程に祖母にて候もの此攝待を始めて候」と答へ、「見申せばかたぐ、こそ十二人御入り候へ。もし判官殿にては御座なく候か」と短兵急に問ひ返す。天真爛漫、幼きながらも流石は父の子なり。ワキ直に「しばらく候」と押し留め「かゝる粗忽なる事を承り候ものかな。まづ御内へ御入り候へ」と遠ざけ、此時子方は後見座にくつろぎ、ワキは舞臺にかへりて「さればこそ御大事にて候」と獨言し、判官の前に出で、「恐れながら御座を替へられ、皆この中に打まじり御座候へかしと存じ候」といへば、判官「げにこれは尤にて候」とて、三人目のツレの次へ割り込みて座し、ワキは立衆の前に下に居る。アシラヒ出してシテ出づ。位最も靜なり。二の松あたりにて「いかに鶴若」と呼ぶ。子方立ちて一の松にゆき、「何事にて候ぞ」と答ふ。シテ「山伏は幾たり御つきあるぞ」子方「十二人おんつき候」シテ「かしまし」と制し留めて、判官殿なる事は秘すべしとの意を示し、判官と聞きて又亡き子の事を思ひ出だし、正面向きて、「舊里を出で、鶴の子の、松にかへらぬさびしさよ」と打しをる。子方ゆきてシテの手を引く心にて其の左の袖を取り舞臺に入り、判官に向ふ心にて真中に座し、子方は其の右の方へ少し先に出で、座し、シテ「げにや憚りある身として……是は佐藤庄司が後家、繼信忠信が母にて候」と先づ自ら名乗りて、正面に直し、「げにや親子恩愛の別れのあまりには……」

後生善所とも思はず」と、ワキに向ひて先づ心中を明かし、更に詞をつゞけて「嫡子繼信は八島に討たれ、弟忠信は都にて失せけるとばかりにて委しき事をも知らずして、獨り悲しむ身を知る雨の、晴れぬ心や慰むと、此攝待を始めて候」と攝待の謂れを述べ、「札を立てよよりこのかた、一日に五人三人、乃至一人二人絶ゆる事はましまさねど、十二人は是が初めてにて候」と、その景況を語り、「何れが我君ぞ、何れがそにてましますぞ。夜は更けたり。人の知るべき事にもあらず。此姥が耳にそとお教へ候はゞ此攝待の利生にて」と何れに主君のましますかを尋ぬる心にて、判官の方を見まはし、「空しくなりし兄弟を、再び見ると思ふべし」と地に歌はせて正面直し、「親子よりも兄弟は、くく深き契りの中なれば、さこそ我君も、あはれと思し召すらめ」と、判官に向ひて其の情の切なるべき思ひやり、又正面して、「殊更おんために、命を捨てし郎黨の、一人は母、ひとりは子なり」と子方を見、「などや弔らひの、おん言葉をも出されぬ」と、判官へ向き恨を述ぶる心あり。「かほど數ならぬ、身には思ひのなかれかし、あら恨めしの浮世や。くく」と、ワキへ向きて正面直しながらしる。萬感胸に集りたるが如し。

ワキ之を聞いて猶知らぬ顔装ひ、「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな」とシテに向ひ、「我等如き山伏の、五人三人ゆきつれく通り候が、今夜此攝待に十二人著きたればとて、判官殿とはかゝる

粗忽なる事を承り候さりながら、繼信忠信が母にてましますば判官殿の御内の人の名字をば御存じ候べし。そなたより名をさして承り候べし」と試に言へばシテ「仰の如く我子は御内にありし者なれば、大方は推量申すとも、さのみはよも違ひ候まじ」と、答ふる傍より、兼房まづ問ふ。「かやうに物申す山伏をば、どこ山伏と御覽じて候ぞ」シテ兼房に向ひ「まづ只今物仰せられつる客僧は此御供の中にては一の老體にて御入り候な」といひて、考ふる心にて正面直し、「いで此御供の中に年よりたる人は誰ぞ」と面伏せたるが、思ひ得たる心にて「や」と面上げ、「今思ひ出したり。判官殿の御乳母、増尾の十郎權の頭。兼房山伏にてましますな」と兼房に向ひて答へ、「又こなたなる山伏はどこ山伏にて御渡り候ぞ」と此度はシテより問ふと、二番目のツレ、戯れて「これは出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候」といふを、シテ「いや是は播磨の人の聲にて候。それをいかにと申すに、此姥はもと播磨のもの、十三の年繼母を恨み都に上り」と語りかけたが、昔を思ひいで、「故庄司殿と契り、繼信忠信を設けて、かく憂目を見候へば、只うらめしう候へ。」と面伏せて懐舊の涙を胸中にたゝへ、更に又向ひて、「されば我國の人の聲なれば、などは知らで候べき」と述べ「いで此御供の中の播磨の人は誰ぞ」と又考へ、「是も思ひ出だして候」と顔上げて「判官殿ひよどり越とやらんを通り給ひし時、獵人の姿にて参りあひ、其儘名字たまはり、今までも御供と聞えし、鷹尾の十郎山伏

にて御入り候な」と名を指していふ。

次にワキより問を出して「さてかう申す山伏をば、どこ山伏と知らしめされて候ぞ」といへば、シテ此御聲こそ大事にて候へ。都の人の聲かと思へば又近江の人の聲にも似たり。物仰せられ候も何とやらん物々しく見え給ひて候」と考へたるが「天晴これは西塔山伏ごさめれ」と判定し、「それならば本は近江の人、三塔一の勇僧、今は又我君の、一人當千の武士よなう」と、しかとワキに向ひ、「ものふも物のあはれは知るものを、などされば餘りに、御心強くましますぞ、明かさせ給へ人々」と恨めしげに見廻して正面直し「よそ目も知らず泣き居たり。人目も知らず泣き居たり」と兩手にてしをる。花の帽子の端にて涙を拭ふ心なり。

子方は見かねてシテに向ひ「かく心もなき人々に、さのみ言葉を盡し給はんより、今は早御内へ御入り候へ」といへば、判官あはれとや見たりけん、「暫く候」と押し留め、「まこと繼信の御子ならば、判官殿とおぼしきを指し給ひ候へ」といふにぞ子方「承りて候とて、十二人の山伏の、皆御顔を見渡して、是こそそにておはしませ」と、判官に向ひいふ。判官「さてそにて有べきとは何故に仰せ候ぞ」と問はれ「いや如何に包ませ給ふとも人にかはれる御装、疑もなき我君よ」と歌ひ乍ら立ち、「父たべなふとて走りよれば」と判官の前へ子方つか／＼と行き下に居ると、「岩木を結ばぬ義經な

れば、中々膝に抱き取る」と、判官右の手を子方の肩に掛け、子方はうつむきて敬意を表し、「げにや梅檀は、二葉よりこそにほふなれ」と子方もとの座に歸り、「誠に繼信が子なりけりと、よその見る目まで、皆涙をぞ流しける」と、山伏皆面伏せて落涙の心を示し、シテ打ちしをりて情に堪へざるを思はしむ。

ワキ「今は何をか隠し申すべき。我君にて御座候」とシテに語りて、又判官に向ひ、「此上は御座を直され候へ」といふと判官立ちて本の脇座へゆき床几に掛かる。此判官の立つ時、皆居かはる心にて山伏一同に立つ事あるは、長の間すわりて居るが難儀なれば、シビレを少し慰むるの意に出で、近年しはじめたる形なりと聞き及べるはさもあるべし。かくの如く表面は能の體面を崩さざるのみか其の理りも叶ひたる所作にして、内情は役者の便宜を助くる方法は、随分工夫をめぐらして改良するも妨はあるまじ。おのれも一度このツレ山伏をしたりしが、安宅とは違ひて下に居る間長く、足の痛い位は辛抱すれども、シビレ甚しくて立つ事も出来ざるに至らんと其心配は一方ならざりき。されば身の實驗を以ても思ひやらるゝなり。とは言ふものの或太夫の子が此シテをしてシビレに困れりといひしに、そはまだ魂が入らぬ故なりと父に叱られし話もあれば、シビレは未熟の結果とも見るべきか。とまれかくまれ便宜にして體面を崩さぬ方法だけは、今も將來も用ひたきものぞかし。

かくて判官床几にかくれば、ワキはシテに向ひ、「老尼も近う御参りあつて御目に懸られ候へ」といひ、シテ立ちて二足ほど進み、判官に向ひ下に居て、「あら有難や候。」と合掌し、ワキの方むき、「我君を拜み参らするにつけて、子供の事こそ思ひいでられて候へ」といへば、ワキも「げに／＼尤もにて候」と同情を寄せ、シテ又、「いかに申し上げ候」と判官に向ひ「繼信が八島にての最後の有様剛なりとも申し、また不覺なりとも申す。いづれが誠にて候やらん承りたく候」といふと、判官はワキに「くはしく語つて老尼に聞かせ候へ」と命じ、ワキは「畏つて候」とてシテに向ひ、「御説と申し所望といひ、懇に語つて聞かせ申し候べし。御前近う御参り候へ」といひ、シテは御前に出でたる心にて正面直し、右に持ちたる數珠に左の手も添へて、熱心に聞き居る様を見せ、其内にワキの物語は進みて、八島の合戦に能登守教經が矢一筋まゐらせん受けて見給へと罵るを、皆々心おくれで躊躇せしに、繼信は心まさりの剛の人にて、君の御馬前に立ちふさがり、につこと笑ひて遂に射られたりしよしを語り「たんだ弱りに弱りて終に空しくなる。」と聞きて面伏せて涙を浮めたりしが「なんぼう面目もなき物語にて候。」とワキのいふ時顔少し上げ「さてその時に弟の忠信は候はざりけるか」と問ふ。ワキ「あらおろかや忠信は、日の下に於て隠れまします。能登殿の童菊王丸、繼信が首を目がけ、渚の方に走り渡るを、忠信引いて放つ矢に、菊王が真中射通されかつばとまらば、教經舟より

飛んで下り、菊王がわだ髪つかんで遙の舟に投げ入り給へば、程なく舟にて空しくなる。眼前兄の敵をば、弟の忠信こそ討つて候へ」と慰む。シテ斯くと聞きて「さては敵も大將に仕へ申し、御童」と繰り返し、ワキ「繼信は又我君の秘藏におぼせし御内の人」と惜しむ心をあらはし、シテ「彼は平家の舟の内、シテ「思ひは同じ思なれば」とさすがは武士の母、敵の心までも思ひやり、ワキ「よその歎きを思ひ合はせて、御慰みも候へとよ」と老尼の心中を深く察し、シテ「それは仰せまでもさむらはず。御身がはりに立ち参らする上は、今世後世の面目なり」と、名譽を思ひて立派に口には言ひ放ちしが、又目の前に判官主従の居ならびたるを見ては、忘れんとしても忘れず「さりながら一人なりとも御供申し、御笈をも肩にかけ、此御座敷にあるならば」と歌ひかけて地に渡し「十二人の山伏の、十三人も連なりて」と一同を見まはし「只今見ると思はゞ」と判官に向ひ、「いかゞは嬉しかるべき」と又落涙の心にて面曇らす。

打切にて正面へ直しクセとなる。「その時義經、老母に語り給ふやう」と物語る心にて判官はシテに向ひ、シテは正面のまゝにて謹聽し居る心なり。「八島にて繼信、今はかうよと見えし時、思ふ事あらば委しく言ひおけと、くれぐ／＼尋ね問ひしに、繼信その時に、息の下より申すやう、弓矢とる身の御身代りに立つ事、二世の願や三世の、御恩を少し報謝する命の輕きは露塵何か惜しからん。さり

ながら、古里に、八旬に及ぶ母と」と聞きて我身をかくも思ひたるかと涙こぼるゝ心にて面伏せ「十に餘る童部」と聞く時、右の方に子方を見やり、「これらが事の不便さぞ。少し心にかゝる雲の月におほひて、光も闇くなる如く、そのまゝくれぐれと遂に空しくなりにけり」と、判官に向ひ又面伏せて「かやうに郎等を討たせつゝの上端を歌ひつゝ判官正面直すと、シテも直し、「みづから手を碎き、忠勤まこと曇らずば、遂に治まる世に出で、繼信忠信が子孫を尋ね出して、命の恩を報ぜん」と、思ひし事も空しく、我さへかゝる姿にて、其名をだにも名乗り得ぬ」と判官又シテに向ひ、シテも又同じく判官に向ひて、「うき身の果ぞ悲しき」と判官のしをるを見て、シテも堪へかね面伏せながら正面直す。打切ありてロンギとなり、「母は思ひに堪へかねて、更くるも知らず有明の、月の盃とりいだし。御酌にこそ参りけれ」と、シテ歌ひながら扇ひらきて酌する心にて「二三足判官の方へ出づると、判官、「げにや心を汲みて知る、人の情の盃を、涙と共に受けて持つ」と盃を受くる心にてシテへ向く。「鶴若酌に立ちかはり、別れし父の御前にて給仕すると思ひなして」と、子方扇ひらき立ちて「二人の山伏の、終夜の酌を取りまはり、座敷にも直らで、勇み進める有様を父に見せばやとぞ思ふ」と、判官を始めワキにもツレにも酌をして本の座に歸る。誰か其母の心を思ひて泣かさらん。誰か此の孝子の君たる判官の情を察せざらん。能の内にも子方あるものは人を泣かしめ易きこそ理りなれ。

「さるほどに夜もほのく」と明けゆけば、暇申してさらばとて、早此の宿を立ち出づる」と判官以下一同に立つと、子方も立ちて橋掛の方を見、「如何に誰かある馬に鞍置き、弓鞆まゐらせよ。君の御供申さうするに」と下僕に命ずる心にていふとシテ「そも御供とは何事ぞ」と立ちて留むれば一君の御供申してこそ、親の敵にも逢ふべけれ」と答へ「それは弓矢の御供なり。是は修行の山伏道に、何の敵のあるべきぞ」と諭せば、「さあらば思ひ出だしたり。小さき兜巾襜懸を、とくこしらへてたび給へ。山伏道の御供せん」と、いはれてシテは打ち泣き、ワキ又その心を察しつゝ「いかに申さん鶴若殿。まこと御供ありたくば、今日は道具をこしらへ給へ。明日は迎に参るべし」といひ、子方「まことさふか」と問ひ返し、ワキ「なか／＼に」と確答し、ツレも「我も迎に参るべし」と一同子方に向ひ、ワキ「我も迎に参らんと」と繰返して地となり、「面々聲々にすかされて、稚き身の悲しさは、誠ぞと心得て、少し言葉のよわりたる」とシテも子方も下に居ると、「折を得て客僧は泣く／＼宿を出でければ」と、判官以下ツレもワキも立ちて橋掛に行き幕に入るを、「老尼は鶴若を抱き入れ」と、二人立ちてシテは子方の肩に手を掛け、子方の随ひゆかんとするを抱き留むる心にて橋掛を見送り、「ゆくは慰む方もあり。とまるや涙なるらん」と、脇正面に直し、シヲリ留にして、諺切れたる後にシテ先づ入り子方引つゞきて入る。(能の栞より)

備考

【謠曲について】

謠曲は、猿樂の能に用いた歌詞である。抑々猿樂の起源は、古く神事に用ひられた一種の伎樂たる唐土傳來の散樂、即ち俗樂に出て、平安朝に入り所謂亂舞時代を形成し、日本的散樂が發達したが、更に鎌倉時代を経て室町時代になつてから、田樂・呪師・白拍子舞・平曲・延年舞・宴曲・幸若舞・小歌など諸種の舞樂歌曲を折衷綜合し、之に支那の傳奇雜劇即ち元曲の趣味を加へて大成したのである。而して、此の新生面を拓いたものは親阿彌清次・世阿彌元清父子であつて、相繼いでこの伎を以て足利義滿の寵を蒙り、終に能樂は武家の式樂と定められ、爾來晉に神事のみならず種々の儀式大禮に缺くべからざるものとなつた。さて謠曲の現存するもの約五百番、流に由つて多少曲數・題名・詞句・曲節・所作を異にして居るが、各曲の作者として世に傳ふる所は必ずしも信じる事は出来ない、作曲者を詞句の作者と混じたものもあるが少くとも百番は世阿彌の創作であると認めなければならぬやうに、明らかに桃山及び江戸時代の作にかゝるものも亦少くはない。

さてその内容を檢するに、大抵材を、史實傳説に取り之に潤飾を加へたもので、曲の主眼又は目的によつて分類すれば、單に舞を主とするもの石橋神社の緣起、白鬘祝賀、老松佛法の靈驗、芭蕉技術の奇蹟、定家恩愛、八島武勇、仲光忠孝、を主とするものなどがあつて、神事曲・祝言曲・精靈

曲・人事曲に分つ事が出来るが、趣向は概して千篇一律であつて、僧侶が諸國行脚の道すがら名所古蹟に到り懷舊の念に堪へない處へ、緣故の深い主人公が老翁・里女等となつて現はれ、その故事來歴を語つて一度消え失せ、更に眞の主人公の姿となつて顯はれて、昔のまゝの所作をし、終に法力によつて解脱成佛するといふのが最も普通の形式である。而してその脚色の根本となるものは佛教思想であつて、殆ど全謠曲を通じて佛法の功德に因る來世の冥福、現世の幸運を説かないものはなく、恰も佛教を鼓吹宣傳する手段として作られた觀がある。更に文章について見るならば、平家の如き語物と今様朗詠宴曲の如き語物とを折衷し、且、元曲を模したのであるから、一篇中に語るべき部分、即ち詞と、謠ふべき部分とがあつて、後者は多く七五調を以て成り、佛典漢籍國書に見えた詩歌・語句を點綴し掛詞を運用して巧に之を調和し、流暢宛轉の妙を極め、甚しきは濫用に流れ奇矯に傾くものが少くない。従つて創作としての價値は疑ふべき餘地がないではないが、それは尙古街學を特色とした時勢の然らしめた所であつて、宴曲連歌等も皆これと趣を同じくしたものであるから、尙特殊の文學的產物として、當代の偉觀となすべく、且その舞技たる能と相俟つて本邦樂劇の基礎を形成した點は最も重大視する必要がある。(板倉篤太郎、島田退藏共著、國文學史概説)

【謠曲と音樂】 之は非常に簡單な組織で、先づ聲では音色に剛吟と柔吟との二種、音階には甲・上・

中・下・呂の五段を主として是等の錯列によつて一曲がなされる。樂器には笛を中心として、これに小鼓・太鼓及び大鼓をあしらひ、拍子の適否を以て生命としてゐる。素謡とは何等の樂器を用ひないで音聲にて發するものと言ひ、囃子とは音聲の謡に樂器の伴奏あるもの。能となると、謡に囃子に、役者の裝束して立ち、舞、所作を演ずるに適した總べての條件を具備したものをいふ。

【作法と用語】 謡曲の作者が脚色を整頓せんが爲には、凡そ五段の順序を立て、これを根本として他は臨機に伸縮を計つたもののやうである。世阿彌が能作書に、

序……1、ワキの出よりサシ聲、次第、一歌まで。

一曲附

2、シテの出より一聲一歌まで。

3、シテ・ワキの問答より同音一謡まで。

4、曲舞又は歌にて一音曲まで。

急……5、舞或は働、或は早曲・切拍子。

次に謡曲に於ける特殊なる語を説明する。

シテ。仕手の義であつて、能一番の主人公。

ワキ。脇の意で、シテに對する脇役である。シテを主とすれば客に當る。

ツレ 連れの義で、シテヅレ、ワキヅレと二者ある。それぞれ、シテ・ワキに附屬してこれを助ける役である。

立衆タチシユウ シテヅレ、ワキヅレ、何れにでも、多人數つれ立つて出る役を云ふ。但し、多く單にツレの内に入れる。

子供コカガ 子供のする役、但し實際は大人が演ずる。

狂言。アヒとも言ふ。狂言師のする役で多少滑稽を帯びて居る。

地。舞台に立つて藝をする役者の外に、地謡の歌ふ他の文句である。舞台に向つて右側に並んでこれを謡ふ役が必ずある。そしてワキ・シテ・地以外は、曲によつて缺くものもある。能に中入のあるものは、それより前に出るのを前ジテ前ヅレ・前ワキ・といひ、後に出るのを後ジテ・後ヅレ・後ワキと稱する。

次第。事の次第を先づ歌ふ意でワキ、又はシテの出や舞曲にかゝる始めに用ひる。七五の句を一度返して、更に七五の句を歌ふ文語である。

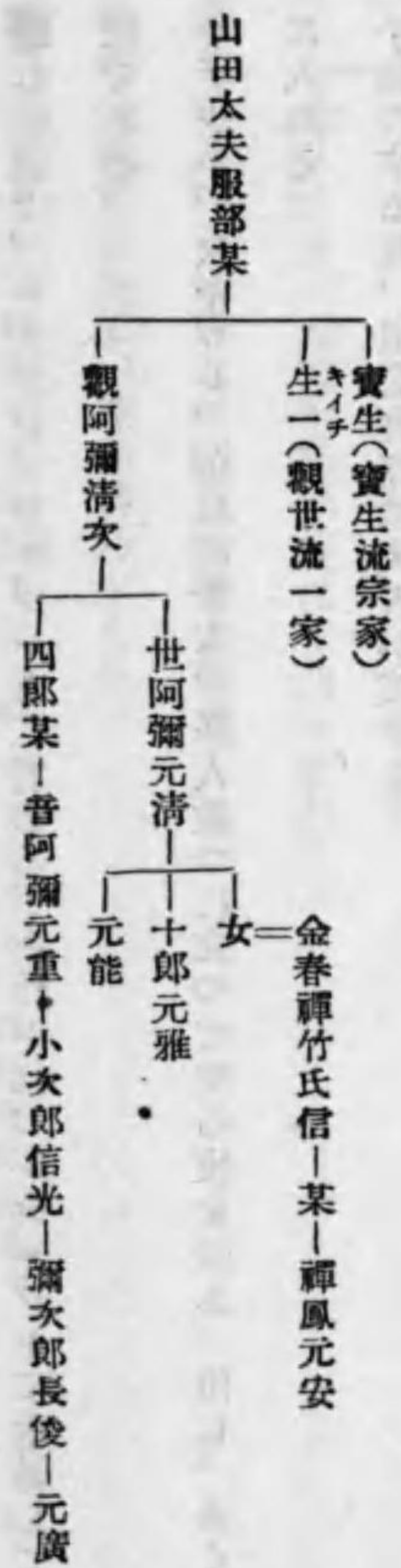
道行ミチユキ 旅の道すがら歌ふ心の文句。シテの歌ふのも、ワキの歌ふのも、ツレの歌ふのもある。本課の最初の三行の如きがそれである。

一聲。シテ、又はワキの歌ひ出しなどに多く用ひられる。
サシ。歌ふといふより、節をつけ綾を加へて朗讀する程のところに用ふる語。クセの前には多くこれがある。

歌。うたふ處の文句である。下歌とは下音にうたふ語。上歌とあるのは上音でうたふ語。
クリ。「くる」といふ節を用ひ、上音に歌ふ文句である。多くクセの前にある。そしてクリ・サシ・クセと續けて用ひる。

クセ。曲舞から來たもので、能としても謡としても主なる部分である。クセの中に上とあるのは、シテが上音で歌ふところで、これをアゲの文句の外は、すべて地がうたふ。
ロンギ。地の謡とかけ合ひでうたふ文句である。佛經の論義から出た稱。

『音阿と禪竹』



參考書

- 佐成謙太郎「謡曲大観」(明治書院)
- 五十嵐力「新國文學史」(早稻田大學出版部)
- 鈴木暢幸「國文學史」(降文館)
- 和田萬吉「謡曲物語」(富山房)
- 芳賀矢一「國文學史十講」(富山房)
- 大和田建樹「謡曲評釋」(博文館)
- 同「能の栞」(博文館)

蜂谷時順著「謡曲辭典」

觀世元滋「觀世流謡曲大成」(檜大瓜堂)

日本名著全集 江戸文藝之部 第廿九卷「謡曲三百五十番集」

挿繪

【謠本接待】(一八頁) 現行觀世流の版本よりとつた。

【繼信最後の圖】 下村觀山筆(二五頁) 原富太郎氏藏。明治三十年秋の日本繪畫協會出品畫である。

能登守の強弓に當らせまいと大將義經の矢面に馳塞がつて其身を犠牲にした奥州の佐藤嗣信を描いたものである。竪六尺七寸、横一丈二尺、實に今日展覽會畫の名を以てよばれる老大な製作の魁をなすもので、樗牛が有名な歴史畫題論を書いたのも此繪や大觀の「屈原」などに刺戟せられてのことであつた。とにかく、古繪卷の精神に新解釋を下して、これだけの劇詩的の光景を活躍せしめた觀山の畫才は偉いものであつた。(世界美術全集三十一卷の解説による)觀山名は晴三郎、明治六年和歌山に生る。幼にして上京し橋本雅邦に就く。横山大觀とその進退を共にし、日本美術院同人として活躍せり。昭和五年五月歿す。

【忠信參館圖】 水野年方筆。(二七頁) 御物宮内省藏。明治三十一年日本畫會の展覽會に出品したものの「佐藤忠信參館圖。」源義經は頼朝に追ひ苦しめられ、吉野山に匿かれた時山僧横川覺範等が之を攻めた。義經は窘迫して自殺しやうとした。忠信は諫めて止めていふ「壇の浦の後に家兄嗣信、公に代つて死しました。今日は臣が公の名を稱へて戦死させよう。公はどうぞ其隙に御立ち退き下され」と義經許さず、忠信苦請した。そこで義經は甲冑を解いて與へた。此圖は忠信が義經を落してから、甲冑を着けやうとして先づ拜するところであらう。年方は通稱衆次郎、慶應二年江戸神田に生れた。十四歳の時月岡芳年の門に入つて浮世繪を學び、後柴田芳洲に南畫を學び、又三島蕉窓・渡邊省亭に就

いて、草木風景の畫法を研究した。明治二十年頃から師芳年の後を承けてやまと新聞の挿繪を擔當してその名が高くなり、尾形月耕と並んで新聞畫の雙壁と稱へられた。日本美術協會、日本美術院、日本畫會等の評議院又は審査員となつた。四十一年歿す。年四十三。(世界美術全集二十一卷の解説による)

私共は能樂堂へ入つて靜寂を劈く笛の音を聞く、掛聲そのものも音樂の一音符たるを失はない太鼓小鼓の聲を聞く、強弱緩急、氣合心持が整つて一絲亂れぬ地誦を聞く、泣くが如く笑ふが如き面を着たシテの舞納めの足拍子を聞く……この舞臺を打つトソ、千金の重みあるトンの足拍子であらう。さうして私共は理論と現實に對するすべての義務的關係を忘れる。其時に私共は、私共人間を支配し混亂させる雑多な規約から離れ、眼前に美の世界が擴がつて永劫に結付き、直にその一部分であるといふ認識に目覺める。能樂の藝術は、私共の人生を整理し、詩化し、理想化する。それに依つて一層麗はしい一層明るい宇宙聖約の道を知ることが出来る。

野口米次郎著「能樂の鑑賞」より。

五宗論

出所

「狂言記」全五卷、作者未詳。室町時代に行はれたる狂言五十種を集めたる書にして、現存の書は徳川時代の初に増減改竄したるものなりといふ。この外、續狂言記・狂言拾遺・狂言記集外篇各五卷ありてこれにつき、合せて二百種を収む。〔目録〕有明堂文庫には二冊に、日本文學大系には第廿二卷に全部收めてある。

要旨

狂言は雜樂の一種で、「能狂言」「間狂言」ともいふ。滑稽諧謔の事を演ずる戲藝。元來、狂言綺語、又は興言利口ともつゞけて、所謂「サルガウ」言を意味するが、後には「サルガウ」態ツマの意に用ゐるやうになつた。これを業とする人が狂言師、この脚本を狂言文といふ。その初めは詳かでないが、中古の猿樂の遺流であらうといはれる。能が盛んになるにつれて、能樂を正劇としてその間に附屬劇と

して演ずるに過ぎなかつたが、後には狂言自身も亦謡曲の體にまねて、一篇に獨立した趣向を立てるに至つた。歌舞音樂略史を見ると「狂言師の起り詳ならず。猿樂の家に傳へいふ所は、翁わたしの三番叟は、狂がる態をする事ゆゑ、是を『ヲカシ』と稱へて、必ず狂言師の新作なるが、次では能の内に、時ありて答の詞なし。又、中入の時の間の延し所を繕ふ。是ばかりにては見立なしとて、今の狂言を仕初めしが、物數少きにより、玄惠法印更に百六十番の狂言を作りたりといへり（猿樂記）此玄惠が作といへるは、實なりや否知られずといへども、今傳ふる狂言に據ておもへば、全く足利の世の風俗を模せるものにして、今の世にては當時のさまを知るに便よき事多かり。大藏彌左衛門虎明が昔物語（慶安四年の記）に予が家は狂言の根元なり云々。鶯はもと名字長命なり。鶯といへるは、仁右衛門親、攝津國磯島といふ所に住し、生れつき首長くして水邊に住むほどに、異名をつけしなりきと見ゆ。狂言師にては此二家を最古しと見ゆ」とある。

思ふに、今日傳はつてゐる狂言は一時に一人の手で集大成したのではなくて、長い間に次第に世に出たものであらう。猶狂言は大體に於いて、世間は常の可笑味のある事件を脚色したものが普通であつて、同時代の産物たる謡曲の嚴肅にして貴族的なのに對し、これは滑稽にして平民的なものである。さうしてその後代に大きな影響を與へた點と、踏襲を事として千篇一律に陥つてゐる點とも亦謡

曲と似通つてゐる。狂言には、大藏流、鷺流、和泉流の三流あるが、最も勢力あるは和泉流である。又、演出の上から、脚狂言、二番目狂言、三番目狂言の三つに分類されてある。脇狂言は祝賀の意のあるもの、二番目は大名物、三番目は雑である。扱て本課は、前課と對比して、彼れの嚴肅なるに此れの滑稽なる、彼れの貴族的なるに此れの平民的なる、その間の味を會得させたい。且つ、狂言獨特の用語について考察させたい。

段落

- 一、初めから……一貫日でも待合せ都までは同道申す。(三二頁二行目まで)。
- 法華坊主と浄土坊主との出會。道づれの相談出來あがる。
- 二、浄「はれさてよい御坊に出逢うた事かな……はれさて物怪な事をした。(三四頁八行目まで)。
- 道々勝手な宗派自慢の争ひをする。法華坊主逃げる。
- 三、法「はあ嬉しや、逃延びて御座る。……(終りまで)。
- 法華坊主と浄土坊主と同じ宿に泊りあはせ再び法問をはじめ、遂にはお互の宗旨に隔てのない事を發見して妥協して「めでたし」となる。

解釋

【次第】 シダイ。謡曲の節の名。事の次第を冒頭に前置するやうに諷ふもので、大抵七五七五の二十四字より成る。こゝは例外である。

【妙法蓮華經】 メウホフレンジキヤウ。梵語。Saddharmapundarika 略して法華經といふ。後秦鳩摩羅什の譯で八卷ある。佛の王舎城耆闍崛山に於ける八箇年の説法を結集したもの。所説の教法の微妙不可思議にして諸經に王たること、恰も蓮華の諸花に勝るに譬へ、法譬合取して名づけたもの。「佛教大辭彙」

【仰山】 キヤウセン。と讀ます。仰山の洒落。(一)甚だ大いなるさまにいふ語。(二)甚だまささまにいふ語。(三)些細なる事をも大

ぎやうにもするさまにいふ語。(四)勢よきさまにいふ語。【廟】。ここでは三三の意で、「仰々しい」「大袈裟な」などいふに同じ。經と仰との字音が似てゐるので語呂を合はせたのである。

【都本國寺】 都は京都を指す。本國寺正しくは本圀寺と書く。日蓮宗四大本山の一。京都下京區松原通堀川の西南柿本町に在る。大光山と號し、日蓮上人を以て開山とする。

【身延】 ミノブ。久遠寺といふ。日蓮納骨の廟寺、日蓮宗四大本山の一。

【下向道】 ゲカウダウ。歸り途。

【御座る】 (御座有るの畧)(一)おはす。(二)いらつしやる。來られる。(名古屋地方では

方言として今猶用ゐられてゐる。(三)有りの敬語、又は卑稱。(四)くさる。わるくなる。

(五)戀しく思ふやうになる。(六)おいぼれる。老耄する。本課には(一)(二)の意に當る用法が多く用ゐてある。

【やれさて】「やれ」「さて」共に感動詞。さてさてといふに同じ。

【殊勝】(一)「佛語」殊に勝れたること。最勝。(二)神妙。けなげ。奇特。因國、こゝは(一)の意。

【程】 道程。みちのり。

【六つの字】 南無阿彌陀佛を六字の名號と稱へるから、六つの字といふ。佛號は正しく阿彌陀佛の四字で、南無(Namō)は梵語で歸命

と譯し、阿彌陀即ち無量壽覺に歸依するを南無阿彌陀佛といふ。六つはむづかしくのむづと語呂をあはせたのである。

【むづかしく人や】 六の字にかゝる洒落。

【黒谷】 クロダニ。京都東山の麓黒谷にある。淨土宗の本山紫雲山金戒光明寺を指していふ。

【しし】 感動詞。(一)警蹕の聲。(二)喧騒などを鎮め止むる聲。因國。こゝでは、我が方へ注意を向けさせるため、「呼び掛け」のやうに用ゐたものである。

【申し】 感動詞。人を呼びかける意に用ゐる。

【こなた】 自分。(一)最も身に近き方位を示

すに用ゐる語。こち。こちら。(そなた又か

なたの對)(二)われ。おのれ。(三)そなた。あなた。おてまへ。因國。三二頁二行目は(二)(三)一頁一三行目は(三)の意。

【なか〜】 (一)なから。なかば。なかほど。半途。中途。(二)なまなか。なまじひ。(三)却つて。結局。(四)隨分。相應に。すこぶる。よほど。可なり。ことのほか。(五)容易に。たやすくは。どうして。とても (六)謡曲・狂言などの語。いかにも。さなり。いふまでもなく。勿論。因國。

【どれ】 いづれの約轉。不定の物事に用ゐる代名詞。いづら。いづこ。因國。

【上方】 カミガタ。都の方。

【爾率】 ソツジ。粗忽。輕率。

【合うたり叶うたり】 願つたり叶つたり。

【せんで御座る程に】 「せん」は先、あなたが先きだからの意。

【一貫日】 一貫は百目の十倍。即ち千日といふ意を一貫日というたのである。

【おぢやる】 「お出である」の約轉。前掲「御座る」の(一)(二)と同義に用ゐるが、こゝは(二)を意味する。

【きやつ】 「彼奴」の轉。あいつ。因國。

【家例】 カレイ。(一)其家に特殊の例慣。(二)例。きまり。因國。

【情強】 ジャウゴハ。固まり法華で強情我慢の意。

【のう】 感動詞。のの延。なう。

【御坊】 ゴバウ。御房とも書く。僧の敬稱。

【京邊土】 キヤウヘンド。邊土はかたゐな
か。京都の片田舎を京邊土というたのであ
る。

【心にくう】 心憎く。「心憎し」は(一)覺束な
く思はれる。心置きせられる。(二)奥ゆかし
く思はれる。(三)心に憎らしく思はれる。

【辭林】。こゝでは(二)の意。

【ちとましし】 「疎ましい」の轉。いとほし
い。厭な、とんでもない。

【参らいで叶ひそもない】 参詣せずには居
られさうもない。

【黒豆を數ふ】 淨土宗で數珠を繰るのを罵倒

する語。

【なりともなう】 「成りたくもなく」の音便
轉。

【一部八卷の廿八品】 法華經のこと。法華
經一部は八卷より成り、更にこれが廿八の品
に分けられてあるので、斯くいうたのであ
る。猶前掲「妙法蓮華經」を参照せられたい。

【在所】 ザイショ。(一)すみか。ありか。
(二)さいがう(在郷)。ゐなな。(三)くにも
と。故郷。「辭林」。こゝは(二)の意。

【先へいた】 「先へ行つた」の轉訛。

【人に走らしやつた】 人に走らせさせた。

【こゝな】 こゝにある。こゝに居る。こゝな
る。〔因國〕。

【編みつれた身】 もつれて一緒に歩く義。

「編み連る」は編みたるが如く一つになる。

〔言葉〕

【戴きたか】 戴きたければ。

【物怪な事】 モツケなコト。思ひ設けぬ事、

意外な幸福を意味する。

【ものも】 ものまうに同じ。「物申す」の略。

他人の家を訪うて案内を請ふ聲。

【相宿】 アヒヤド。(一)一室に合宿するこ
と。(二)二つ宿に一緒に泊ること。こゝは
(二)の意。あひやどり。

【晩じて】 パンじて。日が暮れる意、晩を動
詞に用ひた。

【言葉論】 コトバロン。議論。

【構うてのやうわいの】 何とかしたやうで
すなの義。

【ついてまふは】 附いて来るはの義。「まふ」
は、こゝではうろつく意であらう。

【法問ばし】 法問でもの意。「ばし」は福岡の
方言に現に用ゐられてゐる。法問とは、佛法
上の問答。

【心やれ】 心得やれ。心得よ。承知せよ。

【五すゐ展轉】 法華經隨喜功德品。「如來の
滅後に、若し比丘等ありて、此經を聞いて隨
喜し已り、法會より出で、餘處に至り、若く
は父母、若くは善友の爲に、力に隨つて演説

せん、是の諸の人等聞き已つて隨喜し、復た
行いて餘人に轉教し、聞き已つて復た隨喜し
て轉教す。是の如く展轉して第五十に至る。
云々」とある、五十展轉隨喜功德の語を訛つ
て云つたのである。

【三國】 サンゴク。日本・天竺・唐土を指す。

【はばかり】 ひろがりあまる。はだかりであ
まる。〔蘭語〕。

【いかい事】 大きな事。大層なこと。仰山な
こと。

【芋の子を云々】 隨喜を芋のすゐきと洒落
てかくいふのである。

【せいじん】 成人、芋の大きくなつたこと。

【芥子】 カラシ。

【檀方】 ダンバウ。檀家。寺院に附屬せる檀
那の家。だんげ。檀は梵語 Dana の音をうつ
したもの。檀那。陀那。譯して布施。施與と
する。

【たつた】 唯といふに同じ。

【宗論】 シユウロン。術語上からいふと、宗
釋二論の一で、一經に就いて宗旨を總括し、
法義を建立するを宗論といひ、一一に文義を
解するを釋論といふ。〔蘭語〕。然しここではさ
ういふ意味でなく唯宗旨上の論争を指してい
ふ。

【聞きはつた】 一端を聞いた。きゝかじ
つた。

【齋】 トキ。又時に作る。佛家の食事。齋食

時食なり。齋とは不_レ過_レ中食_一とし正午以前

に作す食事を云ふ。戒律の上には食に就て時
非時を分ち、正午以前を正時とし、以後を非
時とす。時には食すべく、非時には食すべか
らず。依つて時中の食を齋食となし、「とき」
と訓ず。食すべきの時の食なれば「とき」と
いふなり。〔蘭語〕。

【はべん】 半平。又は半ぺん。

【無財餓鬼】 ムサイガキ。有財餓鬼を洒落て
無さい(菜)餓鬼ともちつたものである。

【論議】 佛法上の事柄を論辯すること。こゝ
の諺は、後世の無學者論に負けずと同じ。

【念佛修】 ネンプツシユ。念佛を修するこ
と。念佛を唱へること。

【くわくく】 木魚の音。

【看經】 カンキン。經を讀むこと。

【一遍上人】 イツペンシャウニン。上人は遊
行僧_ニなり。幼名松濤丸又智真隨緣遊行等
の名あり。姓越智氏。名は通秀別府氏を稱
す。父は伊豫國主河野七郎通廣の二男。母は
北條氏。延應元年二月十五日生る。一遍七歳
にして伊豫國天台宗得智山繼教寺に登り永憲
に隨つて學ぶ。建長五年三月廿五日薙髮し、
名を隨緣と改め遂に天台の奥旨を究む。其後
西山派弘誓寺聖達に見え、念佛宗の極談選擇
集を傳へられ直ちに聖道を捨て、淨土に歸
す。此時智真と改む。建治元年十二月八日記
州牟婁郡熊野社に百日參籠し誓つて曰く我一

切衆生を度せむと欲し、融通念佛を勸進す。この教化佛意に違はず神慮に背かずば、願はくは示現を垂れたまへ。然らずんば永く社壇を降らすと。遂に念佛勸進の算を授けらる神勅偈頌に依り智眞を改め一遍と號す。更に神勅に任せ、本願念佛の金札を荷ひ、諸國を遊行し、貴賤道俗を勸化す。又遊行とは代々の知識の轍を慕ひ、勅札を荷ひて遊行するに因り、世人自ら通稱とすといふ。正應二年八月二十三日攝津八部郡兵庫津の西山眞光寺に寂す。年五十一。〔人名〕

【踊念佛】 一遍上人の融通念佛を指す。鉦を

鑑賞

綜合日本文學全史の著者三浦氏は狂言の文學史的價值を評して次の様に云つてゐる――

狂言は樂天的なる我國民性の反映としての在來文學作品中、最も、偉大なる産物なり。元來、我國民は快活無邪氣にして、甚しく笑顔よしなりしなり。今日に在りても外人の多くは日本人の快活をいふ。嘗て一英人あり横濱の埠頭につけば關係商人の某は笑うて之を迎へ、車夫に車を命ずれば、車夫笑うて之をさるホテルに導く、ホテルの番頭も亦笑うて之が案内を女中に命ずれば、女中亦笑うて一室に導き、主人、笑うて挨拶に出で、三助笑うて湯に請す。日本人程好く笑ふ國民は珍らしと云ひし由。こは蓋、神代ながらの國民性の發現なり。此笑顔よしの國民が佛教に泣く事を教へられ、儒教に眞面目を強ひられて、天性の笑ひを押へしもの、是、奈良の朝にして、平安朝の末頃より、漸次又其本性を發揮し、始め俳諧歌に笑ひ、次に、連歌に笑ひ、終に狂言に笑ふに至る。俳諧歌は國民の忍び笑ひなり。連歌は國民のクス／＼笑ひなり。そのセラ／＼笑ひ、高笑ひとなりしもの即ち狂言なり。唯、それ、當代生民塗炭の苦を嘗めて、天心の無邪氣を缺き、故意にサルヂニアの毒草をなめて笑ふが如き、發作的、神經質的なるを遺憾とす。更に、又、其用語が悉く當時の口語にて、たのうだ人といひ、ござると云ひ、やるまいぞ、おりやるまい、なか／＼など云へるは、言語學史上、時代文典、編輯上無二の資料といふべく、平民文學、喜劇文學、諷刺文學の濫觴として、其價值侮るべからざるものあり云々。

叩き乍ら遊行するに因つていふ。
【なもだ】 南無阿彌陀の訛。なんまいだ。
【取違へてのけた】 兩方で念佛と題目とをとり違へて唱へた意。

【昔在靈山云々】 支那陳の南岳慧思大師の偈文。昔、佛が靈鷲山 ワラウジュ に在つて説いた法を法華と名づけ、今、西方に在つて一切衆生を濟度するを阿彌陀と名づける。現在の娑婆に示現しては觀世音と名づける。過去現在未來の三世に亘り、その利益(リヤク)は三尊同一體である。即ち法華と彌陀とは同一で何等かはる所がないとの意。

狂言に取り入れられた滑稽には様々ある。中に僧侶を題材としたものでは、慾深く、布施にばかり執着する、經文も讀めず、説法も出来ない、飲酒邪淫の戒を破るといつたやうな生臭坊主を扱つて滑稽化したものが多い。本課は即ち物識らずの法華と浄土との二人の似而非坊主が勝手な出まかせの宗論を試み、何れも負けず劣らずの論戦に輸贏決せず、その果ては念佛唱題を取りちがへて唱へ出し、取りちがへてのけたと双方氣附いて南無の語に妥協點を見出し、二人の名を妙阿彌陀佛とつけてめでたし／＼に終る。その間の有り得べからざるやうな馬鹿々々しい滑稽こそこの狂言の生命である。綜合日本文學全史の著者の所謂高笑ひである。

尙形式的に之を見る時は、この時代の口語が一種の趣きを傳へると共に言語學、文法學に重要な材料を與へてゐる。左に一二の例を挙げよう。

都本國寺の坊主で御座る。

聞き及うだよりは……。

なか／＼。

道連にならしやるまいか。

一貫日でも待合せ同道致さうず。

きやつは家例の情強でおぢやる。

そなたと編み連れた身かいの。

忝くも日蓮上人より傳はりの數珠ぢや程にちつと戴きやれ。

戴きたかそち戴け。

一夜の宿を貸さつしやれい。

たつた説かせませ。

まつと言はしまさいで。

挿 繪

【狂言記原本寫眞】 (三一頁)「繪入狂言記」(元祿十二歲己卯霜月刊行)よりとる。

六 能樂の面

作者

【小宮豊隆】 コミヤ、トヨタカ。明治十七年生。福岡縣京都郡犀川村の人。東京帝國大學文學部獨逸文學科卒業。東北帝國大學教授。小説「烙印」、其他「傳統藝術の研究」「批評集」等がある。

出所

【傳統藝術】 一卷。春陽堂發行。

要旨

能樂の中で、最も樞要な能面の特徴、即ち能面獨特の表情に就いて論述した文である。前課と相俟つてわが傳統藝術の眞價を味はしめたい。更に本課は能樂に限らず、立體的作品を鑑賞する上に大きなヒントを與へて呉れると信ずる。故に教授者はその内容に留意して、本課を有効に活用せられたる。

段落

- 一、初行から……遽に肯定することが出来ない。(三九頁終の行まで)
能面には表情がない、それが色々な角度で光線をうける事によつて色々な表情が生ずるといふ人の説に對し、能面に表情がないといふ事に首肯し兼ねる意を述べてゐる。
- 二、表情といふ事を……屹度意義のある事に相違ない。(四一頁七行目まで)
前節の能面無表情説に首肯出来ない理由を明かにしてゐる。即ち能面の有する表情は部分的のそれではなく寧ろそれ等をさし措いて、一切の人が共通に持つてゐる普遍妥當的な、云はゞ根本的な特徴を残してゐるのが能面本來の表情であるとし、更に人が厚化粧をするとやゝもすると普遍的な特徴が蔽はれさうな結果になるが能面の長所は二つのものを宜しく取捨してある。そして能面の特徴と能樂の特徴とが微妙に關係し合つて能なる藝術を生かして行くのだ。
- 三、併し……その不可思議な働の源を討ね上げさへすれば、それでよいのである。(四二頁七行目まで)
能面の驚くべき機能を能樂師若しくは能樂の型の創造者、若しくは面師が十分に意識し、藝術的に細緻に翫賞して能面の角度と光線との關係を研究して見た結果今あるやうな型を作り上げたかどうかは定め難いが、それはとにかく能面を見た印象をたどつて不可思議な働きの源を原ねればよい。

四、角度といふ事を考へるとき……その能全體の感じに大きな影響を及さないでは措かない。(四三頁終の行まで)

彫刻に於いては吾々はその周囲の何れの方向からも眺める事が出来るから、彫刻家が基礎とした角度から、その彫刻が、最も完全に美を發揮する角度からそれを眺める事が出来るが、能面の場合は一つの態樂と一つの能樂師とが許す一定の範囲内の角度に於いてのみ眺める。且つ見る人の位置によつても眺め方に甚だしい制限をうける。面師の基礎角度の定め方によつては、人により表情の感じ方に大きな違ひが生ずる。

五、何故……(終りまで)

表情の感じ方の相違を嘗て見た金春の能の熊野に例をとり、その時の印象の矛盾を述べ、結局角度といふ事を知らなくても感じて問題は自然に解決されると結んでゐる。

解 釋

【能樂】ノウガク。歌劇の一種。田樂・猿樂の奏演を能といふ。西宮記の相撲の條に「相撲了りて能優一番」といふ事見えたり。其能

優とは猿樂などの類なるべく、能といふ名稱はこれらを始とすべし。此能の字は態と同じく、音は「たい」なるべきに「のう」といふ

は昔より誤れるにやと本居宣長の玉勝間には見えたり。されど嬉遊笑覽には堪能の能なりといひ、俚言集覽には藝能の略稱なるべしと云へり。田樂の能は近世には全く廢れたれば、今日能といへばみな猿樂の能の事となれり。而して猿樂の能を單に能といふ事は、或は寶生蓮阿彌より起ると云ひ、或は東山義政時代より始まりと云ふ元來猿樂も田樂も其初は多く滑稽的の茶番狂言に類したるものなりしに、鎌倉時代より漸く發達して、足利時代の初には、猿樂も田樂もともに在來の各種の歌舞を融合したる一種の歌劇を作り、相並びて行はれしを、猿樂の名人觀阿彌・世阿彌等輩出するに及びて、田樂は廢れて猿樂獨り

流行し、足利期以來武家の式樂となれり。古の田樂や觀世以前の猿樂は、いま精しく知るべからず、今日の能は觀世以後の發達に係り、殊に徳川二百五十年の泰平を経て完成せられたるものなるべし。その歌曲を謡曲といふ。拍子に合わせて謡ふ部分と、會話語なる詞とより成り、大抵劇詩よりも寧ろ叙事詩に近き形式なり。これを演ずるには、奥行四間半間口三間の舞臺に、橋掛りと稱する廊下を架したる所に於いてす。舞臺の後方に笛・小鼓・大鼓・太鼓を奏する囃子方列座し、囃子方の左に地謡の座あり。登場の役者は、少くとも仕手と脇との二人以上より成る。仕手は主人公にして、脇は副主人公なり。此二人のほか

はすべて連にして、其仕手に屬するものと脇に屬する者とを分ちて、仕手連・脇連と稱す。其他滑稽的なる所作を演ずる間の狂言といふものあり。さて登場の役者は謡曲中の詞を語るのみならず、謡の一部分をも自ら謡ひつゝ寫實的の動作と舞踊とを交々演出すれば、數人の地謡は謡の大部分を合奏し、囃子方も亦謡に合せて四拍子を奏するなり。能の題材は一樣ならずと雖も、これを貫くものは、多くは當代の佛教思想にして、十の八九は我國の古傳説を基として脚色したるなり。これを大別して、初番物・修羅物・三番物・現在物・五番物とするを常とす。古は一日の能には、翁を最初に演じて、其次に此五種の

ものを各一番づゝ演じ、五番物が祝賀の意味を有せざる時は、別に祝言の半能を附するを例としたれど、今は必しもこれに従はず其能と能との間には、狂言を挿みて演ずること、古今の通例なり。能役者には、足利期に觀世・實生・金剛・金春の四座ありて、觀世最も盛にして、常に能役者の主位に居る。徳川期中業に喜多流起りて一時全盛を極め、八代將軍の時に至つては實生の一派最も榮えて觀世をも壓せんとせしが、明治以降、觀世また盛にして、實生これに次げり。能の構造はもとより一樣ならざれど、其最普通なるものは、略々次の如し。

僧又は大名なる脇登場して、自ら何人なる

かを名乗り、次に道行を謡ひつゝ舞臺を歩み、旅行する有様を演ず。やがて某所に到着したりと唱へて、舞臺の一隅に着座す。こゝに田夫・漁夫・社人などの装をなせる前仕手、或は其他の風景を謡ひつゝ、或は脇を呼びかけつゝ登場す。脇は即ち仕手と對談して、其地の名所古蹟を尋ね、或は寺社の縁起、其地に關係ある古英雄等の事蹟を質す。蓋し、これを以て半ば觀客をして其地の光景を想像せしめて、背景の代用をなすなり。仕手はこれらに答へ終りて忽ち退場す。蓋しかの凡夫の姿を以て出現したるものは、實は神佛の化現又は古英雄等の幽靈なればなり。脇が其忽然として消滅したるに驚くところへ、間

狂言出で來る。こは普通の田夫・野人なることあり、又は末社の神なる事あり。又脇の間ふまゝに其地の縁起・舊事などを詳かに語り出で、退場す。こは實演上仕手の衣裳を改むる間を繼ぐものにして、多くは蛇足に類せり。かくて脇は待謡を謡ふ。こは大抵時間の経過を示すものにして、「松が枕に假眠したるに、既に曉になれり」といふ如き文句より成るを常とす。待謡終るや、後仕手は或は神佛或は古英雄等の姿となりて登場し、夜遊の舞を奏して靈驗を示すか、然らずば古英雄の奮闘殊死の狀、修羅の苦患等を演出して、脇の追福を乞ふ。此後仕手は能の主要なる部分にして、多くは歌謡を交へたる物語をなし、

或は歌謡を伴はざる各種の舞樂を演ず。これを要するに、脇は劇中の人といふよりも寧ろ見物人たる位置にあり。仕手も大抵眞似を交へて過去の事實を語り出づるものにして、終始叙事的なるを普通とす。これ恐らくは能の原始的構造なるべし。されど現在物に在りては、脇が事件の重要な人物となれるものあり。綱を脇とし、鬼神を仕手としたる羅生門の如き是なり。脇は極めて輕き役となりて、仕手と仕手連とのみの活動するもの、或は脇の全く消滅せるものあり。鞍馬天狗・橋辨慶・小袖會我の如き是なり。かの蛇足に類する間の狂言も安宅の能力、船辨慶の渡師、夜討會我の大藤内などにては、又全く事件中の人物

となれり。かゝるものに在りては、叙事詩的なる構造を離れて、殆ど後世の歌舞伎劇に近き構成を成せり。（目録）

【表情】 ヘウジャウ。心中の喜怒哀樂等の感情を外貌に表はすこと。

【現實的】 ゲンジツテキ。現在にあらはれてあるさま、又は實際なるさまにいふ。

【變化的】 ヘンクワテキ。一定不變でなくて時々刻々に變化するさまにいふ。

【捨象】 シヤシヤウ。事物又は表象の或る側面又は性質に注意を向けて、その側面又は性質のみを抽き離して把握する心的作用。その際にはおのづから他の側面、他の性質を捨てることになる。これを捨象といふ。即ち抽象

と捨象とは同一作用の両面である。然し抽象作用の特に必要なのは、單に一事物又は一表象の任意の側面を抽出するに止らず、多くの事物又は表象を比較して、其間に類似する性質を認めて、それ等の性質を引き離して更にそれ等を綜合して一の抽象的一般概念を構成するにある。抽象又は捨象なる語も主として此類似性質の抽出の意味で用ひられる。例へば、櫻の花、梅の花、菫の花、薔薇の花等に共通なる性質を抽象して花なる概念を作ることが如きである。（哲學）

【懷疑者】 クワイギシヤ。物事を疑ふ人。

【能樂師】 ノウガクシ。能を演ずる人。

【面師】 メンシ。能の面を製作する人。

【翫賞】 グワンシヤウ。ほめめである。もてはやす。賞翫。翫は玩に同じ。（語源）

【細緻】 サイチ。こまやか

【機能】 キノウ。物の有するはたらき。能力。

【印象】 インシヨウ。Impression (一)物の面に跡のついた形。あとがた。面影。(二)「哲」意識した外界の事物が心に與へる或感覺。（語源）ここでは(二)の意。

【基礎角度】 光線をうける所の豫め定められた角度。

【金春】 コンパル。能樂の一派。初め今春と書いたが後に金春と改めた。之に（觀世・實生・金剛・喜多を加へて五流といふ）。今春式

部大夫氏信を中祖とする。氏信は大和の人、初め圓滿井氏と稱し、後、改めて竹田氏と云つたが、將軍足利義滿の頃觀世流の祖結崎世阿彌の掣となり、能及能作に巧であつたので名を得、遂に一流を興して今春と稱した。後落飾して禪竹と號した。その子宗印より傳へて八郎元安に至る。元安、禪鳳と號して又能作にその名を顯した。近年歿した廣成亦名人であつた。その子八郎跡をついだが夭折し、養子七郎家をついで亦夭し、その子榮次郎十六歳で跡を承けた。古から徳川氏の時に至るまで、奈良に在つて春日の神事能に勤める家であつた。百科。

【熊野】 ユヤ。謡曲の名。松風と共に謡曲中

最も有名なもので、その梗概は、

平宗盛が遠江國池田の宿の熊野といふ女を久しく都に留めておいたが、老母が病氣といふので度々暇を乞うた。しかし此春ばかり花見の友として許さぬ。そこで池田から朝顔といふ女が老母の手紙を持つて、熊野を迎へに來たので、熊野は其手紙を携へて更に暇乞をした。宗盛は熊野と共に手紙を讀み、尤もとは思つたが尙強ひて花見に伴れて出た。さて、東山の清水寺に着き、熊野は母の爲に御堂で祈禱をする程に、宗盛既に酒宴を開いて、熊野を召しよせて舞はせなどする。その時丁度雨が降り出し花の散るのを見て、「如何にせん都の春も惜し

けれど、馴れし東の花や散るらん」と詠じた。宗盛も流石に憐を催して歸郷を許し

鑑賞

極めて落ちついた興味深い論である。一體かうしたものについて論ずるのは學理だけではない。能面及能樂そのものについて深い造詣があり、藝術的鑑賞眼の備はつた人でなければ出来ぬ。而もさうであつても抽象的平板的な論に陥り易い。著者は抽象論に墮せず、能面について具象的立體的に論じてゐる。光線による表情の變化は立體的の作品を鑑賞する上に重要な條件である。著者がこの鑑賞の態度を明かにしてゐる事は、音に能面に限らず、すべての立體的藝術品を鑑賞するのについての一教示である。どこと、とりたてゝ云ふ事が出来ない。文章全體に流れる著者の觀察眼が靜かな筆つきによつて吾等をわが傳統藝術の殿堂に導く。既修の謡曲を味はつた眼で更に本課の内容を味はつて見るべきである。

挿繪

【能の面翁】 (四〇頁)寶生流宗家寶生重英氏の「翁」である。寶生會舞臺披紀念の撮影にかゝる。

【能の面】 (四三頁) この寫眞の面は右から「井關河内作、十六」「井關河内作、磐若」「古源助作、

萬媚」。十六は男面の一で、敦盛・經政等の若く麗しき武將に用ゐる。磐若は靈鬼面の一、葵上・道成寺等の後シテが着す。萬媚は女面で、若く美しい女性を象徴し、蔓物に多く用ゐる。面にはこの他老翁面・老女面・神佛仙人面・盲目面等の類があつて、無慮七十餘種を數へる。現存の能面で最古のものは室町初期に出た、十作の中龍右衛門・門赤鶴あたりの作で、漸次六作の増阿彌・石王兵衛・三光坊等が傳へ、中作を経て豊臣時代に至つて最盛に達した。此頃から面打師の家といふものが出来、井闕家・出目家・兒玉家等がある。前出の井闕河内は、井闕家の四代目で、河内大掾家重と云つた。初は秀吉の鞍作であつたが、曾て能の樂屋を覗いた時に、秀吉が裝束を着て面を戴いて着けたのをみて其場で發心して面作師になつたといふ。非常にすぐれた作を残してゐて、その彩色は河内彩色といはれる程特異のものである。正保二年に歿した。古源助は出目家の三代目源助秀滿の事で徳川初期の人。古作を寫すのに工夫をした人で、喜多流の萬媚面（挿繪のもの）はこの工夫により、古作に少し媚を加へた作だといふ。（能樂大辭典その他による）

【道成寺】（四五頁）これは梅若万三郎氏の前ジテ、蘭拍子にうつるところ——うれしやさらば舞はんとてあれにまします宮人の烏帽子をしぼし假に着て既に拍子をすゝめけり花の外には松ばかり暮れそめて鐘やひびくらん——の次にくる舞で、白拍子の舞ふた曲に摸したものとといふ。小鼓一調の曲で笛はアシラヒのみに用ふる。

七 詩 三 篇

本課には明治時代の代表的新體詩人の代表作を掲げた。當時の詩壇の傾向を知らしめたい。

替 星

作 者

【與謝野寛】 ヨサノヒロシ。號は鐵幹。明治六年二月廿六日、京都岡崎村に生れた。父は尙綱と云つて僧侶で京都の成願寺の住職であり、且つ歌人として重ぜられた。寛氏は小學校の外殆ど學歴はない。上京して落合直文、森鷗外二氏に師事した。殊に直文の淺香社に入つて、大いに詩眼を開いた。二十八年、直文の弟、鮎見槐園と共に國事になす事あらんとして、日清戰役後朝鮮に渡つたが志を成さずして歸つた。

歸朝後、二十九年、「東西南北」三十年、「天地玄黄」等の詩歌集を公にした。此の中の詩は、抒情味の勝つたもので、頻りに漢語を重用して、勁健の聲調に風雲の客氣を示したが、粗大で街氣が多かつ

た。

三十三年、新詩社を起し、雑誌「明星」を發行して、詩壇一方の勢力となつた。

三十四年「鐵幹子」「紫」の詩歌美文の合集を出した。三十五年には更に長短詩美文小説を交へた「埋れ木」を、三十七年には夫人晶子との合集「毒草」を出した。

四十一年、自然主義勃興と共に、新詩社を解散し、「明星」は第百號を以て廢刊して了つたが、四十三年には「榊の葉」を出版した。

四十四年佛蘭西に遊び、大正元年に歸朝し譯詩集「いらの花」を出版した。

大正八年五月より慶應義塾大學文學部教授となつた。

十年十月、久しく廢刊になつてゐた「明星」を復活した。

十二年二月二十六日は五十回の誕辰を迎へ、新詩社同人に依りて、帝國ホテルに祝賀會が開かれた。

十四年九月、正宗敦夫、並びに夫人と共に「日本古典全集」の刊行を企て、十一月より月四冊づゝ配本したが、一年ならずして、夫人と共に編纂を辭し、今は専ら正宗氏一人に依つて繼續されてゐる。

出 所

【榊の葉】 一冊、明治四十三年七月二十日博文館發行、定價四拾錢。

この詩集は作者の明治三十五年以降八年の作を集めたものである。小曲五行詩百六十篇、長詩四十二篇、短歌五十首を収めてある。小曲には相當見るべきものがある。やはり鐵幹獨特の所謂雄々しき歌ひぶりは、こゝにも幾分かうかゞはれ得る。しかし、「東西南北」等に比べると、それよりもつと落ちついた人生の美しき悲哀をうたひ出してゐるのが多い。

こゝに引いた詩は、この詩集長詩の中の四番目に出てゐるものである。

要 旨

鐵幹の詩の特色を知ると共に、現代詩のその搖籃時代の有様を知らしめたい。又内容的には、かの宇宙の雄大深淵な、測り知られない奥底に、永劫に、無限に向つて進む彗星の存在を思ひ、引いては天地の無限を感じしめたい。

段 落

一、かの虚空……青き髮背になびけり。(四七頁八行目まで)

暗き夜の大空に、鋭い強い輝きを放ちて出現した彗星の非常な勢を示した。

二、あゝ、はうき星……大使者よ。(四八頁二行目まで)
 はうき星に對して未曾有とほめ、天上の才とたゞへ、容易に人の目に見る事の出来ないおまへの出現こそほんとうに、深い宇宙の、千萬年の祕密を見せつける使者だと稱讚したのである。

三、常珍なる……末行まで。
 その彗星の容姿を形容したもので、黄金の燭台をとり、永遠の歡きに、泣きはらした双の眸とて、大空のどの星にもみかへらず、たゞ半死の地球星に對して、かなしき一瞥をあたへつゝ、知らぬ永劫の奥深くいつてしまふ。

解 釋

【彗星】 スキセイ。一定の週期を以て現はれ、其形帯の如く、核・體蓋及び尾の三部分より成る星。はゞきぼし。天國。長き光芒を引き、太陽の周圍に細長き軌道を運行する星。彗星の軌道を計算する方法は初め三回の觀測結果より拋物線軌道を求め然る後これを殘餘

の觀測と比較して各要素を補正し、同時にこれを楕圓軌道に修正するなり。雙曲線なるは其彗星の永遠に復歸せざる事を示し、楕圓なるは其の週期性なるを示す。週期彗星と遊星との關係を説明する學說中弘く行はるゝを抑留説とす。これによれば彗星は其初め無限の

距離より來るものにして、いづれも皆拋物線軌道を畫くものなるも遊星のこれに近くことある時は、其引力によりて軌道を變ず。雙曲線に變ずれば彗星は永遠に還歸することなく、楕圓に變ずれば彗星は一の週期彗星となり。永く太陽系に屬すべしと云ふ。週期彗星にあらずして殆ど同一の軌道を運行する彗星あり、これを群と稱す。百糶。

【虚空】 コクウ。(一)天と地との間の空なる所、そら、空間、(二)佛敎語で無相無色なること。天國。こゝは一の意。

【しろがね】 (一)ぎん(銀)に同じ。和名(銀之路) (二)貨幣。天國。(一)の意。

【箏篋】 クゴ。樂器の一。豎箏篋と臥箏篋と

の二種あり。豎箏篋は體曲がりて長く、二十五絃或は二十三絃あり、地に立て豎に抱き兩手に齊しく奏す。臥箏篋は形琴に似て五絃あり撥を用ひて琵琶の如く弾く。其れに鳳首の飾りあるを鳳首箏篋といふ。天國・(史辭)には百濟琴におなじ。支那の樂器なり。百濟より始めて我邦に傳りし故にしか名付しならん。元來は「クウコウ」なれど轉約して「クゴ」といへるなり。正倉院御物に二あり。長さ凡そ五尺、二十三絃にして、一は頭を吊し一は柄を地に立て、彈すべきものなり。胴には鳥獸草花などの彩色模様あり。棹の本に獅子首又は草花の彫文等あり。

【疾風】 ハヤチ。はやてに同じ。急に烈しく

吹き起る風。〔天國〕。

【蓬として】 ホウとして。物のみだれるにいふ。「蓬髮」など。〔字源〕。

【九萬尺】 クマサカ。クマンジャクであるが、こゝは調子の關係上こういつた。非常に長い事の意。

【讚す】 サンス。ほめる。人の善をほめる。〔字源〕。

【命運の外なる云々】 「命運」メイウン。運命におなじ。めぐりあはせ。〔天國〕。運命とかいふ定められた自然の道より超越した超自然界を駆けめぐるといふ意。

【不退】 フタイ。梵語、阿毘跋致。Avivartitaniya といふ。功德善根愈増進して、退失

轉推究すれば衆生及び法の元始不可得なり、故に無始といふ。〔佛教大辭典〕。故に人間の意識の中にはかりきれない永劫の初からの意。

【泣爛れる】 ナキタダれる。爛れるは腫れ傷る。〔字源〕。こゝは泣いて眼が赤く充血する。

【日月輪】 ニチグワツリン。月輪はゲツリン。月の異名。〔字源〕。原文にグワツと假名あり。

【金牛】 キンギウ。(一)黄金にてなれりといふ想像の牛。(二)黄金にて彫刻せる牛。(三)きんぎうきゆう(金牛宮)におなじ。十二宮(天文学)の一。〔音源〕。こゝは(三)の意。をうしざ(牡牛座)に同じ。プトレマイオスの制

退轉(佛を信ぜず他へ心を移す)することなきをいふ。〔佛教大辭典〕。不退轉におなじ。常に向上の精神を維持して、必ず進みて無上正覺を得るに決すること。菩薩中の、修行積むこと多き者に非ざれば、この域に達すること能はず、といふ。又此の域に達したる者は聖者の菩薩といひ、然らざる者は、みな退轉の菩薩といふ。〔音源〕。

【燭臺】 ショクダイ。ろうそくたて。〔字源〕

【無始の世】 ムシのヨ。因果の理より推し展轉推究すれば、一切の法には始原なきこと。〔天國〕。一切世間、若は衆生、若は法、皆始あることなし。今生の如きは前世の因縁より有なり。前世亦た前世より有なり。是の如く展

定したる黄道附近北半球の星座。赤經三時〇分乃至六時〇分、赤緯〇度乃至北三〇度に跨り其東邊は銀河中に在る。その中六箇は肉眼にて見ゆるも顯著なり。〔百科〕。

【大熊星】 ダイユウセイ。(原文の假名)普通オホクマセイ。星座の名、赤經八時乃至十四時赤緯北三十二度乃至七十度にあり。肉眼にて見ゆる星の數約二百、北斗七星も此の中にある。〔百科〕。

【一瞥】 イチベツ。流し目に見やること。ちらと見ること。〔天國〕。

【ましぐらに】 まつしぐらにに同じ。〔音源〕。

【永劫】 エイゴウ。極めて長き年代。劫は佛語。人の定命八萬歳なりし時より百年毎に一

歳を減じて竟に十才に至り、復百年を経て一歳を増し八萬歳に達する間の年數を一小劫といひ、一小劫の二十倍を一中劫とし、又世界の成立より破壊までを成・住・壞・空の四劫

に分ち之を通じて一大劫といふ。又方百里なる大石を、百年に一度羅殺（うすもの）の衣を以て拂ひ、之を磨滅し盡すも、未だ其の年數を盡さずといふ。（天國）

鑑賞

非常に男性的な強い詩である。はかり知られない宇宙の無限の深さが、目の前にはつきり示された様に思はれる。しかも作者の胸に溢ふる強さを力一杯言葉によつて廣げられた様な感じがする。殊に第三段目の歌ひ方が非常な意氣と、天を突く様な強さとを表して居る。その爲にあまり荒らくれた様な感じがないでもない。しかし終り二行に於てやゝ巧みな表現で結んで居る故にかへつて、その荒らさが功を奏してゐて、彗星の勢氣と作者の心とが合致されて知らず／＼に強い調子を助けてゐる。この詩を讀むと、讀者をして、矛をとつて、天空を彗星の如くにかけめぐる様な醉興に赴かしむ。ともかくも鐵幹の「ますらを調」の一端をしるに非常に格調の強い詩である。

参考

詩より見たる謝野鐵幹氏に對する批評を参考の爲こゝに引いておく。

「所謂鐵幹調なるものは藤村の優婉と晚翠の豪莊との中間を採つたやうなものに思はれてゐたが、彼の詩人的才分はその犀利な着眼と繊細な情緒とを以て今日から見て可成り立派な素質を有する詩を生んだ。思ふに「天地玄黄」はなほ未熟であるとするも「むらさき」「鐵幹子」等に於ては一種の霸氣あると共に又浪漫的な熱情をもつてゐたがそれらに洗練に洗練を重ね、ずつと後年「櫛の葉」に收められた如き優れた小曲を出すに至つた。そして彼の使命はむしろ新しき詩人を詩壇におくる努力のためその創作力を奪はれたかの觀がある。……日本現代史Ⅱ川路柳虹——（新詩歌俳句講座）

又日夏耿之介は「明治新詩の展開」（日本文學講座中）に於て「……錄するに足るは「むらさき」と「鐵幹子」以後の數著中の少數の詩篇で、厭味も銜氣も誇張も客氣も夥しく「男兒のうた」と自稱する簡單勇壯の國士歌を吐いて「虎の鐵幹」とあだ名せられ一方に相當もてはやされ、一方に極端に毛嫌ひせられたが、……中略……その後「櫛の葉」の短曲に當年の頽唐調を揶揄するごとく迎合する如き諷諧を唱うた頃迄恆に彼につきまとうた彼の性癖から來るマンネリズムで……畧……「彗星」の類を見ても知らるる如く、簡明粗荒で時にウイツテイであるが、全身全靈をゆすぶつて内なる生命の悲鳴や哄笑やを發する底の趣は些かもない。これ彼が機才詩人として相當の名聲を把持し乍らつひに大成に及ばなかつた所以である。」といつてゐる。

彗星

われは「夜」の恐なり彗星なり。
われ過ぐ、震へ衆世界よ衆太陽よ、
我見るところ爾はおのくたゞ一粒の芥子なり。——曉鐘附録、「深淵」より——

流 星

静夜の空に星が一つ消えた
虚空の底へ星が一つ流れた

われ等の生命 つかの間光り

音もなく静夜の底に

虚無への道をとる

夜天いよいよに澄み渡り

静夜いよいよに深い

天は永劫のかたちに残つてゐれば
いま一つの存在がほろびたのだと
一瞬の後誰が思はう

静夜の空に星が一つ消えた

虚空の底へ星が一つ流れた。

——堀口大學——(現代日本詩選の中より)

千曲川のほとりにて

作 者

【島崎藤村】

シマザキトウソン。名は春樹。明治五年二月十七日、長野縣西筑摩郡神坂村に生れた。

明治十三年、九歳の時、父兄にすゝめられて東京に遊學し、姉の夫の家が京橋鎗屋町にあつたので、そこから京橋區泰明小學校に入學した。十歳の時、力丸元長氏の許に身を寄せたが、十一歳の時、銀座の吉村忠道氏の家に移つた。

明治十九年、十五歳の時、三田英語學校に入學した。二十年、明治學院に入學した。二十二年、高輪臺町教會の牧師木村熊次氏から基督の洗禮を受けた。二十四年、二十歳、明治學院を卒業。

二十七年、二十三歳、雑誌「文學界」の創刊にあづかつた。この年、感ずるところあつて、基督教の籍を退き、明治女學校を辭し、吉村氏の家をも出でて、漂泊の旅に上つた。

二十八年、再び吉村氏の家に戻つた。郷里から上京した母達を迎へ、下谷の三輪町に移つた。二十九年本郷湯島新花町に移つた。更に母達を本郷森川町に移して置いて、單身、仙臺の東北學院に教師として赴いた。母、死去。

三十年、二十六歳「若菜集」を出した。東北學院を辭して歸京。三十一年、「一葉集」を出した。

三十二年、二十八歳、小諸義塾の教師として、信州小諸に赴いた。この年、函館の秦冬子と結婚した。三十三年、「落梅集」を出した。長女縁が生れた。

三十四年、三十歳、小説「舊主人」を雑誌「新小説」に寄せたが發賣を禁止された。三十五年、「藤村詩集」の合本が出来た。次女孝子が生れた。

三十六年、三十二歳、「水彩畫家」を書いた。

三十七年、三十三歳、「破戒」の稿を起した。三女縫子が生れた。

三十八年、三十四歳、七年の小諸を辭し、東京郊外西大久保に移つた。「破戒」脱稿。長女、次女、三女相次いで死去した。長男楠雄が生れた。

三十九年、「綠蔭叢書」第一編を自費出版にて出した。西大久保から淺草新片町に家移した。

四十年、三十六歳、「春」を東京朝日新聞に連載した。次男鶏二が生れた。四十一年、「綠蔭叢書」第二篇を出版した。三男翁助が生れた。

四十二年、三十八歳、「家」上卷に着手した。四十三年、四女柳子が生れた。妻冬子死去。「家」下卷を脱稿した。

四十四年、「綠蔭叢書」第三篇を出した。

大正二年、四十二歳、神戸から佛蘭西の旅に上つた。三年、巴里の客舎で「櫻の實の熟する時」に着手した。「平和の巴里」を一冊に纏めた。四年、「戦争と巴里」を一冊に纏めた。

五年、四十五歳、三年の巴里を辭し、倫敦より歸國の途に上つた。歸國後、東京芝二本榎の假寓に居て、「故國に歸りて」を東京朝日紙上に寄せた。六年、芝櫻川町の旅館に移つて、「海」を書いた。

七年、四十七歳、「新生」上卷に着手した。飯倉片町に移つた。八年、「新生」下卷を脱稿した。

九年、「佛蘭西紀行」別名「エトランゼ」起稿。

十一年、五十一歳、「エトランゼ」を完成した。長男楠雄は既に十八歳にして中學を辭して、農事見習ひのために神坂村へ赴く爲め、送つて相携へて木曾へ旅した。「藤村全集」十二巻を出版した。雑誌「處女地」を編んだ。

十三年、五十三歳、正月、「藤村パンフレット」第一輯を出し、六月、第二輯を出した。

十四年、「春を待ちつゝ」を一卷に纏めた。「藤村パンフレット」第三輯を出した。

十五年、五十五歳、四月、末女を伴ひ、郷里神坂村へ旅し、長男楠雄の新らしい農家を訪ねた。

「嵐」「食堂」を草した。

昭和二年、五十六歳、小説集「嵐」を一卷にまとめた。(現代日本文學全集、第十六篇、島崎藤村集の年譜に依る)

出 所

【藤村詩集】 一冊、大正六年三月、春陽堂發行。定價八拾錢。これは明治三十七年九月に發行されたもの、改刷である。「若菜集」「夏草」「落梅集」の三巻よりなり「合本詩集」「初版の序」「同第十六版の序」「改刷詩集のはしがき」を添へてゐる。本課の詩は「落梅集」に收められてゐる。「千曲川旅情の歌」の一つである。

「落梅集」は、藤村が淺間の麓小諸に籠つてゐた頃に出したもので、實に彼の詩作の最後の記念である。彼の青年時代の、若々しい、純情な、熱情に満ちた若菜集から段々と作風が展化してきて一葉集時代を経て夏草、及びこの集に至つては、全くその趣を一新し、生の鬨を諷ひ、或は大へん落ちついた閑寂をうたつてゐる。若菜集の様に情熱もゆる様な、はげしい歌ひぶりは見られず、深い人生の哀愁と、生の寂しさを歌つて居る。之は全く、一つは彼の生活がその様であつて、(小諸生活)一つは情熱躍る青春の時代より別れをつけて一步步落ちついた人生の深味へ進んでゆく詩人の性情の自ら然らしめる所である。

中にも、この落梅集に於て、そうした境地を歌ひ出してゐるに最も代表的なのが、本課の詩であつて、尙外にもう一つ有名な「小諸なる古城のほとり」とで、兩方とも多くの人々に愛唱されてゐる。やがて氏はこの落梅集より進んで、散文時代へと展化して行くのである。故にかうした意味に於て、この詩集は、なつかしい記念すべき詩集である。

要 旨

自然も人も常に同じ事をくりかへしくして 窮りない永遠から無限へと輪廻する世に作者はしみじみと心の底から人の世のあはれさを味つて歌つた、冥想的な詩人の、この當時の心持をよく理解させ

たい。かつは又、この詩によつて、躍り立つ若き讀者の心に、或一脈の哀愁と、寂靜とを、幾度も幾度も朗吟せしめることによつて、深く感ぜしめたい。

段落

一、昨日また……明日をのみ思ひわづらふ。(初から四行目まで)
人の世の生活にあくせくするをばかなみなげいたのである。

昨日はかうして暮れてしまひ、今日も亦同じ姿に、靜かに暮れて行く事であらう。哀深い、寂しさの胸にしむ人の世に、何の爲にわづらはしく明日を明日をと、ゆく先に頼をかけたたりして心を苦しめるのであらうか。

二、いくたびか……水巻歸る。(四九頁終から四行目まで)
自然はすなほに同じ事をくりかへしくして永遠に向つて進んでゐるといふ事。

世の榮枯盛衰を幾度もくりかへして悲しみも、樂しさもこもくなる夢の跡を残してゐる。あたりの谷に下りて、つくつく眺むれば、河波は、砂まじりつゝ巻きかへしく永遠の歌をうたつてゐる。

三、嗚呼古城……きのふのごとし。(五〇頁二行目まで)
長い人生の歴史も、永遠よりみればたゞほんの一時の出來事の様で遠い昔も昨日の様であるといふ事

かの古城は何を我々に語り、この岸の波は何を我にさやくか。たゞ人の世のはかなさを永遠に對してみせつけるのみである。過ぎ去つた昔を靜に回想すれば皆何もかも、昨日あつた事の様に、又夢の様に思はれる。

四、千曲川……愁をつなぐ。(終まで)
作者が冥想の境からやゝ現實にかへつた所で、今も尙かはらぬ千曲川の早春をうたひ、愁多き詩人の身をのべてゐる。

千曲川は、いつはらぬ自然のめぐみに、柳霞み、氷をとかした春水も流れてゐる。自分は大ひとりこの岩をめぐりて心の愁を思ひつけてゐる。

解説

【千曲川】 チクマガハ。信濃國に在る川。筑摩川、千阿川、知隈川等に作る。國の中部東偏より北走する大河なり。水源は佐久郡の甲武信嶽・國師岳・金峯山等の溪谷。西北流して八ヶ岳・立科山と淺間山との間なる溪流を合

せ、小諸、上田を経て姥捨山と鏡臺山との間なる山隘を衝破し、屋代の邊より東北折し、犀川と合し、後越後に入りて、信濃川となる。水源より犀川合流の所まで三十四里、以下越後國界まで十六里とす。流域が殆んど平原で

あるから霖雨ある毎に河水溢し、洪水の害甚しき事あり。沿岸は地質上桑樹に適するを以て蠶業盛なる事國內一と知らる。「大地攝録」

【醒靨】 アクセク。腐爛。しかし天國はアクサクと訓ず。普通は腐爛にしたがふ。意味は心ぜわし。こせつく。

【いくたびか榮枯の夢の】 榮えたり衰へたりした世の夢の様な有様をいくたびもくりかへしくりかへししての意。

鑑賞

自然の動きを眺めて深い冥想の境地に逍遙する詩人が人間生活の愚さと、宇宙の深さを痛感してうたひ出した静寂的な、冥想的な詩である。この詩に至つては前の鐵幹の詩の様に、宇宙の無限永遠を感じしめる點に於ては同じであつても、前者は動的の中に靜を見出すものであり、之は靜中より動きを感じしめるものである。しかもその自然の動きを痛感した後、人間生活を否定せず、かへつてそ

【嗚呼古城】 アアコジャウ。古城は小諸の古城をさす。

【過し世を靜かに思へ】 過ぎ去つた世を靜かに思へばの意。「思へ」と命令形にしてあるが、こゝは次の句と關聯して考へると、思へばの意にとる方がいゝ。

【ただひとり云々】 この詩人ただひとり千曲川の岩のあたりを逍遙しめぐりぐりして、この岸邊に哀愁の思ひをつゞけてゐるの意。

の動きに同じ様とする心の芽がほのかにのぞいてゐる様に思はれる。

形式の上からいつても、單調な五七の調のくりかへしではあるけれども何等そこにいやな感じはせず、却つてゆるやかに哀調を帯びた流れとなつて、しみんと讀者の胸に哀れさの泌みゆく表現である。

参考

序にこの詩と並び賞して忘れる事の出来ないのは「小諸なる古城のほとり」である。

○小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

綠なす繁葉は萌えず

若草も藉くによしなし

しろがねの衾の岡邊

日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて
麥の色はつかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

(――藤村詩集落梅集より――)

共に多くの人々によつて愛唱せられてゐる。合せ朗吟すべきものである。

尙こゝに出した「小諸なる……」の詩は、大正十五年五月、信濃協會と舊小諸義塾同窓會と多くの賛成者とで藤村氏を記念するために小諸の古城懐古園に詩碑が建てられた。碑は青銅の鑄造(高村光太郎、高村豊周、有島生馬三氏の設計である。)

藤村の小諸の思ひ出II「詩から散文に移らうとして三年ばかり全く黙つて暮したあの小諸の馬場裏時代は、随分わびしいものであつた。私も結婚してから三年目の頃で、最初の女の兒も生れてゐたが、家のものなぞはいろ／＼單調な田舎生活に飽いて来て、こんなことでいつ芽が出るかといふやうな顔付であつたし、それに私の家では質素な小諸だからあれでやつて行けたと思ふほどの切り詰めた暮しをしてゐたから、さういふ不自由さとも戦はねばならなかつたし、毎年十一月から翌年の三月へかけて五ヶ月もの長さに亘る山の上の寒さとも戦はねばならなかつた。一度降つたら春まで溶けずにある雪の積りに積つた庭に向いた部屋で、寒さのために凍み裂ける恐ろしい家の柱の音などを聞きながら、夜遅くまで獨りで机にむかつてゐた時の心持は忘れられない。(文章往來)

「情熱の詩人藤村」として、吉江喬松氏の文に、

「新しいロマンティック流派の中で、パッションといふものを詩の形式で克明に而かも流麗に歌ひ

出したのが島崎氏である。それ故、あの當時の青年の心持は何と言つても「藤村詩集」に依つて充分な意味で代表され表現されてゐる。「藤村詩集」には日本人の自然観であるとか運命観とか或ひは農業に對する立場とかいふものまでも一種の芽として含まれてゐるので、詩人としての島崎氏は何と言つても日本人代表者であることは否定することは出来ない。

島崎氏は（中略）ロマンチック時代を日本に瞭り作り出した人の一人だと言へる。そしてまだ之を強く歌ひ出した人である。然しそのロマンティックな傾向は單なる憧れや希望などに終つてゐない。島崎氏は、ロマンティックな情熱の解剖に對して鋭い觀察眼を向けてゐる人間に對しても自然に對してもデリカな動きに對して細心な注意を拂つた。そこに作者として島崎氏の第二期の藝術的な境地が胚胎してゐる。

このロマンティックな情熱解剖の行方は「破戒」だとか、その他「水彩畫家」などの當時の散文物語にまで及んでゐる。この傾向は次第に明かになつて來て、「春」以後からは島崎氏第二期の藝術境地へはいつたものだと言へる。忠實な克明な作風で殆どゾラの手法に類する描寫法に依つて實寫を試みてゐる。島崎氏は此頃では現實主義者として確かりした地位を作つてゐると言つて差支へない。

然し此れ程まで現實的になつてきた島崎氏の作風も、最初の出發が情熱の爆發にあるだけに、第二

期の藝術的な境地にはいつてからも尙この種の情熱的な傾向は免がれなかつた。この現實的な一面と島崎氏自身の持つ情熱的な或る一面とがその作品に盛られた時藝術上に新しい境地を作る動因になつたのである。云ひ換へれば、島崎氏の作品は情熱の理論を明瞭にたどつて行かうとする努力の結晶のやうである。そこに島崎氏の作品に努力と苦心との存する譯である。それだけに氏の作品がどれだけ現實的なものになつても、情熱が興へる一種の暗示と匂いと輝きとが見られる。所謂現實主義者とは違つた風韻を生ずる所以である。

一體情熱を解剖するにしても、ロマンティックな作家ならば、それに終始して行く筈である。また現實に即して寫實主義を奉ずる作家ならば同じくそれで一貫して他の傾向を取入れないのが普通である。然し島崎氏の場合は別であつて、その兩方の傾向を具へてゐる。リアリストティックな手法をもつてこの情熱を解剖しその解放をとげ、また之を整理し論理化して行くと同時に一層廣く伸展させるだけに、全體を通じて見た場合には作品としては相當變化の多い方である。勿論一面に於てはその努力や精進に俟つことは事實であるが、これは作家として島崎氏の二つの傾向を思ひ合すればすぐに了解出来ることである。

情熱の論理化と整理に對して専心した氏の作風は以前からあつたのである。かつて獨歩が島崎氏を

批評して、「軌道をつくつて初めてその上を車を走らせなければ氣の済まない人だが、自分などは野原だらうが藪の中だらうが關はず突き進む方だ」と云つた事を思ひ出す。これは第二期の情熱を論理化して行く時代の島崎氏の態度を批評したものだ。この強い情熱を充分抑へてそれを論理化して行つた所に名工の深ぼりの鑿の跡を見るやうな感じがその作品に現はれる。フランスの或る批評家は日本の現代文學を批評した中で「島崎氏は現實主義といふものに初めて氣がついて、新らしい草鞋を履いてその方へ一步踏み出した人である」と云つてゐる。此は恰度詩人である島崎氏が散文作家になり、散文作家である氏の中に當に情熱的な詩人が生きてゐることを比喩的に云つたものと見て差支へない。今迄の作品を通じて見た場合我々は島崎氏のこの二方面の傾向は極めて明らかなるものであること、要するに島崎氏は若き日本が初めて生んだ純粹な情熱の具體化した詩人と云ふことが出来る。また一面に於ては此の純粹な情熱を一層深刻に現實的に論理化して行く小説作家としての島崎氏を見出すのである。この二方面が同時に氏の渾然とした作風を成してゐる點を焦點として氏を見る時は明治大正を通じて我々日本人にとつて種々な重大な要素が包含されてゐることが瞭り了解されるのである。〔文章往來〕

無 限

作 者

【土井晚翠】 ツチキバンスイ。名は林吉、明治四年十月、仙台市本荒町に生れた。明治三十年東京帝國大學英文科を出て、三十三年第二高等學校の教授に任ぜられた。三十五年三月歐洲に遊學し、三十七年歸朝し、翌年再び第二高等學校教授に任ぜられ今日に至つてゐる。二十九年の末、始めて「紅葉青山水流急」といふ百餘行から成つた抒情詩を發表して以來、次々と詩作を發表し、その詩名は隆々として江湖に鳴りひびいた。三十二年に第一詩集、「天地有情」を出版し、三十四年には「曉鐘」を出した。三十八年に第三詩集「東海遊士吟」大正八年に、第四詩集「曙光」、九年に、第五詩集「天馬の道」を出した。

出 所

【曉鐘】 一冊、大正七年二月、岡崎屋書店發行。六版。定價參拾五錢。

この詩集は、長詩・短詩二十一篇と、三篇のユーゴー作の譯詩より成つてゐる。長詩はその題を支那の風景に取れるものが多い。即ち「萬里長城の歌」といひ、「黒龍江上の悲劇」等、非常に長いものである。しかもその歌風が大へん漢詩めいてゐる。卷中一貫して、非常に雄渾なる格調をもつて冥想的に、かつ浪漫的な傾向を強く表してゐる詩集である。卷頭に、ゲーテ・ユーゴー・王陽明の詩をかゝ

げてゐる。殊に王陽明の詩、「四十餘年睡夢中、而今醒眼始朦朧、不知日已過亭午、起向高樓撞曉鐘。」とあるは、蓋しこの詩集の名のよる所であらう。

要旨

現實の悲慘を歎じて理想の世界、「無限の境地を憧憬した詩である。神祕的、冥想的、思索的、厭世的のところが氏の特色である。

段落

一、あらしの鞭に……「無限」は照りぬほゝるみぬ。(五〇頁の終の行まで)

自然界の果敢なきに對して「無限」をうたつたものである。即ち花笑ひ蝶舞ふ美しい花の春が訪れてこの世が唯春の美の世界となつても、やがては嵐がもたらす鞭のため花は散り、楽しい蝶の夢もさまされて、時は移り自然は刻々に變つてゆくが、理想の世界に、かの「無限」のみは高くほゝるんでゐる。

二、人のつばみ……。(五一頁六行目まで)

人間界の悲慘に對して「無限」をうたつたものである。家の光たる嬰兒が、折角この世に生をうけながら、はかなく、若く散つてゆく。その枕もとに、母のすがりてなげくもふりすてゝ、無常は、かく人の世をおそふ、が無限のみは寂然と理想の空にほゝるんでゐる。

三、尊き道の……。(終りまで)

宗教界の衰微に對して無限を比べうたつたものである。人間の行を善に導く爲に産れた色々のをしへに、もし背いたものが出たならば、道といふ名によつて、あはれな人間は罰せられ、犯罪人として罰を蒙る。そして教の光といふものはその爲にくもらされる、が無限のみは理想のかなたに超然とほゝるんでゐる。

解説

【無限】 ムゲン。制限なきこと、際限なきこと。

と。天國。有限の反對、即ち如何なる限界をも越えるものを無限といふ。併し單に有限の否定のみでは無限を積極的内容ある概念として思惟することは出来ない。唯終無しといふことは一定の限界を推移せしむるに止まる。之を積極的に定まれる對象として思惟しようとするれば必ず推移の或段階に止まらなけ

ればならぬから有限となることを免れない。眞の無限なるものは其自身の中に發展の契機を藏する全體者でなければならぬ。部分が全體を表現する無限は唯精神的なるものとしてのみ可能である。吾人の現實意識を其部分とする内包的全體(全體の内から部分が分化發展せられる全體)としての實在的精神こそ無限なる絶對であり神である。〔哲學辭典〕。

【あらしの鞭に云々】 嵐の吹いて花を散らすことを擬人化してうたつたのである。

【うつろふ】 移ふの字。(一)場所を易ふ。うつりゆく。(二)かはる、變ず。(三)色さむ、色衰ふ。(四)散る。天國。こゝは(二)の意。

【理想】 リサウ、客觀的に妥當する規範、有る所のもの、即ち現實に對して有る可きもの稱、從ひて人間活動の範圍の數に應ずるだけの理想あり、即ち眞善美及び聖。天國。

自己の力を以て想像し得る最善の状態、現在の状態に満足する者には、更に向上進歩のなかるべきこと勿論なり。進歩とは現實の状態より理想の状態に向ひて動くことに外ならず。漸く進みて以前に理想とせるところに近

づくときには、更に以前より高き理想を立つるに至る。されば人類の進歩は即ち理想の進歩なりといひ得る。もし人生に究竟の目的あることを認めざれば生活上に確乎たる理想を立つるを得ず巧に其境遇に順應し行くを以て能事とするに終らん。もし現實の状態を顧慮せずして徒に高き理想を立つる時は、其理想は根底を失ひて空想たるに終るべきのみ。賢實なる現實状態に對する顧慮と高遠なる理想と相俟ちて初めて眞の健全なる進歩あり。

百利。

【しまは】 (一)子を限りといふこと。(二)今は限りと此の世を去るとき。臨終。最後。天國。

【尊き道の名】 宗教上色々な人間の守り行ふべき道をいつたもの。

【罪なき血汐すゝられつ】 罪を罰して殺す人を鬼とみて云つたのである。

鑑賞

自然といひ、人生といひ、それは畢竟、現象の世界であり、假初めの世界である。すべては滅びて行き、葬られて行く。そこに我々の現實に對する歎きがあり、遂に、理想の世界を憧憬しないではられない。作者はそこを歌つたのではあるが、併し實感が乏しくて、何となく作らへた詩といふ感じが強い。今日の鑑賞眼から見れば、幼稚な氣がする。朗々誦するには實に格調がよく整つてゐるが、味はひは浅い。心に迫りくる強さが缺けてゐる。

備考

晩翠の批評

情熱の詩人藤村に對して冥想の詩人土井晩翠が居たのは好個の對照であつた。藤村は女性的、晩翠は男性的で、前者は優雅清新の致を具し、後者は豪健、雄放の趣を備へて居る。(中略)晩翠の哲理的な詩は、其の思想的發育の自然な内的伸張ではなくて、主として机上讀書から得た哲理を鵜呑みにして、それを明快で雄麗な詞藻に托したものだと思ふ。若し彼れが實人生と戦つたり、或は實社

會の渦中に飛び込んで大きな苦悶と懊惱とを経た後に得來つた思想なり哲理ならば、當然内的に人の心を強く突き動かすところの自發性、積極性などを備へて居るわけだ、が、机上哲理であつたから抽象的に冷たく、力がなくて、根本的に人心に觸れる丈の可能性に缺けて居た。……………（高須芳次郎著『現代文學十二講』より。）

立 體 心

詩は立體的の表現を持つことによつてその深さを加へるものである。作品が散漫平板であるのは根本に於て、觀照の膚淺と、中心感情の凝集力の不足と、明確な詩致に對する趣味性の缺乏とに基いてゐる。

立體的表現は、言葉・節奏そのものを直ちに目的化せんとする心的努力によつて生ずる趣致である。

概括的説明的でなく物をあらはすことに於て美は生ずる。立體心は即ちさういふ詩致を生む。

——三木羅風氏著「詩歌の道」より——

八 富嶽の詩神を思ふ

作 者

【北村透谷】 キタムラトウコク。名は門太郎、明治元年十一月十六日、相州小田原町萬年町四丁目、醫師北村快藏の長男に生る。父は小田原藩士、明治六年、藩の儒者として出京、彼の母と令弟垣雄（後古香と號した）は伴はれたが、彼は祖父及び繼祖母に託されて小田原に残さる。幼時、母は嚴格よく彼の教育をなしたが、繼祖母は愛情稍うすかつたと傳へられる。透谷は十三歳の時上京、京橋數寄屋町の泰明小學校に入學、翌年十二月卒業に際し、卒業演説をなして明治日報の雜報欄に「奇童」と評された。が恩師谷口訓導の轉任は彼に憂鬱を感じしめ、私塾を轉々して、十五歳の時、早稻田專門學校に入學し、多くの書史に親しんで、大政治家たらんとし、また大哲學者たらんと志したが、腦を病んで、「全くの功名心の椅子より落ちて」旅行家として自然の鑑賞に親しんだ。而して翌年遂に退學、英語研究の目的を以て横濱五十七番館にボーイとなりて果さず、更に速記術を學んで、神奈川縣

會の速記者を命ぜられ、日給貳圓を受け、縣命終るやグラランド・ホテルにボーイとして英語研究の目的完成に努めた。其後十八歳頃には大阪事件に關係して八王子より京橋彌左衛門に住せし父君のところに脱れ來つてその叱責に逢ひ、絹の法被を纏うて糸針類の行商をなす等、數奇の日を送つた。明治廿一年十一月三日、相愛の石坂代議士令嬢、美那子と凡ての障礙を排して質素なる基督教結婚式を擧げ、かくて美那子夫人は透谷病生の伴侶となつた。

彼の處女作として許されしものは二十二年に發表した「楚囚の詩」であるが、既に十七歳の頃、桃紅の名を以て北海道の某新聞に小説を連載した。後二十二年七月より八月廿七日にかけ、小田原に到つて創作に耽つたこともあるが、その頃のものは未完成で遺つてゐない。歸京後は劇詩「蓬萊曲」の創作に苦み、その年十一月廿三日芝公園地内十三號に居を移し、十二月廿九日箱根塔の澤一の湯に宿つたが「みゝすの歌」の詩は此時に生れたのである。彼の作品が多くなつたのはその翌廿四年からで、五月には「蓬萊曲」を發表した。廿五年は彼の飛躍時代で、三月から岩本善治氏の「女學雜誌」に關係すると共に、「宿魂鏡」「徳川時代平民思想」「厭世詩家と女性」「鬼心非鬼心」「我牢獄」等の多くの作品を發表した。かくて島崎藤村、星野天知、戸川秋骨、平田禿木、馬場孤蝶等の諸氏と相結んで「文學界」を起し、後、上田敏、田山花袋の二氏を入れて、主情的な新しき運動を明治文壇に築き

上げた。が、彼はその間も自我の發展に苦悶して、居宅をさへ五月は高輪東禪寺に、八月は芝公園に、十二月は麻布簗筒町に轉々した。一女を儲けて英と名づけたのもこの年である。廿六年、「富嶽の詩神を思ふ」「山庵雜記」に加ふるに、幾多の熱烈な批評と詩作を見せたが、不幸にして彼は自らの健康に異状あるに心付き、同年八月三十日、祖先の墳墓の地である相州國府津在前田村の長泉寺に靜居し、岩本善治氏の明治女學校にも、彼は教師としてそこから通ひ、また外人ブレースエート主宰の宗教雜誌「平和」を編輯した。その後戯曲「五縁」「十夢」に公曉を主人公とする「惡夢」の大作に没頭したが遂にならず、力をこめたる「エマルソン評傳」も未完成のまま筆を棄て、廿七年京橋彌左衛門の母の家に歸り、更に以前の住居であつた芝公園に移つたが、同年五月十五日の夜、彼は遂に感ずる處あつて、その住家の樹下に縊死した。年僅に二十七。其全集の成たのは明治卅五年である。一女は實業家堀越萬三郎氏に嫁ぎ、夫人（美那子）は現に東京府立品川高等女學校に教職を奉じてゐる。（現代日本文學全集、第九篇、北村透谷集、小傳に依る）

出 所

【透谷全集】二卷、大正四年二月、國文館書店發行。

透谷死後、「文學界」の同人、星野天知・島崎藤村・平田禿木・戸川秋骨によつて編集せらる。最後

に戸川殘花の跋がある。参考にこの全集の戸川秋骨の序文をかゝぐ。

硝煙彈雨の間に殊疊を死守する勇士の奮闘は悲壯なり。然れども想界の戦士が苦戦は更らに悲壯なり。畏友、故透谷北村君、君は詩人なりき。思想家なりき。而して又戦士なりき。君先づ世と戦ひ人と戦へり。次で魔と戦ひ靈と戦へり、終に自己と戦へり。孤劍陣頭に立ちて慨然として叱咤したる其風姿今なほ見るが如し。悲むべし、幾千百の年を経たりし敵は君の獨力に動かざりき。君終に仆れぬ。見よ、此の集、君が揮ひし鐵槌こゝにあり。君が駢し、太刀彼處にあり。鎧袖ちぎれ兜落ちたり。ア、想界荒寥草茫茫として當年は夢の如し。君世を去る前數日、君が僑居を芝の公園に訪ふ。君談笑常の如し。去るに當り家人眉を顰めて曰く、君等と談する時、しかく樂しきが如し、何の故ぞ孤獨の時、かの狂亂に似たると、悲惨の事跡終に吾が腦裏を去らず。透谷全集新に成れども君また返らず。痛恨殊に深し。

明治壬寅の九月誌

戸川秋骨

明治壬寅とは、透谷死後二年後「透谷集」を「文學界」同人等が編んだ。その時の序文である。秋骨の序文の外尙、星野天知の序文、平田禿木の「亡友を弔ふ」、島崎藤村の「亡友反古帖」の記がある。順序は上巻Ⅱ論文集、感想文集、詩。下巻Ⅱ小説、戯曲、詩劇、日記等入る。こゝにあげた「富嶽の

詩神を思ふ」は透谷の明治廿六年一月の作で全集の上巻に入つてゐる

要 旨

朝に生れて夕べに死する、これが人間の運命である。凡ての者は死して墳墓に葬られる。而も墳墓も亦空しい。人生何處に死せず、朽ちざるもの、死せず朽ちざるに近きものがあらう。富嶽こそその不朽不死に邁きものであつて、而も富士こそは我が大和民族の文學の淵源となり、風流の道もこれに依つて大いに開け、多くの詩人もこの富士の詩神と逍遙したことを述べ、最後に、この富嶽の詩神去らざる間はこの國も愛すべく、人間も尙ほ味はひがあるといふことを論じた文である。

段 落

- 一、空を望んで……又故なるを知らず。(五三頁の九行目まで)
- 二、朽ちざるもの……何をか畏とせん。(五五頁一行目まで)
- 三、遠く望めば……玉容を樂しむ。(五六頁一行目まで)

富嶽の姿の非常に優に秀でた點をのべ、アルプスの崇巖に比して、引いては我が大和民族文學の淵源とたゞへた。

四、盡きず……(終まで。)

この不朽不死の美峰を詩神は愛してこゝに住み、之を眺む大和民族は古來より渴仰し、以て國民性が養はれ人間味を豊にせられる。

解 釋

【富嶽】 フガク、山の名。富士山におなじ。

【富嶽】 不二山。不盡山、芙蓉峰等に書く。駿

河、甲斐二國に跨る山。本邦第一の名山にして、越後西部より伊豆七島に互りて本邦を横

斷する一大火山脈の中央に在る。西は毛無山

脈を以て限り北は御坂山脈に接し東は足柄山

脈を界とし、南は愛鷹山を擁して駿河灣に臨

む。形狀端正、四望觀を等うし、絶頂常に雪

を戴く。海拔三七七八米。現今活動止む、往

昔は猛烈に噴火せし事多々あり。山麓に亦湖

水多し。【大地】

【詩神】 シシン、詩の神、ここは詩そのものを人格化して言つた。

【駿驅】 シュンク、駿Ⅱ(一)よい馬、(二)すぐれた者、(三)すみやか。【詳漢辭】。こゝは

(三)の意。

驅Ⅱ馬にのつてかけさせる、馳せる。【詳漢辭】。故にこゝはすみやかに馳せる意。

【日陽】 ニチャウ。太陽の事である、普通にはこんなにあまり用ひられぬ。陽日、日輪、等しふ。

【虚に循つて】 キヨにシタガつて。虚Ⅱキヨ、コともしふ。(一)むなし、(二)そら、(三)うそ。【詳漢辭】。こゝはそらの意。循Ⅱ

(一)シタガフ、順ふ、依る、(二)メグル、まはる、遍歴する、【詳漢辭】。こゝは(一)の意にとる。大空の次第によつて。空中に來る順序により。

【警立】 ケイリツ、警Ⅱ(一)氣をつける、(二)非常を知らせること、(三)さきばらひ、

八 富嶽の詩神を思ふ

【候節】 コウセツ、氣節のこと。氣候上五日を一候とし、一年を七十二候に區分す、又三候を一氣(又は一節)とし、一年を二十四氣(又は二十四節)に分ける。【詳漢辭】その他。

【飄忽】 ヘウコツ、急なるさま、たちまち、忽然。【詳漢辭】。

【一潮山を噬んで】 イツチャウヤマをカんで。一潮Ⅱ一つのうしほ、海水。一定の時間をもつて満干する現象、さししほを潮、ひきしほを汐。一説に朝のを潮、夕のを汐といふ

【詳漢辭】。噬んでⅡくひつく、【詳漢辭】。即

一六一

ちうちくたく事。潮流が山にあたつて崩壊される事をいふので、世の變遷を意味す。

【葉敷を減じ】ハスウをゲンじ。時代の推移と共に古い歴史が簡略に扱はれ、書物の枚数がへつてゆくといふ意。

【古苔むし盡して】コタイむしツクして。英雄の墓碑も苔にすつかり埋れ果てた末にはだんく、それも忘れられて、その靈を弔ふもの日に、稀に冷になつてゆく。

【遺魄】キハク、魄ハたましひ、「詳漢辭」。こゝは即ち亡魂の意。

【きのふの紅顔けふの白頭】紅顔コウガシ、わかしく元氣のよいかほ。劉廷芝の「代悲白頭翁」の詩に、洛陽城頭桃李花、

飛去飛去落誰家、洛陽女兒惜顔色、行見落花長嘆息、今年花落顔色改、明年花開復誰在、已見松柏摧爲薪、更聞桑田變成海、古人無復洛東人、今人還對落花風、年年歲歲花相似、歲歲年年人不同、寄言全盛紅顔子、須憐半死白頭翁、此翁白頭眞可憐、伊昔紅顔美少年、公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前、光祿池臺開錦繡、將軍樓閣畫神仙、一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊、宛轉蛾眉能幾時、須臾鶴髮亂如絲、但看古來歌舞地、惟有黃昏鳥雀飛。又許渾の「秋思」といふ詩中に「高歌一曲明鏡掩明鏡。昨日少年今白頭。」の句がある。又蓮如上人白骨の御文章に「夫、人間の浮生なる相をつらく観するに、おほよそはかなきも

のは、この世の始中終、まぼろしの如くなる一期なり。されば今に至りて誰か百年の形體を保つべきや。我やさき、人やさき、けふとも知らずあすとも知らず、おくれさきだつ人は、もとのしづく、すゑの露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。既に無常の風來りぬれば、則ち二つの眼忽にとち、一つの息永くたえぬれば、紅顔空しく變じて、桃李のよそほひをうしなひぬる時は、六親眷族集りて、歎き悲しめども、更に其の甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外におくりて夜半の煙となしはてぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あはれといふも中々おろかな

り。されば人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば誰の人も早く後世の一大事を心にかけて、阿彌陀佛を深くたのみまゐらせて念佛申すべきものなり。あなかしこあなかしこ。」とある。之等を思ひうかべて、人世のはかなさをのべたのである。

【忙々促々】パウパウソクソク、忙々ハいそがはしい。促ハサクサクともいふ、うき世の事に心身を勞する、世俗にあくせくする。〔詳漢辭〕。

【營々】エイエイ。(一)往來するさま轉じて物事にあくせくして忙しいことなどの意に用ゐる。〔詳漢辭〕。

【悠々綽々】イウイウシヤクシヤク。悠々ハ

(一) 遙かなさま、遠いさま。(二) 憂へるさま。(三) 行くさま。(三) 間暇あるさまゆるく、ゆつくり。(四) はてのないさま、無限に遠いさま。「詳漢辭」。ここは(三)の意にとる。綽々(一)しとやか。(二)ゆるやか。「詳漢辭」。綽然に同じ(二)ゆつたりと、ゆるやかに。「言泉」。

【千載】 センザイ。ちとせ、せんねん。「言泉」。

【大暮の同寐】 タイボノドウビ。暮(一)日の暮ること。(二)する、をはり。(三)歳のをはり。「因國」。こゝは(二)の意にとり、死を意味す。寐(一)ねいる、まどろむ。(二)ふす、いこふ。(三)くらし。「字源」。こゝは(一)の意にとる。

結局は皆死に歸するといふ事。

【霜は香菊を云々】 霜は香高い菊にも遠慮せず置き、風はおく深い谷に生ずる蘭にも、容赦せず吹きあてる。

【遼冥】 バクメイ。遼(一)とほし、はるか。(二)かるんず、あなどる。冥(二)とほし、ふかし。「字源」。こゝはとほくはるかな事。

【致す】 (一)到らしむ。(二)爲す、行ふ。

【字内】 ここは文の關係上なつてくるの意。

【宇内】 ウダイ。宇(二)天地四方、あめがした。故に天下の意。「因國」。

【睥睨】 ヘイゲイ。ながし目にみる。睨(二)伺ひ視る。「字源」。

【叱咤】 シツタ。大聲にしかる、又いきまき

て舌打する。「字源」。こゝは英雄が何者にも恐れず非常な勢で己が意力を發揮する事をいふ。

【誰か不朽といふ字を云々】 ナボレオンが「不能といふ語は唯愚人の辭書に在り」といつたと傳へられてゐることに做つたものであらう。誰かのかは、軽い疑問の意を表はす。

【俗眼者流】 ゾクガンシヤリユウ。世俗なみの觀察眼識しかない者共。

【空々漠々】 クウクウバクバク。空々(二)おろかなる貌、無識の貌。佛語で宇宙の事物皆因縁所生にて實體なき埋を悟りて心に執着なき義。「字源」。漠々(二)ひろくとしてはてなき貌。暗き貌。「字源」。

【滔々】 タウタウ。水の盛に流れるさま。洋洋。「詳漢辭」。

【趣く】 赴と同意。區別すると、赴は先方へかけつける義、趣は一定の所に志して走りゆく意。

【冉々】 ゼンゼン。行く貌。「字源」。

【躊躇】 チウチヨ。ためらふ。たちもとほる。「字源」。

【逍遙默思】 セウエウモクシ。逍遙(二)ぶらぶらさまよふ。「詳漢辭」。死せず朽ちざるに近いものを見出さんと、半生の間方々にぶらつき或は心に考究して見たいといふのである。

【天地のわかれし時ゆ】 萬葉集卷三、雜歌

の中に、「山部宿禰赤人望_三不盡山_二歌一音并短歌」として出てゐる。参考の爲めに原文をあげると。

天地之。分時從。神左備而。高貴寸。駿河有。布士能高嶺乎。天原。振放見者。度日之。陰毛隱比。照月乃。光毛不見。白雲母。伊去波伐_{の誤リ}。代加利。時自久曾。雪者落家留。語告。言繼將往。不盡能高嶺者。

反 歌

田兒之浦從。打出而見者。眞白衣。不盡能高嶺爾。雪者零家留。たこの浦ゆ、打ちで、見ればましろにぞ、ふじのたかねにゆきはふりける。

山部赤人_二和歌を以て聞ゆ。柿本人麿と名を齊しうし山柿と曰ふ。論者謂らく人麻呂は赤

人の上に立ち難く、赤人は人麻呂の下に立ち難しと、後世稱して和歌の仙と爲す。その傳は詳でない。集中の作等によると、聖武天皇の朝に仕へた下級の官吏であつたらしい。神龜元年行幸のお供をして紀伊に行き天平年間には吉野離宮に陪從して、勅によつて歌を詠じ又伊豫の温泉に浴し、辛崎・敏馬浦等に遊び又東國に遊びて不盡山を望んで作る歌へこゝに講ずる歌がそれである。世の爲に稱せらる。赤人の歌風は一體に優艶であつて、萬葉前期の雄健素朴な歌風と、平安朝の優美纖弱な古今風とに屬するものであつて、如何にも天平歌人に悦ばれたものらしく思はれる。とかく赤人は萬葉後期の前半期を代表する宮

延歌人であつた。「經人名」。「新講」。

○天地のわかれし時ゆ_二天と地と始めて分れた開闢の時から。○かむさびて_二かうがうしくて。さぶはそれらしくあるといふ意から。

○天の原_二空をはるく_一仰ぎ見るの意。○隠ろひ_二隠りに「ひ」の附加して變化したもので、繼續的の意義を表はす語。日の光が富士の大きな姿に遮られて、すつと隠れてしまふ意。○い行きはばかり_二行きかねてゐるといふ意で雲も山の尊嚴を犯さぬ様に近づきかねて、中天に遠さかつてかゝつてゐること。

「い」は接頭語。○時じくぞ_二何時といふ定まりもなく、時ならず。トキジク・トキジキと活用した形蹟がある。「新講」。ぞ……けると

連體形で終る。○語り繼ぎ云々_二古義・代匠記には「將來も末代にもこの山の事を語りつぎいひつぎゆかむ」といふ風に意味をとつてゐる。しかし新考(井上通泰氏)には「案ずるに、其世にありて、後世まで残らぬものならば後の世まで語り繼がむと云ふべし。山の如き永久不滅のものは人の語り繼ぎ言ひ繼ぐを待たじ。さればカタリツグといへるには二種ありて、一は後の世にかたりつぐ方、一は同時の人の未見ぬ人にかたりつぐ方にて今は後の方なり。」しかし楓の落葉の説にしたがつて、語りつぎは後の世に語りつぎとし、言ひつぎは未だ見ぬ人に云ひつぎとして、この説にしたがつておく。全體の意味は、天と地と

始めて分れた時から、かうがうしく高く貴い姿をして、立つてゐる駿河にある富士の高嶺を、大空遠く仰いで見ると、空を行く日の光も山に隠れてしまひ、夜照る月の光も山のために見えなくなる。白雲さへも山に近づきかねて中天にかゝり、頂上には、常に、雪が眞白に降つて居る。この崇高なる富士の高嶺のさまを、後の世に語りつき未だ見ない人に普く言ひ傳へたいものである。「雪」の序に反歌の意を解すると田子の浦に（或は之をよりにとる人もある）出て見ると、青空にそびえてゐる富士の高嶺に雪が眞白に降り積つてゐるの意。以上萬葉の譯は、次田潤の萬葉集新講、井上通泰の萬葉集新考、鹿持雅澄

の萬葉集古義による。尙次田潤氏この歌を評して、長歌の方には「天地開闢の時以來と歌ひ起して、先づ時間的に莊重な感を與へ、渡る日の以下八句で空間的に姿の高く且つ大きいことを述べ、終りの三句で人々に普く語り傳へようといつて結んである。結構修辭共に巧みで、思想が頗る崇高であつて、叙景詩人としての赤人の手腕を示した作である。」又反歌の方には、「仰ぎ見た時の感じが素朴に表はされてゐるので無限の味ひがある。初めの字餘りの悠々迫らざる口調が頗るよい。」

【潰雪】 クワイセツ。潰れくづれるつぶれる。降り積んだ雪のくづれて裂目などなしてゐるのをいふのであらう。

【閃電】 センデン。ひらめくいなづま。「字源」。
【用役】 ヨウエキ。用ひ使ふ。使僕も同じ。
【制御】 セイギヨ。おさへつけて自由にをさむる。「字源」。おさへすぶること、支配すること。「廣辭」。

【恒久不變】 コウキウフヘン。いつもかはらず久しく變ぜぬこと。

【廻き】 チカキ。近に同じ。「字源」。

【流轉】 ルテン。生きかはり死にかはること。輪廻に同じ。死生、興廢などの、始終うつりゆきて、又もとにかへるさま、恰も車の輪の回轉するが如くなること。「廣辭」。風はこの世に絶えず吹渡るもの故こういつた。

【無常】 ムジヤウ。梵語阿彌怛也。Anitya

世間一切の法は生滅遷流して刹那も住することなきをいふ。「佛教大辭典」。萬づのもの皆死ありて、無常の力で死にさそはれるが、それすらもこの山にはよう襲はない。

【畏】 キ。おそれる、したがふ。おそれ憚るべきこと。「字源」。

【アルプス】 Alps 歐洲の南西部に在る有名な山脈。地積一五、〇〇〇方里を占め、東西三八〇里、南北三〇里乃至七〇里、平均高度七、七〇〇尺に達す。フランス・ドイツ・オーストリア・イタリアの四國に介在し、西はローヌ河谷、北西はレマン湖・ニュー・シャテル湖・バワリア平原、北東はサルツブルグよりウイーンに至る低地に限らる。東は扇状の

丘陵地を成して、ホンガリアの平原に至り、其の限界明らかならざれど、ウイーンの近傍よりムール河を経て、ライバハに至る峡谷を以てこれを分ち、南東はカルスト高原を以て其の限界とす。南はいはゆるロンバルデア平原に陵夷し、山裾西はトリノ近傍より東はゴリチアに至る一五〇里の間に延長す。山脈の走向及び形勢上大別して、西・中・東の三部となす。中アルプス山脈の西部は高度の最大なる所にしてモント、ローザ（一五、二二七尺）其他一萬四千尺以上の高峯多し。（百科より攝録す）

【淵源】 エンゲン。（一）ふちと、みなもとと。（二）物事のもとづくところ。（冒頭）ここ

士山の詩に、「玉帛輪來從百蠻」天邊先認好容顏、溫然自與其人似、君子國中君子山。等がある。

【アルプスの崇巖或はこれを缺かん】 アルプス山のもてる崇巖さといふものは、もしかすると富士山にはアルプスより少いかもしれぬが、といふ意。

【觀念】 クワンネン。観じて念ふこと、目を閉ぢ氣を鎮め、心に想ひ浮べて悟こと、黙して心中に念する。（天國）精神現象の一、廣狹二義あり。廣義に従へば知性に屬するすべての精神現象の總稱にして其諸象の差異は單複の別あるのみ。狹義に従へば刺激の去りし後にもなほ依然として刺激の存せし時の如くに

は（二）の意にとる。

【關聯】 クワンレン。かかりあふ。（字源）
【遠く望んで美人の如く云々】 古人の詩歌文章などに散見される。美人といつたのに、荻生徂徠の峽中紀行に、「美人微笑立雲端、向背誰言都一般、欲識士峯真面目、却從甲斐國中看。」の一例あり。又更科日記に、「その山のさまいと世にみえぬさま也。さまことなる山のすがたの、こんじやうを塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積みたれば、白き衣に白きあこめきたらんやうに見えて、山のいただきのすこし平らぎたるより烟は立ちのぼる夕暮は火の燃えたつも見ゆ。」とある。又男性的に見立てたのに村上佛山の富

意識中に現はるゝ心象をいふ。此解釋に従へば、吾人が今眼前に見る物象は知覺して、眼を閉ぢたる後にもなほ心中に現はるゝ現象は觀念なり。（百科）一切の認知作用の所産を總稱する場合にして、現在の刺激に對して起るものなると然らざるものなるとを問はず、又順正なると不順正なるとを問はず感覺、知覺幻覺、錯覺、想念、概念、想像、等をいふ。平易にいへば吾人が通常漠然たる意味にて感ずるとか認むるとか思ふとか言ひ居ること皆然なり。（哲學辭典）

【佳人】 カジン。容貌の美麗なる女。（冒頭）
【玉容】 ギョクヨウ。美好なる容貌。（字源）
【御し】 ギョシ。○馬を使ふ、すべる、つか

さどる。〔字源〕さしづす、統治す。〔廣韻〕つかさどる等の意。

【瓢遊】ヘウイフ。飄風にふかれてうごく。軽くひら／＼あがるさま。〔詳漢辭〕こはひらひらと飛びあそぶ事。

【富嶽駿河の國に云々】職原鈔下ノ二三〇に「孝靈帝五年六月、近江湖水始湛、而駿河富士山始涌出。」又史籍集覽長見聞集、七十二「此の山は人王七代孝靈天皇の御宇に一夜にゆしゆつせしとなりき。」又扶桑拾葉集篠枕に「昔年孝安皇帝の時に、此の國の東南に當りて雲霧俄に起り、地の震ふ事數百里なりしが、夜の間此の山崛起涌出すといへり。」等之等の傳説記事によつても、富士山が俄に地

上に表れて、琵琶湖が出来たといふ昔からの傳説のあつた事がわかる。

【崛起】クツキ。そばだちおこる。〔字源〕

【天涯】テンガイ。そらのはて、そらのきはみ。〔廣韻〕

【山嶺】サンレイ。山のいたゞき。

【風流】フウリウ。みやび、すき。〔音義〕又俗事をすて、高尚な遊をなすこと。〔詳漢辭〕

【人鷹】ヒトマロ。柿本人麻呂。有名の歌人。其先は天足彦國押入命より出たといふ。その傳は明かでない。持統文武の二朝に事へ、駕に従うて紀伊、伊勢、吉野に行き、又近江の舊都を訪ひ、石見、筑紫に赴任し、晚年石見で歿した事がその作歌によつて知られ

る。人麻呂が萬葉時代を代表する一統の歌人であるのに、歴史にその事蹟の見えてないのは、官位の低い人であつた爲であらう。墓は大和添上郡に在りとあるが之は不明である。

又石見國美濃郡小野村大字戸田に柿本神社といふのがあつて、彼の出生地と傳へられてゐるが之も信じ難いものである。萬葉集中には人麻呂の富士の歌は一寸見ない。拾遺集十卷に、人麻呂の歌として「千早振神も思のあればこそ、年へて富士の山もゆらめ。」又柿本集下、「ふじのねの絶えぬ思をするからに、常磐に燃ゆる身とぞ成りぬる。」然しこれは駿河へ行つて詠んだものではない。柿本集や拾遺集に、「田子の浦の底さへ匂ふ藤波を、かざし

て行かむ見ぬ人のため。」とあるが、萬葉では家持の歌となつてゐる。人麻呂が不盡山の邊に遊んだことも不明である。

【西行】サイギヤウ。法師、本族は佐藤。名は義清、鎮守府將軍藤原秀郷の子孫左衛門尉康清の子。累世武を以て著はる。義清勇敢にして射を善くし頗る韜畧に通ず。鳥羽上皇に仕へ北面士となり、左兵衛尉に任ぜらる。和歌を嗜み、上皇其の才を深く愛せらる。然れども西行榮利を喜ばず、常に遁世の志あり。遂に嵯峨にて僧となり、圓位と號す。時に二十三才。それより専ら歌と信仰の道に精進し、諸國を飄流して、建久元年二月十六日歿す。年七十二。其の集を山家集と曰ふ。又御

裳濯川歌合、撰集抄等あり。並に世に行はる。

〔人名〕 尙くはしい傳は、第十七横雲の所に於てしるす。西行の富士に對する歌には、「風になびく、富士の煙の空にきえて、行へも知らぬ我思哉。」「いつとなき思ひはふじの烟にて、おきふす床やうきしまがはら。」「清見がた、月すむよはのうき雲は、ふじの高根のけぶりなりけり」等がある。

【芭蕉】 バセヲ、俳聖、初め金作と稱し後甚七郎、最後に忠左衛門、風羅坊、桃青等の號あり松尾氏、伊賀の人、津侯に仕ふ。幼にして穎悟、長じて老莊禪學を修め俳諧を好みて、北村季吟に學ぶ、僧西行の風調を慕ひ夙に遁世の志あり竊に請ふ一功を樹てゝ去らんと。會

藤堂の命を受けて江戸小石川の水路を修む。甚七工夫を董して功を成し即日病と稱し暇を告げて去る。一説に云く芭蕉少うして伊賀老臣藤堂良精其の子良忠二世に仕へて良忠に寵あり。良忠早世するに及びて追悼已まず、遂に遁世の志を發し數々致仕を乞へども許されず因て自ら去る。時に年二十三、京都に往きて北村季吟に従學す。庵を深川に結び髪を剃りて、天々軒桃青（一説風羅坊桃青）と號す。時に延寶八年、年三十七、天和三年深川火起りて庵燼す。乃ち甲斐駿河の間に歴遊し後ち深川に還り、一室を造り居る。芭蕉一株を栽う。年を経て茂殖繁衍す、桃青愛翫し遂に以て自ら號とす。貞享四年秋鹿島に遊び明年大

和を巡り、元祿二年陸奥に往き、七年秋伊賀に在り、大阪を経て將に南都に赴かんとす。

十月十二日病みて大阪に歿す。年五十一。芭蕉俳諧に於て、其の妙奥を極め、自ら一機軸を出だす。名聲高く門人も多し。畫をも嗜み、門人許六に之を學ぶ。所作の文章は風俗文選に見ゆ。〔人名〕 尙著書は、七部集（春日、冬の日、續虚栗、ひさこ、猿蓑、炭俵、續猿蓑）奥の細道、幻住庵記、曠野集、鹿島紀行、嵯峨日記、初懷紙、のざらし紀行等がある。芭蕉の富士に對する句には、「霧時雨不二を見ぬ日ぞおもしろき。」又奥の細道の初に、「彌生も末の七日、曙の空朧朧として、月は有明にて光り收まれるものから、不二の峰微か

に見えて、上野谷中の花の梢またいつかはと心細し。」等がある。

【形なく像なく記念碑】 詩歌の事をさす。

【附加】

尙一段と二段との間に原文には次の節がある。

「花には花に弄せられざるもの誰ぞ、月に翫ばれざるもの誰ぞ、風狂も亦た一種の變調子、風狂も亦た一種の變調子ならざる事を得む。暗冥間いかにして變調子ならざる事を得む。暗冥なる「死」の淵に、相及び相襲ぎて沈淪するもの、果して之れ人間の運命なるか。舌能く幾年の久しきに辯ぜん、手能く幾年の長きに支へん。辯するところ何物ぞ、支ふるところ

何物ぞ。わが筆も亦何物ぞ。言ふ勿れ蒼鬱たる森林幾百年に亘りて巨鷲を宿らすと、言ふ勿れ豊公の武威、幾百世を蓋ふと、嗟何物か終に盡きさらむ。何物か終に滅せさらむ。寤めざるもの誰ぞ、悟らざるもの誰ぞ、損喪せざるもの竟に何處にか求めむ。

寤果して寤か、寤果して寐か、我是を疑ふ深山夜に入りて籟あり、人間晝に於て聲なき事多し。寤むる時人眞に寤めず、寐る時往々にして至樂の境あり。身體四肢必らずしも人間の運命を示すにあらず、別に人間大に施爲する所あり。潜に思ふ、終に寤ざるもの眞の寤か、終に寐せるもの眞の寐か、此邊に達するは人間の容易く企つる能はざる所なり。愛す

べきものは夫れ故郷たるか、故郷には名狀すべからざるチャームの存するあり。風流雅容を嘲るもの、邦家を知らざるの故を以て彼等を貶せんとする事多し。故郷は之れ邦家なり、多情多思の人の尤も邦家を愛するは何人か之を疑はむ。孤劍提げ來りて以太利の義軍に投じ一命を惡疫に委したるバイロン我れ之を愛す。請ふ見よ、羅馬死して羅馬の遺骨を幾千萬に傳へ死して猶ほ死せざる詩祖ホーマーを。邦家の事曷んぞ長舌辨士のみ能く知るころならんや、別に滿腔の悲慨を滿へて生死悟明の淵に一生を憂ふるものなからずとせんや。俗物の尤も喜ぶところは憂國家の稱號なり。

而して自稱憂國の作するところ多くは自儘なり、彼等は僻見多し、彼等は頌曲多し。彼等は復讐心を以て事を成す。彼等は盲目の執着を以て業を急ぐ。彼等は夢幻中の虚想を以て唯一の理想となす、彼等の慷慨彼等の憂國多

くは彼等の自ら期せざる渦流に巻き去られて終ることあるものぞ。」以上である。教科書と合せ讀めば以て透谷の富嶽に對する情想が一層はつきりすると思ふ。

鑑賞

多感多情の詩人透谷が、流轉生滅きはまりないはかない人生を歎じ、恒久的存在を欲して、そして遂に悟り、感じ得た永遠の姿がこの山に外ならなかつた。しかもそれは、往昔の我々の祖先の人々がたてゝくれた形なき像なき記念碑がこの「永遠」探究者の透谷にまさしくと見せつけたのである。こゝに於て彼の情熱は、うれしさに高じ、空かける様な、非常な意氣込をもつて、一本調子にその恒久不變者をたゞへ出してゐる様である。しかも之が我が國家の象徴であり、國民文化の淵源であると觀するや、彼の心に愛國の思ひが湧然とみなぎつてしまつてゐる。それ等の感じが、此の文によつて讀者の感情を、非常に高めて來る様に思はれる。

かうした書き方によつて、彼は現實のうるささから遠く離れて全く理想の世界の人となつてゐる事

がよくわかる。如何に彼がローマンチックな性情であり、多情にしてしかも意氣溢るゝ様な慷慨家であつたかが、この文によつて、はつきり知られる事と思ふ。かく彼は宇宙の眞理を考究するよりも、むしろ、刻感した所に、やはり詩人として貴い所があると思はれる。

この文の中に、普通でない漢語や、造語と思はれるものが多く、史實上どうかと思はれる事のあるのは少々欠點とも云はれるが、しかし熱した勢によつて書かれた事だらうから、やむを得ぬ事と思ふ。

参 考

透谷が彼自身を主人公とせる如く思はれる「蓬萊曲」に於て、主人公の言葉をかりてかういつてゐる。

「唯わが心は時に離れ間に隔り、恰も彼の芒星と呼ばるゝ星の

己れの軌道を、何に物煩なく驅奔る如きをこそ、樂しまんとするなれ。

この退屈の世、この所業なきの世、この偽形の世、この詐猾ヤクワツの世、この醜惡の世、この塵芥の世
いかで己の心をひと時息む可き」(略)

又廿五年の作「三日幻境」に「我性尤も俠骨を愛す而して今日の社會まことの俠骨を容るるの地な

くして……(以下略)又、「われは極めて狂人に同情を有するものなり。かつて狂者それがしの枕頭にあること三日己れも之に感染するばかりになりて堪へがたかりし事ありしが、今も我狂人と共に長く留まる事能はず……」尙島崎藤村が透谷全集の序に「亡友反古帖」としてのべてゐる一節「飄遊を好める面白き男として彼を知れるものもあるべし。俠骨を愛し慈善を好みたる志士として彼を知れるものもあるべし。外面極めて飄逸にして内部極めて沈鬱なる詩人として彼を知れるものもあるべし。自然の研究者として靈活なる評家として彼を知れるものもあるべし……云々。」以上以て彼の性情の一端が伺はれると思ふ。

この教科書中にある北村透谷の寫眞及びその筆蹟は何れも全集中に入る。殊に「折れたまゝ」咲いて……」の句は如何にも彼自身の性格がそのまま表されてゐる事が感じられる。

富嶽の歌

「詩神」の一節

嗚呼東海の君子國、史は百王の跡遠く

二千餘年の春ふけて斯文の華の遅くとも

香はかんばしき千載の未來の望無からんや

八 富嶽の詩神を思ふ

群蠻遠く下に見る芙蓉の姿雪の膚

清きは民の心たれ高きは民の思たれ、

積水淵を湛へてはうち蛟龍の湧くがごと

積塵山を築きてはかみ風雲を捲くがごと

長きに忍ぶ此邦の理想は實と現はれて

天地無窮の「美の靈」に民の融化し入らんとき、

扶桑の俗を改めて八采の芙蓉比なき

影東海の波のへに萬邦の仰ぎ視なんとき、

其時今にほのみせて靈山の空明けわたる。」

——土井晚翠、曉鐘より——

北村透谷批評

「詩人としての彼れは、理想の光りにあこがれ、ロマンチックの夢を求め、悩み苦みを重ねた人であつた、さうした中から出た彼れの哀痛な詩想はあり餘るほどあつた。そして彼れはそれをちつと胸のうちに蓄へて、よく練め、十分醗酵させる丈の餘裕を持ち得ないで直ぐに情感の迸る儘に紙の

上に書き付けた。其處に彼の長所もあり短所もあつた。(以下略)

「又文藝評論家として透谷は宗教的、情熱的の評論家で、功利を排し、實用を斥け、靈性若くは内部生命の價值と權威とを高調した。彼れの眼には、内部生命を有する文學でなければ何等の價值がなかつた。内部生命の源を深く掘りあて、ゆく文學、さうした生命に觸れた藝術を彼れは尊重した。其處に彼れの個性が反映されて居た。其の個性を彼れはいつ迄も守り立て、特殊性を保つたのである。」(高須芳次郎「現代文學十二講」より)

挿 繪

【靈山富士】(五五頁) 野田九浦筆。大正七年文展十二回出品畫「靈山緣起」。圖は六曲一双の屏風で、半双には一夜のうちに出來した富士の姿に驚いてゐる人々を描いてゐる。この話は職原鈔その他に記されてゐて、この繪もその時代即ち上代の風俗を描いてある。(解釋の部参照。)野田九浦は名を道三といひ、廣業の弟子であつた。帝展委員審査員として立ち、清秀優雅な作風を以て自家を守つてゐる。しかも近年は筆墨に於て特に強みを出すに努めてゐる。氏は天保安政年間に知られた儒者野田留浦の孫にあたる人である。